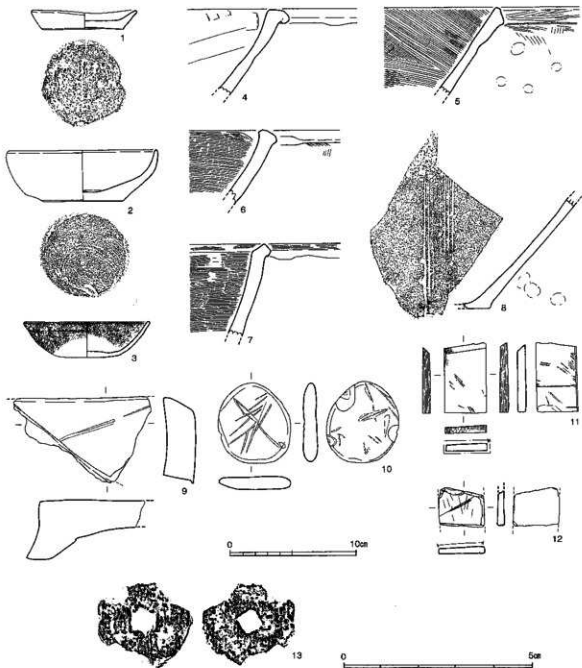


06-SK120出土遺物(第3-249図)

1は七師器掬である。内外面ともに横位のヘラミガキを施すもので、古代の遺物である。2は瓦質土器の鉢である。



第3-251図 O6-SK129出土遺物実測図(1/3・1/1)

O6-SK129 (第3-250図)

2区のO61グリッドで検出した土坑である。南北に細長い溝状を呈し、長辺6.00m、短辺2.08m、深さ0.49mを測る。土坑の一端はO6-SK076に切られる。埋土は4層に分層でき、いずれも炭を含む。遺物は土坑の中ほどから南半部にかけて散発的に出土しているが、量は多くはない。出土遺物から遺構の年代をⅡ期(14世紀中頃～末)に位置付ける。

06-SK129出土遺物 (第3-251図)

1は土師器小皿である。2は在地の土師器杯で、底径に比して口径が大きく、口縁は内湾する。京都産土師器 3は白色胎土で薄手の土師器皿で、内外面ともに煤が付着する。京都産土師器の可能性が高い。4～6は瓦質土器の鉢で、5・6は内面にハケ目調整を密に施す。7は瓦質土器の鍋である。8は瓦質土器の摺鉢で、内面に8条1単位の摺目を施す。9は瓦の一辺を斜めに切断した切隅瓦である。切隅瓦 10は円形の凝灰岩の3箇所打ち欠きが見られるもので、石鐘であろうか。11・12は磁石である。13は銅銭であるが、銭文は判読できない。

06-SK131 (第3-252図)

大型の土坑 1区と2区にまたがって検出した大型の土坑である。北はL61～N61グリッドから、南はM63・N63グリッドにかけて位置するもので、長辺約25.7m、短辺約18.2m、深さ約1.3mを測る。06-SD302や06-SD130・06-SD221等と複雑に重複しており、本土坑が06-SD130・06-SD221を切り、06-SD302に切られている。底面には各所に土坑状の浅い掘り込みがあり、複雑な状況を示す。また、2区では数箇所木杭が出土しており、何らかの土留めがなされていた可能性がある。また、1区では土坑の東半部で、土器や瓦・磚とともに多数の凝灰岩切石が出土している(第3-255図)。これらの石材は東側から西側に傾斜した状態で出土しており、東側から投棄されたものと考えられる。石材はほとんどが長方形に加工され、面を意識した調整がされたものもあることから、何らかの施設に伴う基礎化粧等に用いられた可能性もある。こうした遺物の出土状況から、本土坑は廃棄土坑と考えられる。遺構の年代は出土遺物からV期(16世紀前半)に位置づける。

数箇所木杭が出土
多数の凝灰岩切石が出土
東側から投棄

基礎化粧
廃棄土坑

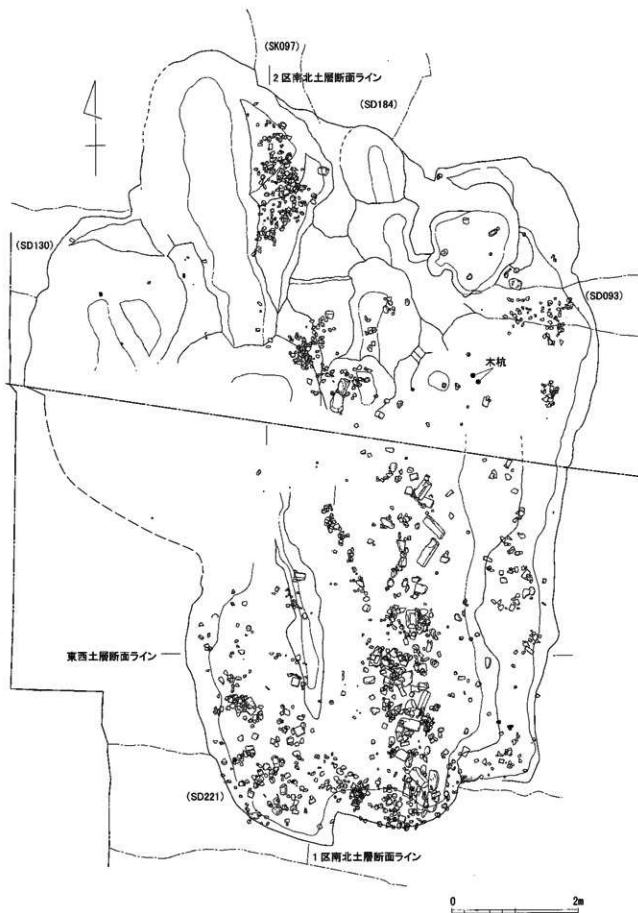
06-SK131出土遺物 (第3-256図～第3-284図)

1は白磁碗である。口縁部は外反し、高台から高台内にかけて切込みを施す。2は薄手の白磁碗で、見込に印花文を施す。3は白磁碗で、内面に段状の沈線が1条巡る。玉縁碗の底部であろう。4は白磁皿、5・6は白磁の煎類である。7・8は青磁碗で、7は内面に印花文、8は見込に魚文を施す。9～12は無文の青磁碗で、9は見込に小磁文、10は草花文を施す。10は06-SD302B、11は06-SX049出土の破片とそれぞれ接合する。13は青磁碗で、内面に雷文を施す。14～17は青磁碗の底部で、15～17は見込に草花文を施す。18は青磁皿の底部である。19・20は青磁皿で、19は高台内に「徳」字の朱墨書が見られる。21～25は青磁の盤である。26は朝鮮王朝産の象嵌青磁である。27は漳州窯の青花碗で、見込は蛇の目軸割ぎを施す。壁の崩落土からの出土であり、上部からの混入の可能性が高い。28は瑞瑠釉の香炉で、外面の釉薬は被熱により気泡が生じている。29は磁窯産の壁、30は褐釉陶器の壺である。31～33は中国産天目碗で、32は高台に「乗」字の朱墨書が見られる。34は外面に1条の沈線を施す陶器片で、中国南部産であろうか。35・36は陶器の壺ないし甕で、36は内面の釉薬が二次焼成を受けている。37～39は同一個体の陶器壺である。06-SK131と重複する06-SD221・06-SD090からも出土しており、特に39は06-SD090から出土していることから、本来は06-SD090に帰属するものであろう。中国南部産でコンテナ容器として使用されたものである可能性が高い。40・41は備前焼の甕で、口縁部を折り返して玉縁状に作る。42は備前焼の壺であろう。43～54は備前焼の摺鉢である。口縁部形状はバリエーションがあり、断面三角形となるもの(46・48)、三角形から上方に伸びるもの(47・49～51)、「く」字状に折れ上部に長く伸びるもの(52～54)に分けられ、15世紀前半～16世紀前半のものを含む。

「徳」字の
朱墨書
朝鮮王朝産
の象嵌青磁
瑞瑠釉の香炉
中国産天目碗
「乗」字の
朱墨書

コンテナ容器

55～195は土器類である。55～86は在地の土師器小皿及び小杯である。煤が付着するものが多く、62・75は器面のほぼ全面に付着する。78・86は器面に穿孔が認められる。88～97は土師器杯である。95は見込みに明瞭なナデ痕跡が残る。98～104は口縁が外に開く皿形の土師器である。赤



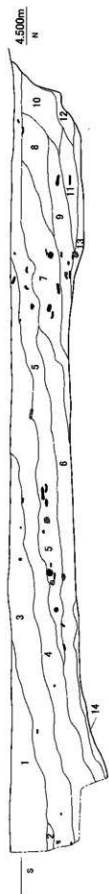
第3-252図 06-SK131実測図 (1/120)

1区南北ペルト西面(反転して図示)



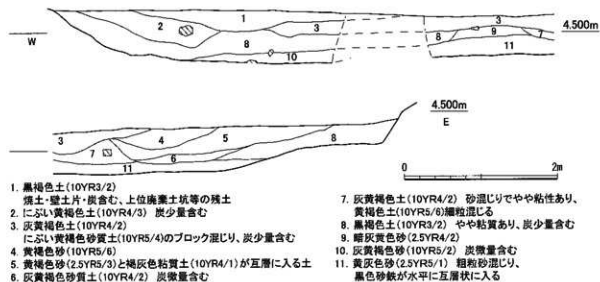
1. 黒褐色土(10YR3/2) 粘土・塵土片・炭を含む、上位腐葉土状等の残土
2. 灰黄褐色土(10YR4/2) にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4)のブロック混じり、炭少量含む
3. 灰黄褐色土(10YR4/2) 小礫混じり、炭少量含む
4. 黒褐色土(10YR3/2) やや粘質あり、炭少量含む
5. 灰黄褐色土(10YR5/2) 細粒砂層、黒色の砂核が互層状に水平に入る
6. 灰黄褐色砂(10YR5/2) 炭核を含む
7. 褐色土(10YR4/1) シルト質で粘性強い、炭核を含む
8. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 酸化鉄分・炭少量含む
9. 灰黄褐色土(10YR4/2) にぶい黄褐色土(10YR5/4)炭少量混じる
10. 褐色粘板土(10YR4/1) 炭少量含む

2区南北ペルト東面



1. にぶい黄褐色土(10YR6/3) やや砂質、粘土層状、炭少量含む
2. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 灰褐色粘土(7.5YR5/2)がブロック状に入る
3. 灰黄褐色土(10YR4/2) やや砂質で若干粘性を帯びる、粘土層状、炭少量含む
4. 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂質土で粘性あまりなし、粘土層状、炭少量含む
5. 黄褐色土(10YR3/2) 砂質土で粘性弱い、炭少量含む
6. 黒褐色土(10YR3/2) 粘質土と砂が混じった層で粘性弱い、炭少量含む
7. 黒褐色土(10YR3/2) 粘質土と砂が混じった層で粘性弱い、炭少量含む
8. 黄褐色土(10YR3/3) 炭中量含む
9. 黒褐色土(10YR3/1) やや砂質で粘性あり、炭中量含む
10. にぶい褐色土(10YR5/3) 砂質土で粘性なく強い、炭少量含む
11. 黒褐色土(10YR3/2) 粘質土に砂が多く入った層で粘性弱い、炭少量含む
12. 褐色土(10YR4/1) 粘質土に砂が多く入った層で粘性弱い
13. にぶい黄褐色砂(10YR4/3) 地山砂混じる
14. 灰黄褐色砂(10YR4/2) 地山砂混じる

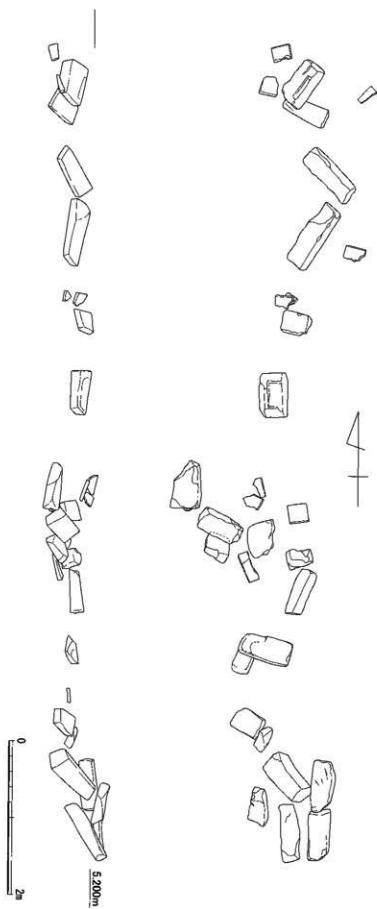
第3-253図 06-SK131南北土層断面図(1/50)



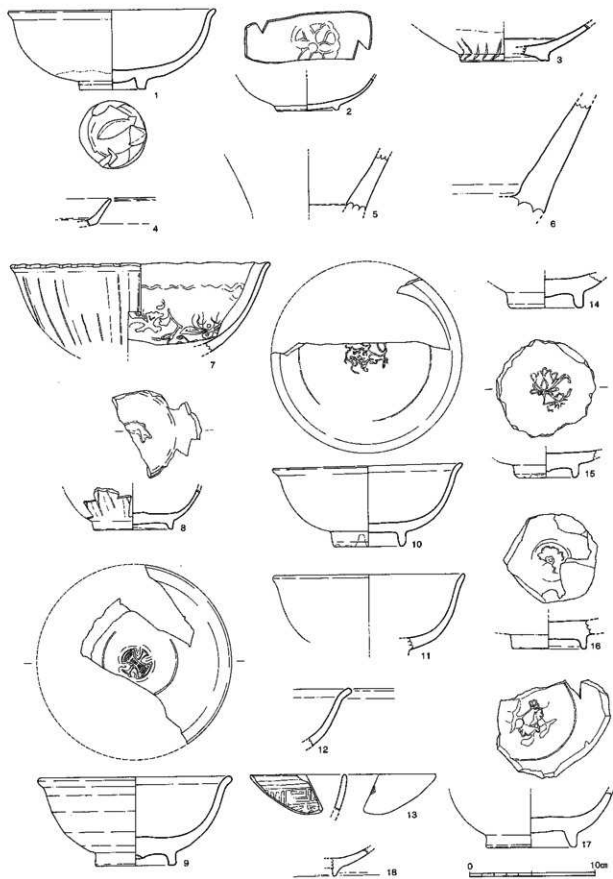
第3-254図 06-SK131東西土層断面図(1/50)

- 大内系土師器 橙色の胎土で、口縁部に煤が付着するものが多い。105～107は薄手で白色胎土の大内系土師器皿である。106はロクロ整形による凹凸が目立たないのに対し、107は顕著な凹凸が認められる。106は大内Ⅱ式(15世紀前半)、107は大内ⅢA式(15世紀中頃～末)に比定されよう³⁹⁾。108～113は赤褐色の胎土で内面にロクロ整形による多条の沈線が巡る在地の土師器皿である。114は京都系土師器皿である。京都系土師器は他に認められず、06-SK131の上位に16世紀後葉の遺構が複数存在することから、混入の可能性が高い。115・116は土師器の燗である。117は吉備系土師器碗、118は瓦質土師器の碗で、高台内に線刻を施す。119は土師器の鍋である。120・121は弥生土師器の甕、122は弥生時代終末から古墳時代初期の複合口縁壺で、胴部のベルト状凸帯の破片である。123は土師器の二重口縁壺、124は土師器甕、125は土師器の小型丸底壺、126は土師器高坏の脚部、127は土師器の移動式甕の破片、128は須恵器甕、129は須恵器の高台付坏である。130は東播系須恵器甕で、外面に細かいタタキ目が残る。131～195は瓦質土器で、131～143は深鉢形火鉢である。131・132は同一個体であろう。144・145は方形の火鉢で、145は底部に脚が付く。146～153は口縁が直口する浅鉢形火鉢である。148は外面にヘラ書きの「寮」字の刻書がある。154～164は口縁が内湾する浅鉢形火鉢である。154～156は口縁下の凸帯区画にスタンプ文を施す。163・164は底部の3箇所に柱状の脚が付く。163は06-SX095出土の破片と接合する。165～170は風炉である。165は壺形の器形で、胴部に風門を配する。166は口縁が内湾し胴部は直線的な器形で、凸帯間に菱形のスタンプ文を施し、胴部上位には円形の風門を配する。167は深鉢形で、方形状の風門の一端が残る。168～170は165と同様の器形になるものと考えられる。171・172は口縁が内傾するもので、風炉又は火鉢であろう。171は2段のスタンプ文、172は木の葉文を施す。173～178は火鉢又は風炉の凸帯部の破片である。179～184は脚部で、火鉢又は風炉の可能性が考えられる。185～187は摺鉢、188は羽釜、189は香炉である。190は草瓶であろう。191・192は器種不明の脚部で、香炉か草瓶の可能性が考えられる。193～195は亀形の瓦質土器である。193は前脚から首部で、頭部を欠く。194は胴部の右半部で、指は線刻で表現する。195は胴部右上の破片である。いずれも甲羅には亀甲形のスタンプ文を施す。それぞれが接合しないため、複数個体あるものと考えられる。なお、包含層から頭部と甲羅の一部が出土している。用途は不明ながら、亀趺の可能性が考えられる。
- 「寮」字の刻書
- 亀形の瓦質土器
- 亀趺の可能性

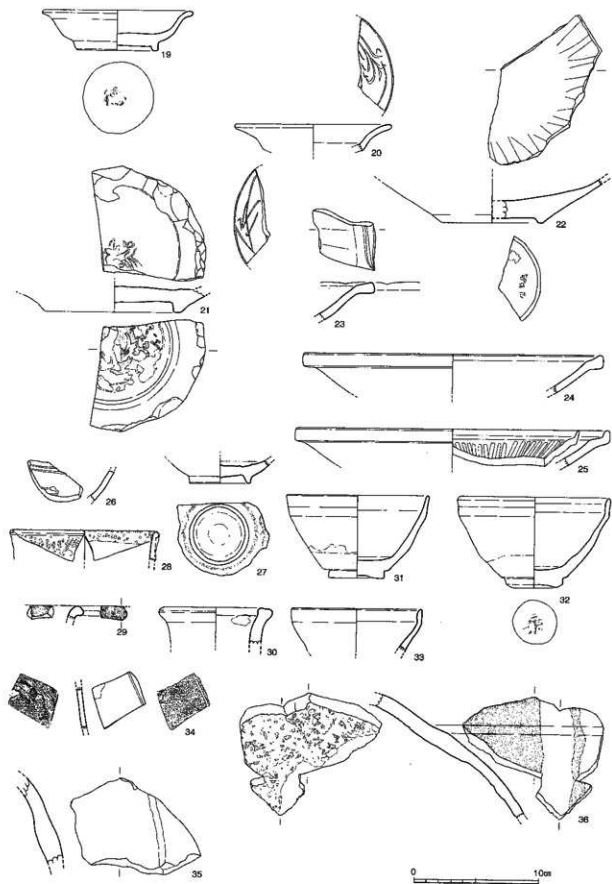
註39 北島大輔2010「大内式の成立」『大内氏と隆興』山口市歴史文化財調査報告第101集、山口市教育委員会



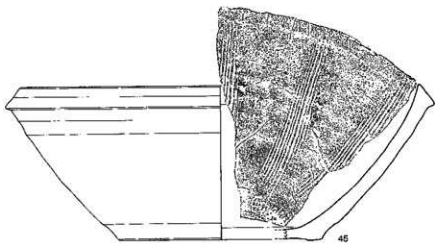
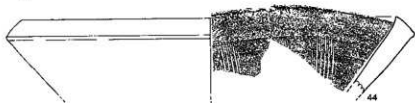
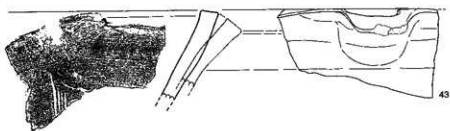
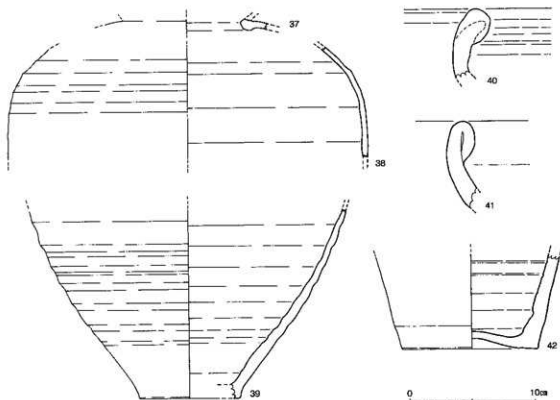
第3-255図 06-SK131石材等出土状況 (1/50)



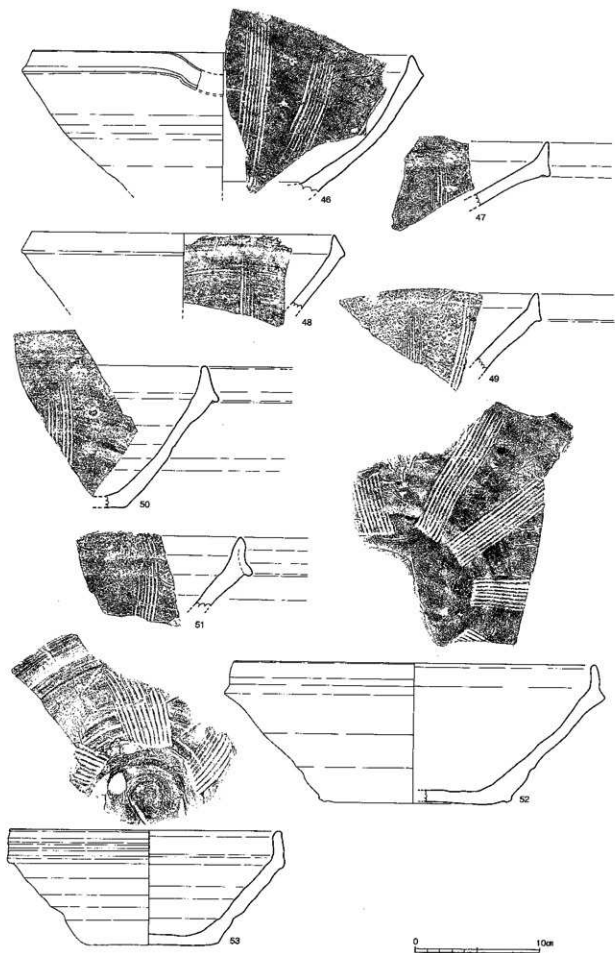
第3-256图 06-SK131出土遺物実測図①(1/3)



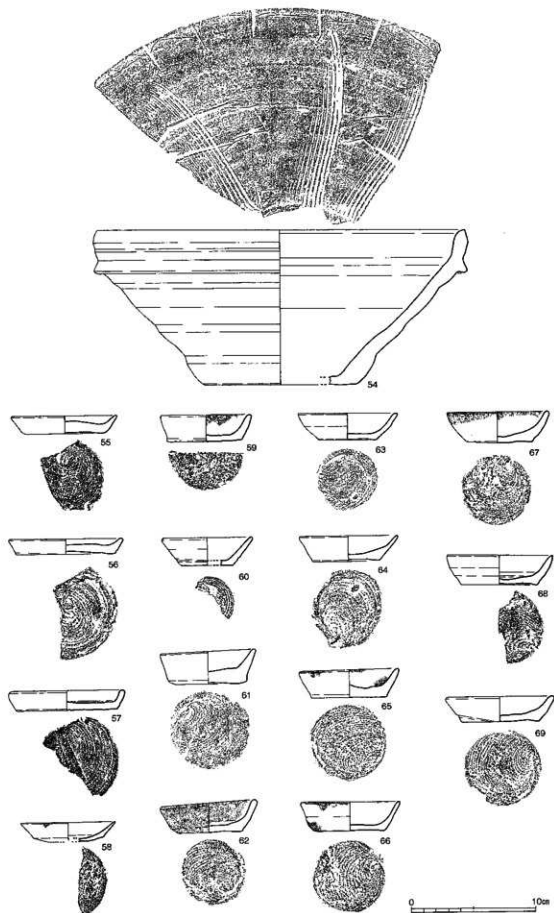
第3-257図 06-SK131出土遺物実測図② (1/3)



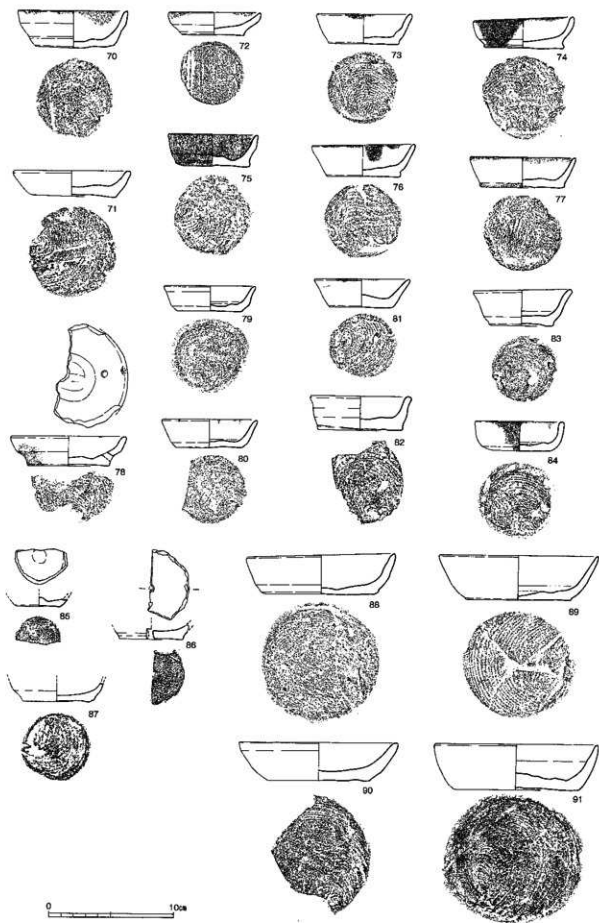
第3-258図 06-SK131出土遺物実測図③ (1/3)



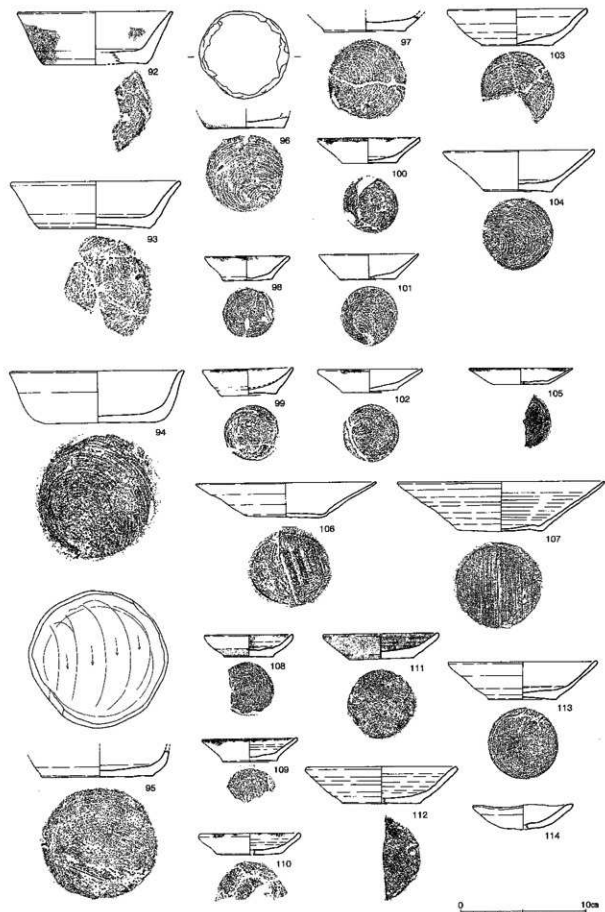
第3-259図 06-SK131出土遺物実測図① (1/3)



第3-260図 06-SK131出土物実測図⑤ (1/3)



第3-261図 06-SK131出土遺物実測図① (1/3)



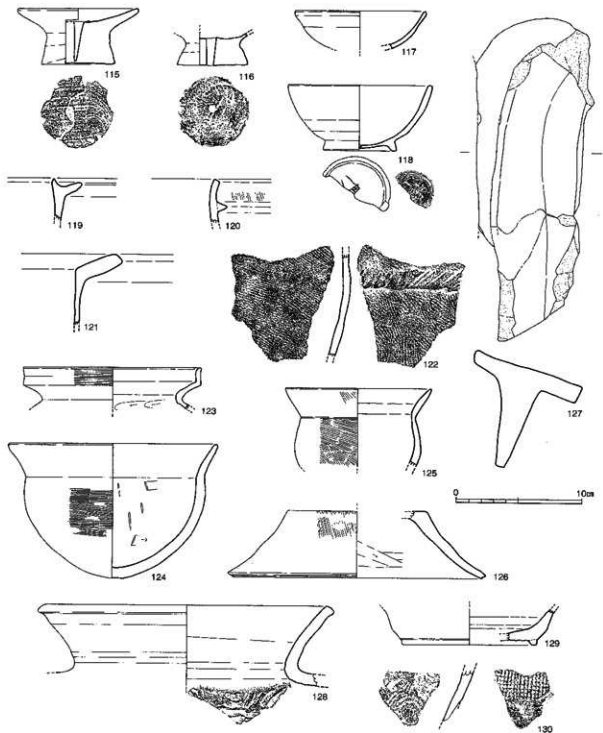
第3-262図 06-SK131出土遺物実測図⑦(1/3)

196～244は土製品・石製品・金属製品である。196は土師器杯の底部片を加工した土製円盤で、背面に回転糸切り痕が残る。197はミニチュア土器である。198は土玉状の土錘で、側面の一端に縦位の溝をもつ。199は両端に穿孔をもつ棒状土錘、200～208は管状土錘である。209は滑石製の石鍋である。210は有孔円盤で、凝灰岩を加工する。211は黒色石材を素材とするもので、上面に線刻を施す。視加工の割付線。視加工の割付線。212は硯で、赤間石を素材とする。213～224は砥石である。

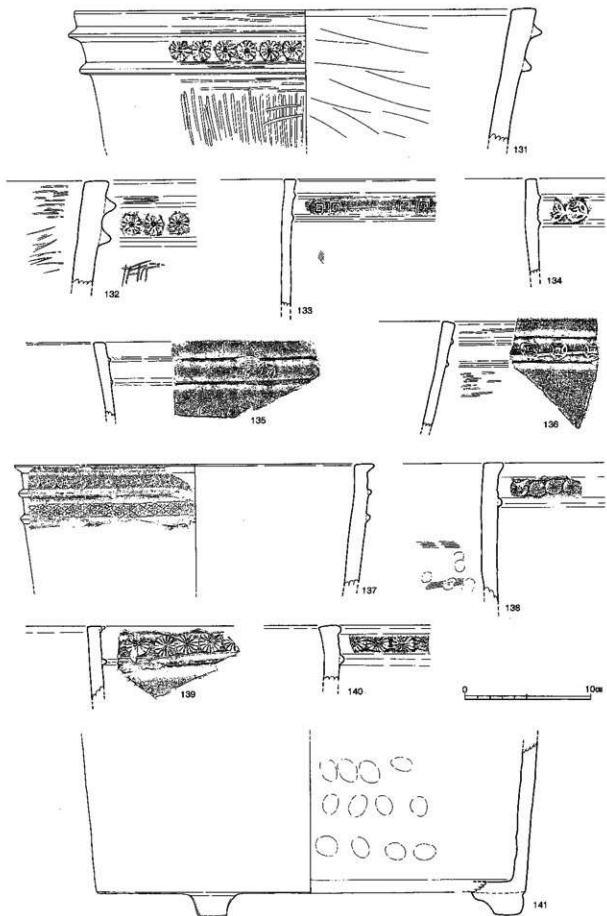
視加工の割付線

砥石の完形品

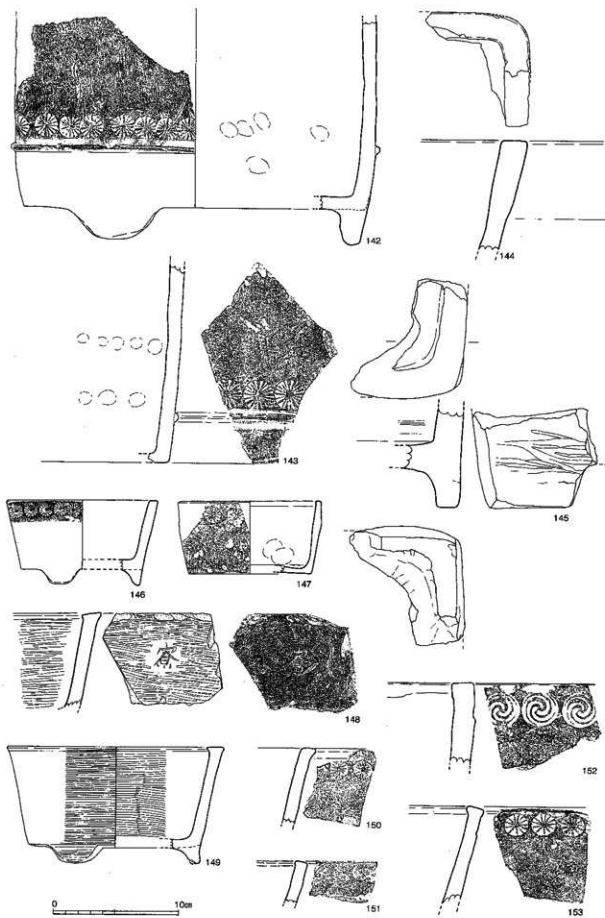
213は長方柱状の砥石の完形品で、各面に使用痕があり、使用面は平滑で光沢を持つ。素材は淡緑



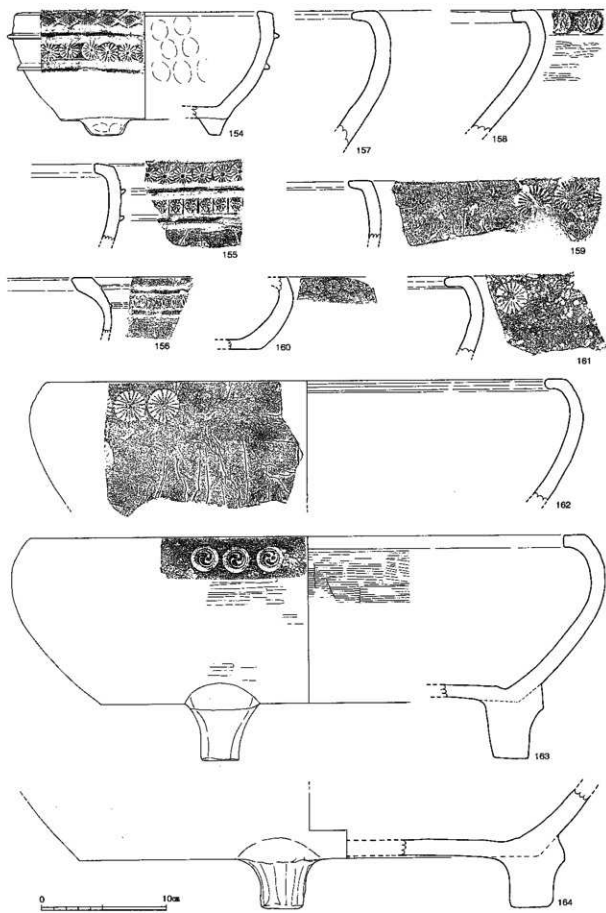
第3-263図 O6-SK131出土遺物実測図③(1/3)



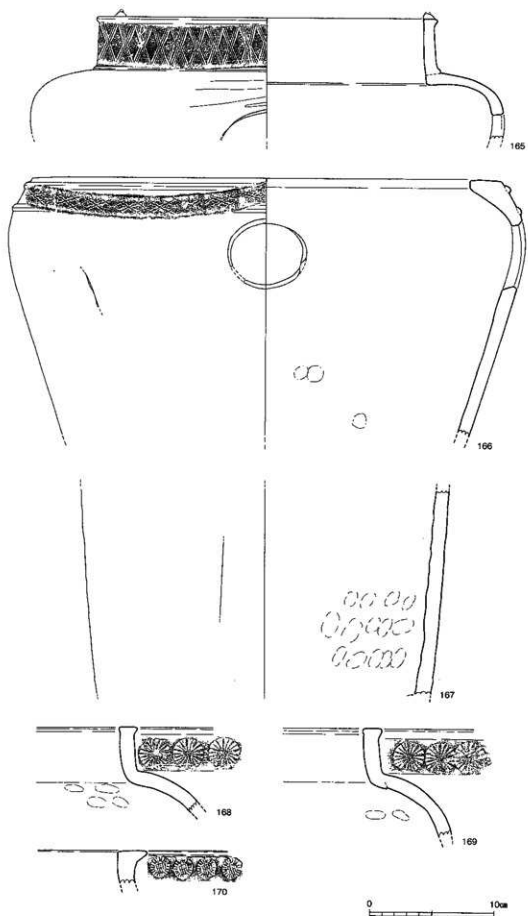
第3-264図 06-SK131出土遺物実測図⑨ (1/3)



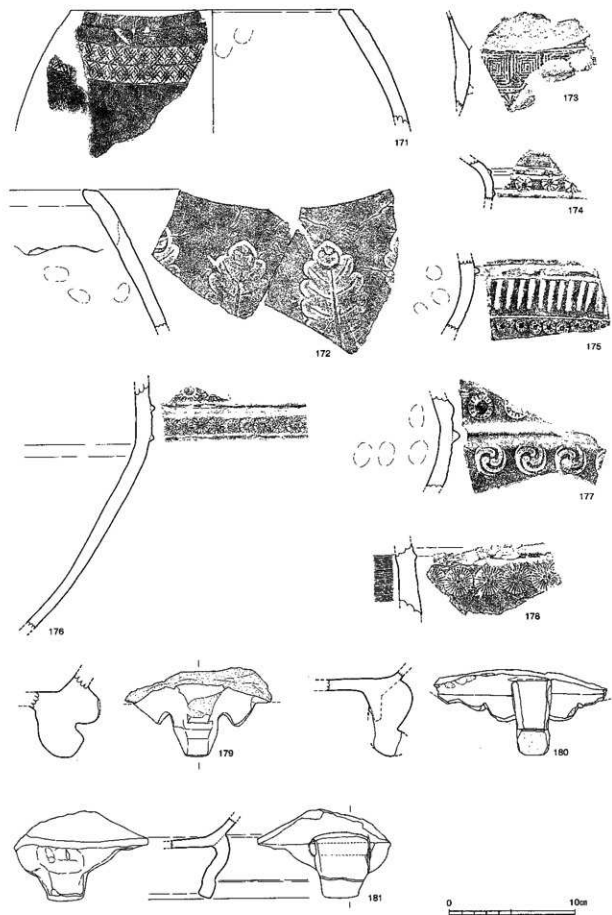
第3-265図 06-SK131出土遺物実測図[®](1/3)



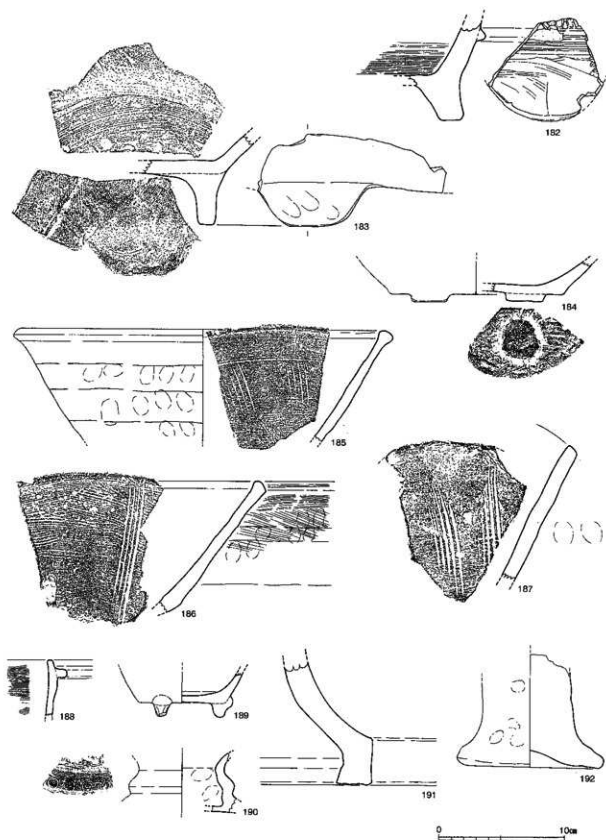
第3-266図 06-SK131出土遺物実測図①(1/3)



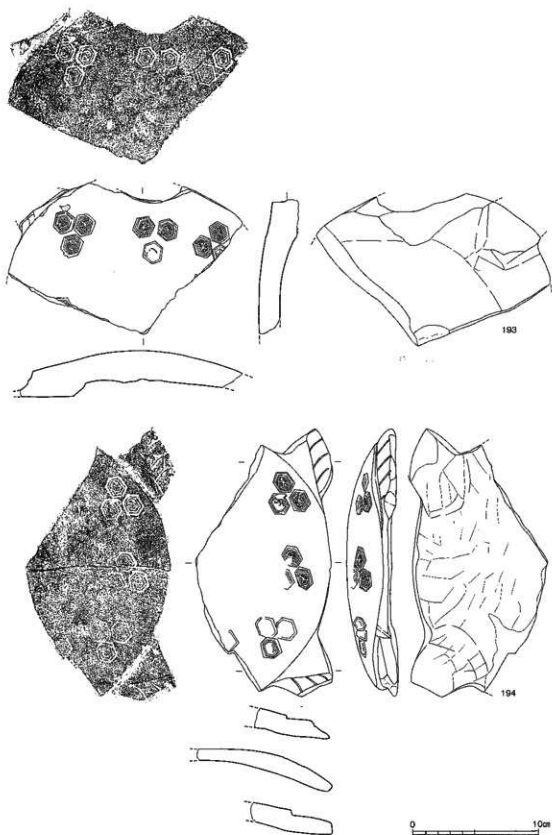
第3-267図 06-SK131出土遺物実測図②(1/3)



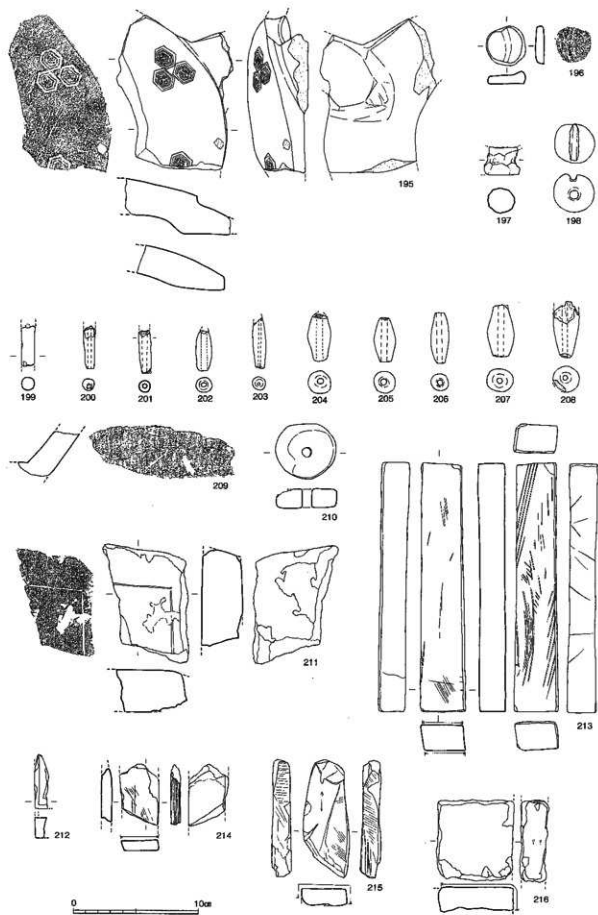
第3-268図 06-SK131出土遺物実測図⑧(1/3)



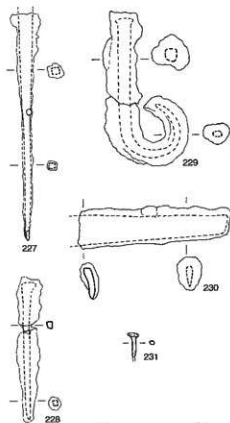
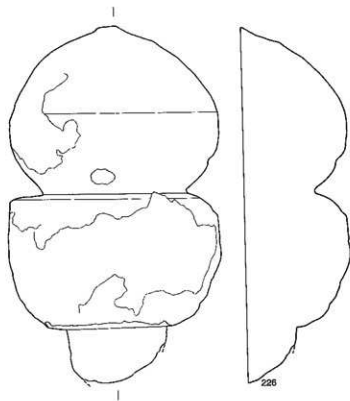
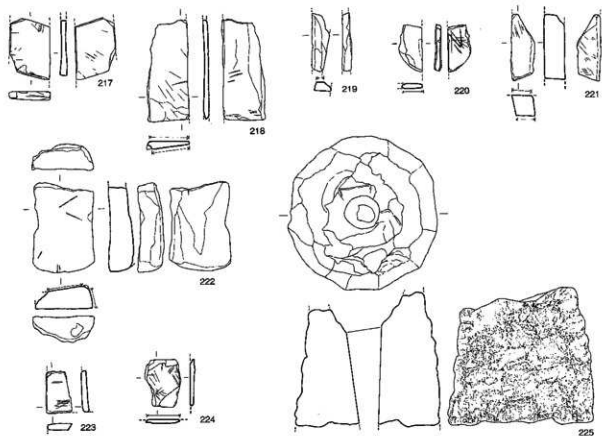
第3-269回 06-SK131出土遺物実測図④ (1/3)



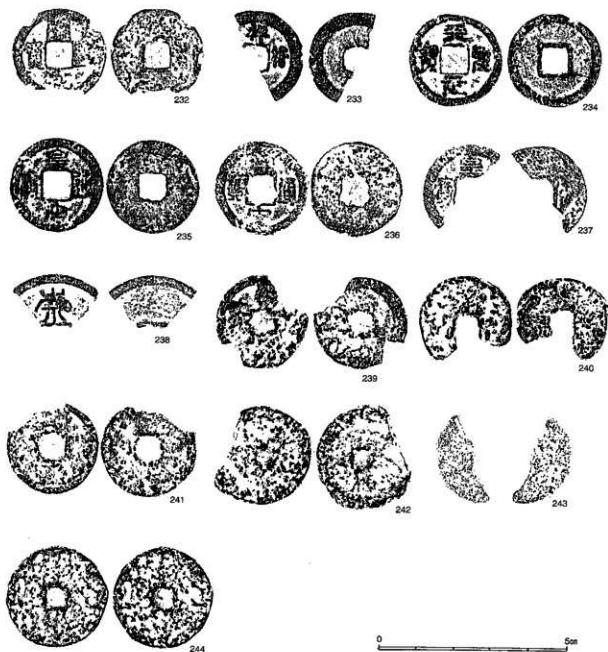
第3-270図 06-SK131出土遺物実測図⑨ (1/3)



第3-271图 06-SK131出土遺物実測図(1/3)



第3-272図 06-SK131出土遺物実測図① (1/3・1/4・1/2)



第3-273図 06-SK131出土遺物実測図⑧ (1/1)

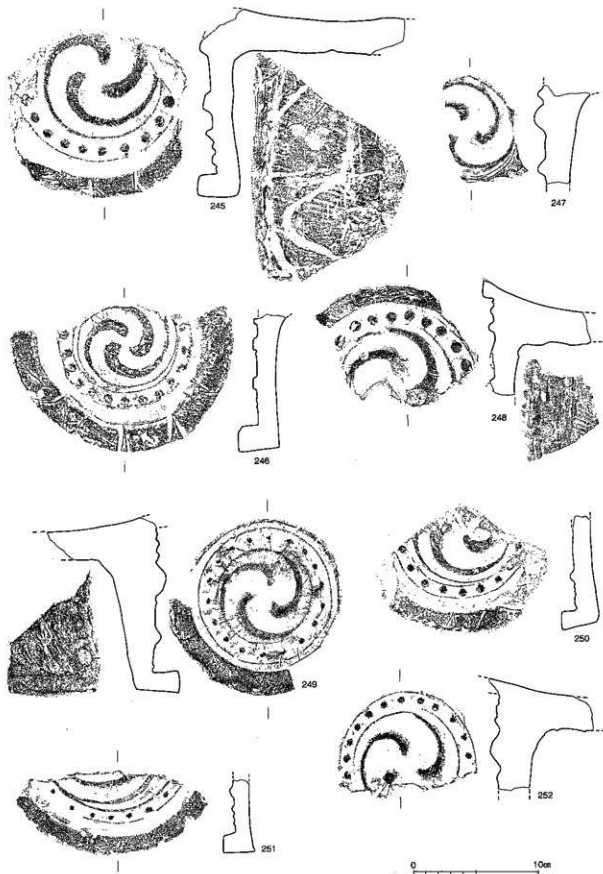
京都鳴滝産
組合式五輪塔

色の粘板岩で、京都鳴滝産の刃物仕上げ砥である。225は石製の鞘口で、側面を粗く打ち割って整形する。226は組合式五輪塔の空風輪で、石材は凝灰岩である。227～229は鉄釘、230は鉄製刃物、231は鋼製の鉄である。232～244は銅銭で、232は唐の開元通寶（621年初鑄）、233は北宋の祥符通寶又は祥符元寶（いずれも1009年初鑄）、234は北宋の天聖元寶（1023年初鑄）、235～237は皇宋通寶（1038年初鑄）である。238は「崇」字だけが書体や大きさから北宋の崇寧重寶（1103年初鑄）と判断される。239～244は銭文が判読できない。

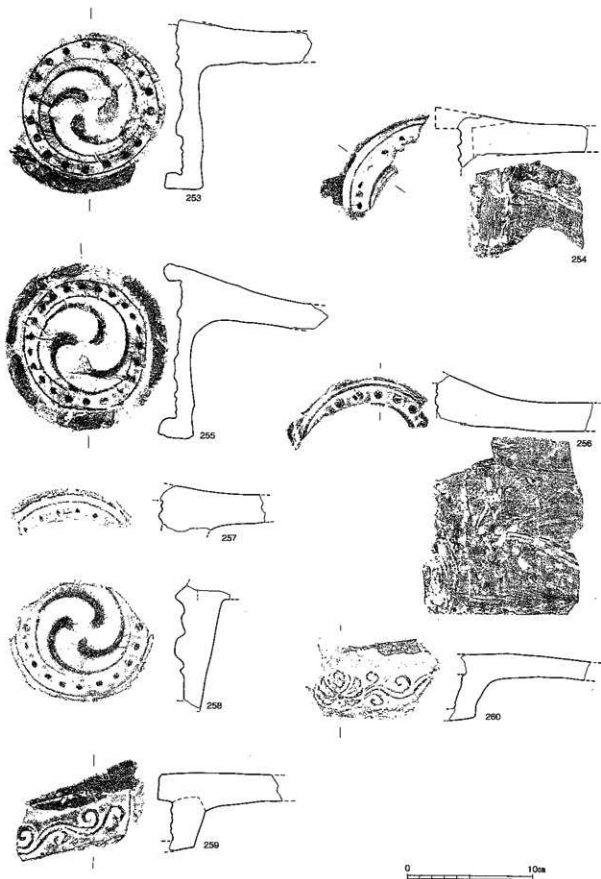
崇寧重寶

245～282は瓦類である。245～258は軒丸瓦で、瓦当中央に右巻きの巴文とその周囲に珠文を施すが、251は巴が左巻きで他とは異なる。珠文は249は18点、253は19点、255は22点を数える。外区運華唐草文 圓線を持たないものはない。259～265は軒平瓦である。259～262・264は運華唐草文を施すもの

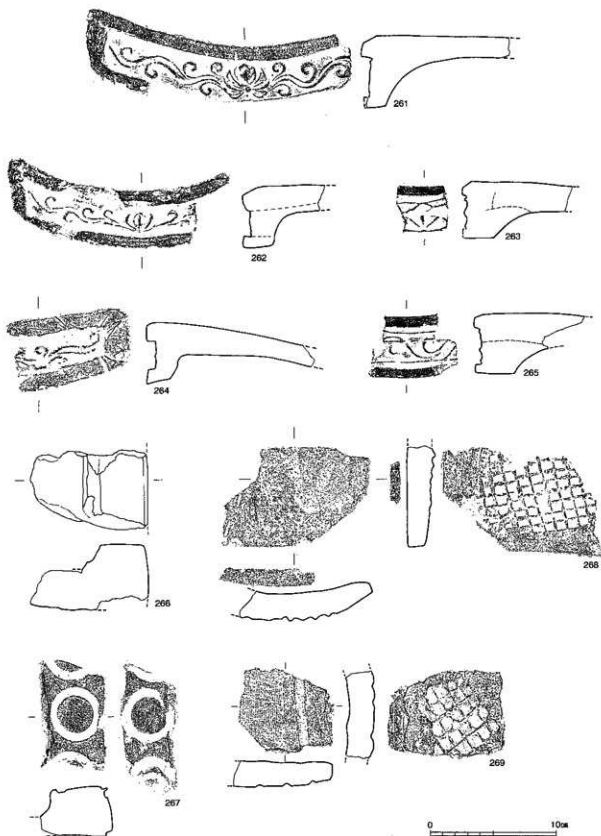
230 視及び砥石については石川県歴史文化センターの国内先代部氏から複製示を得た。



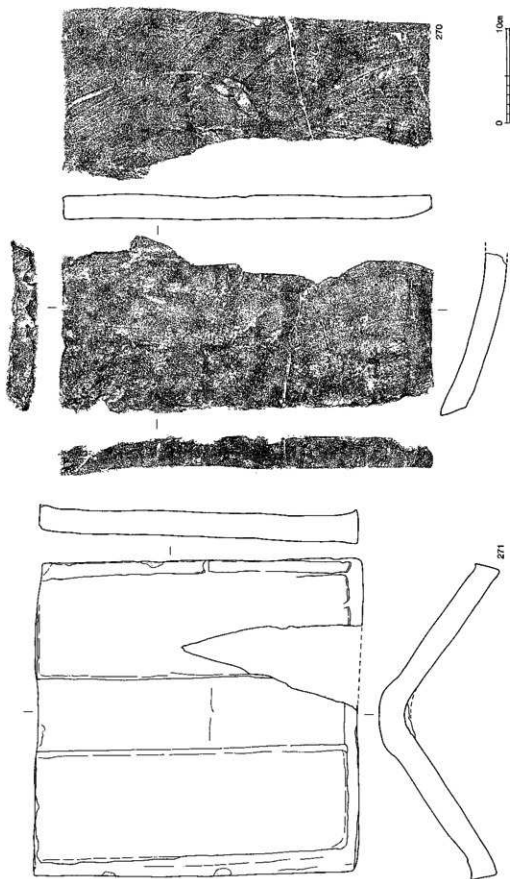
第3-274図 06-SK131出土遺物実測図③ (1/3)



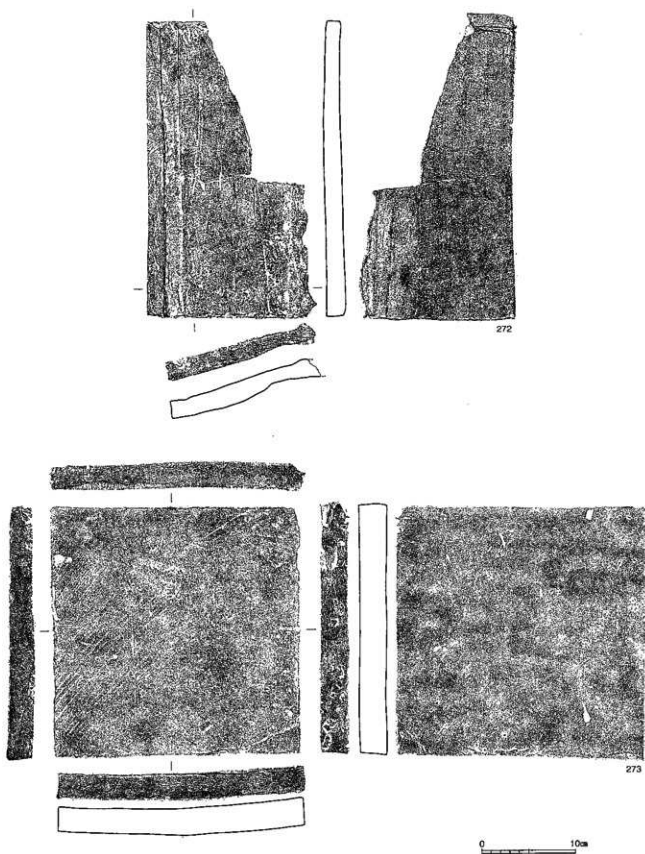
第3-275図 06-SK131出土遺物実測図① (1/3)



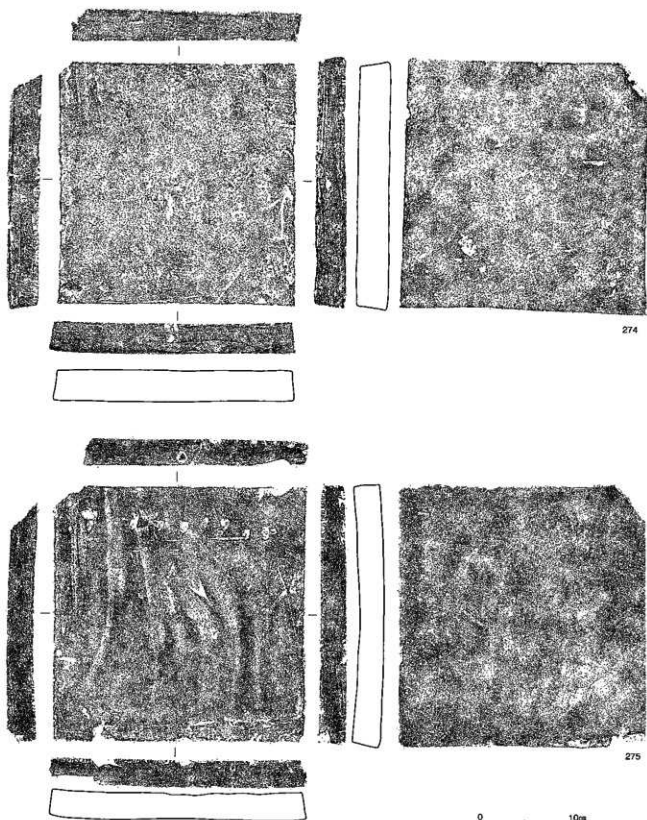
第3-276図 06-SK131出土遺物実測図④ (1/3)



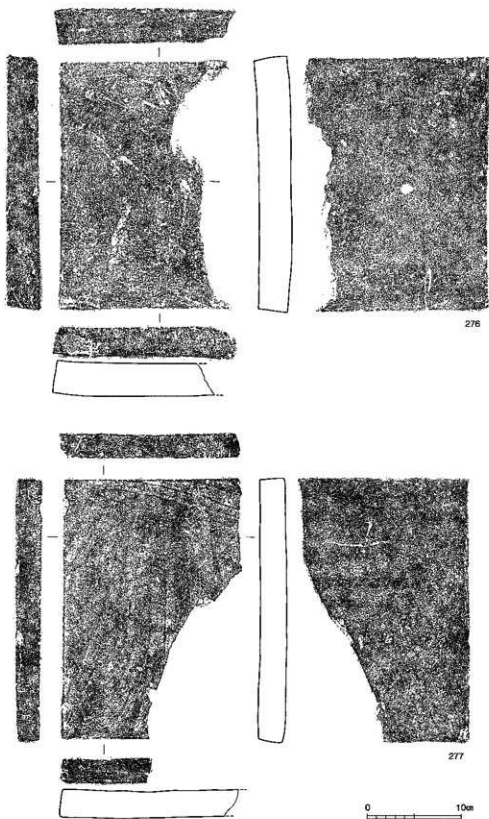
第3-277図 06-SK131出土遺物実測図②(1/4)



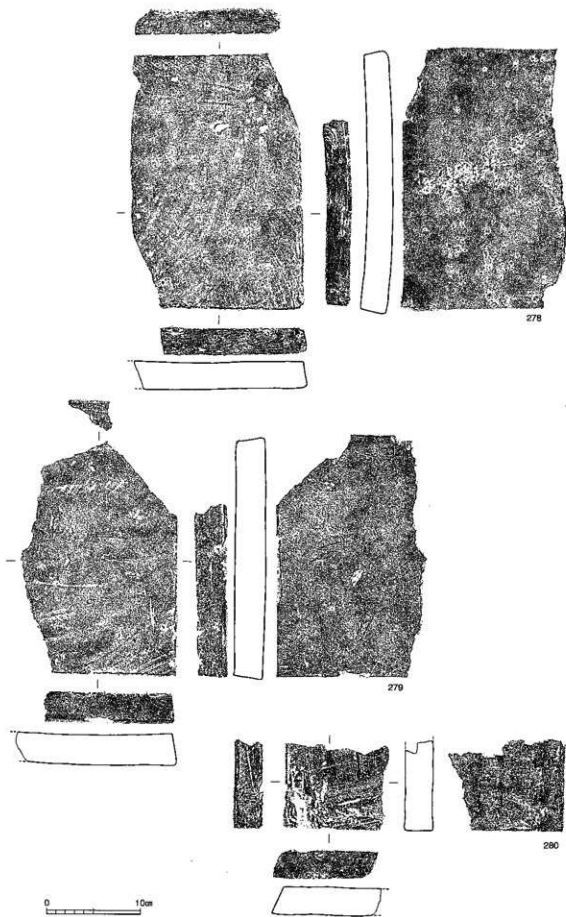
第3-278図 06-SK131出土遺物実測図②(1/4)



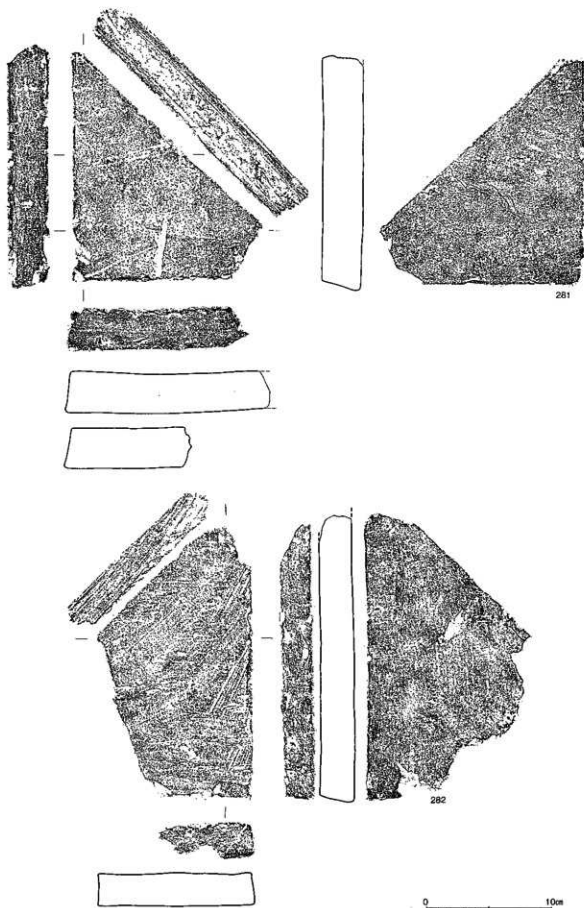
第3-279図 06-SK131出土遺物実測図⑧ (1/4)



第3-280図 06-SK131出土遺物実測図② (1/4)



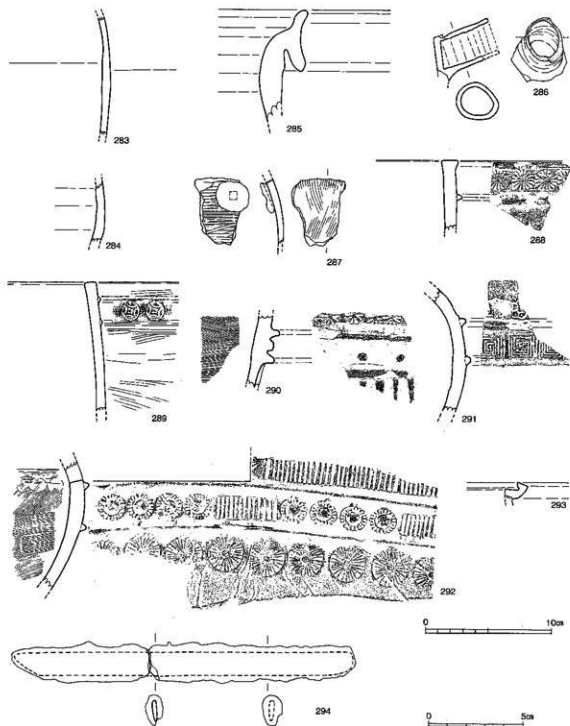
第3-281図 06-SK131出土遺物実測図⑧(1/4)



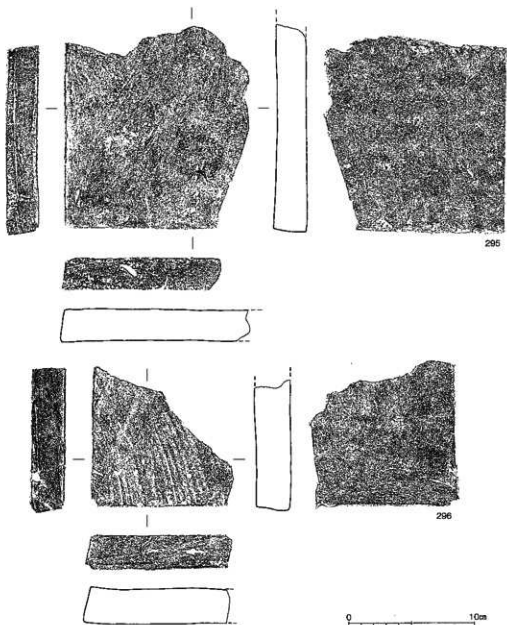
第3-282図 06-SK131出土遺物実測図②(1/3)

第3章 旧万寿寺跡第6次調査

菱形唐草文 261・262・264は唐草文の末端が塗切れている。263は菱形唐草文を施すもので、265も同様であらう。266・267は鬼瓦の一部である。267は正面及び側面に円形刺突文を連続して施す。268・269は古代瓦で、凹面に布目痕、凸面に格子目タキキ痕が残る。270は平瓦である。271・272は雁振瓦で、271は06-SD302出土の破片と接合する。273～282は塼である。281・282は方形の線を切断し三角形に整えた隅切りの塼で、281は切断面を平滑に仕上げていないことから、切断後に捨てられたものであろう。



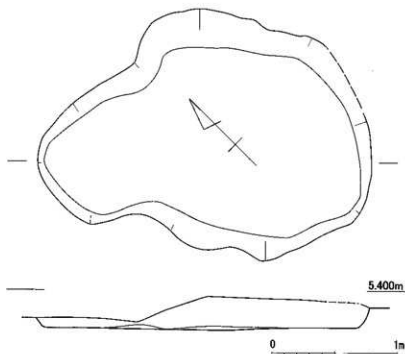
第3-283図 06-SK131下層出土遺物実測図① (1/3・1/2)



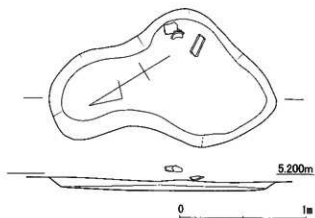
第3-284図 O6-SK131下層出土遺物実測図② (1/3)

下層出土遺物 283～296は下層出土遺物である。283は中四産のコンテナ陶器であろう。284は古代の緑釉陶器である。285は常滑焼の甕で、下層から同一個体片がまとめて出土している。286は古瀬戸の把手付鉢の把手部である。287はハケ目調整を施す土師器片に銅銭が固着したもので、銭文は判読できない。288・289は瓦質土器の火鉢である。290～292は瓦質土器の風炉で、292は胴部凸帯上に風門を配する。293は瓦質土器で口縁部を折り返す。香炉ないしは華瓶であろうか。294は鉄製刃物、295・296は埴である。

常滑焼
古瀬戸の把
手付鉢



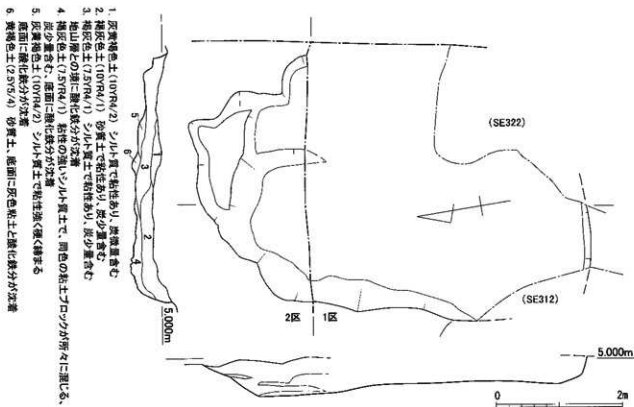
第3-285図 06-SK147実測図 (1/30)



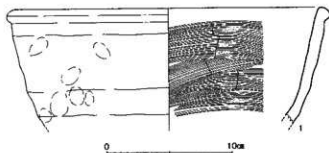
第3-286図 06-SK164実測図 (1/30)

06-SK147 (第3-285図)

2区のO61・O62グリッドで検出した土坑である。平面形状は不整形で、長辺2.65m、短辺1.90m、深さ0.27mを測る。埋土は粘性のある黒褐色土(10YR3/2)で、少量の炭を含む。図示できる遺物の出土がなく、遺構の詳細な年代は明らかにできないが、井戸06-SE167の埋土を掘り込むためそれよりは後出する遺構である。



第3-287図 06-SK166実測図 (1/60)



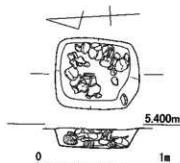
第3-288図 06-SK166出土遺物実測図 (1/3)

06-SK164 (第3-286図)

2区の061グリッドで検出した土坑である。平面形状は丸みのある三角形を呈し、長辺1.81m、短辺1.10m、深さ0.09mを測る。掘り込みは浅く皿状を呈する。埋土暗褐色土 (10YR3/3) で焼土細粒と炭を含む。遺物は丸瓦等が出土したが、図示できるものはない。遺構の詳細な年代は明らかにできないが、溝06-SD165よりは後出することは確実であり、Ⅲ期 (14世紀末～15世紀前半) 以降に位置づける。

06-SK166 (第3-287図)

1区と2区にまたがる遺構で、O62・O63グリッドに位置する大型の土坑である。南端部は2基の井戸O6-SE312とO6-SE322に切られ、東側が調査区外に続くため全体の規模は明らかにできないが、長辺約6.35m、短辺約4.2m以上、深さ約0.55mを測る。北端部は段状に掘り込むが、南半部ではそれが不明瞭ではほぼ平坦な底面となる。埋土は6層に分けられ、底面には灰色粘土と酸化鉄分が認められる。井戸との切り合いから、遺構の時期はⅢ期(14世紀末～15世紀前半)以前である。



第3-289図 06-SK185実測図(1/30)

06-SK166出土遺物 (第3-288図)

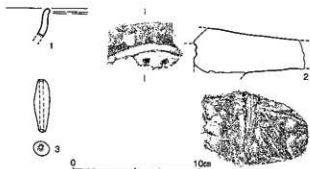
1は土師器の鍋である。口縁端部は外側にやや丸く肥厚し、内面には横位のハケ目調整を密に施す。

06-SK185 (第3-289図)

2区のN62グリッドで検出した土坑である。平面形状は隅丸方形で、長辺0.67m、短辺0.56m、深さ0.15mを測る。埋土は灰褐色土

廃棄土坑

(75YR4/2)で、微量の炭を含む。土坑内には糠や遺物が充填されており、廃棄土坑と考えられる。瀬戸美濃産の天目碗が出土しており、遺構の年代はⅤ期(16世紀後半)と考えられる。



第3-290図 06-SK185出土遺物実測図(1/3)

06-SK185出土遺物 (第3-290図)

瀬戸美濃産天目

1は瀬戸美濃産天目碗で、口縁部が外反する。2は軒丸瓦の小破片で、瓦当面に團線と珠文を施すが、巴部を欠く。3は土師質焼成の管状土師である。

06-SK272 (第3-291図)

1区のN64グリッドで検出した土坑である。06-SK209及び06-SK211に一部を切られるが、長辺1.60m、短辺0.86m、深さ0.94mを測る。土坑の上部は皿状の浅い掘り込みを呈するが、北端部が円形に深く掘り込まれるため、本来は2基の土坑が重複していた可能性もある。埋土は3層に分層でき、いずれも炭を含む。遺物は在地の土師器小皿や坏とともに吉備系土師器碗の細片が出土している。そのため遺構の時期はⅠ期(14世紀前半)に位置づけられる。

吉備系土師器碗

06-SK272出土遺物 (第3-292図)

1・2は土師器小皿である。3～5は土師器坏で、口縁部が外に直線的に開くもの(3)と、やや口縁が内湾するもの(4・5)がある。6は土師器小皿に高い輪状の高台が付く濁台で、皿部の見込みに貫通する穿孔がある。7は吉備系土師器碗で、底部に断面三角形の高台を貼り付ける。

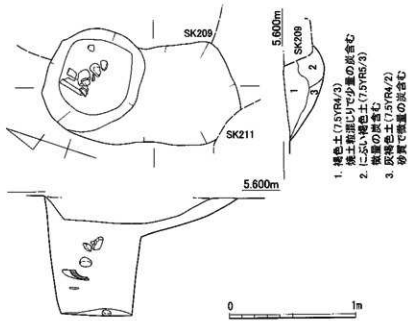
濁台

吉備系土師器碗

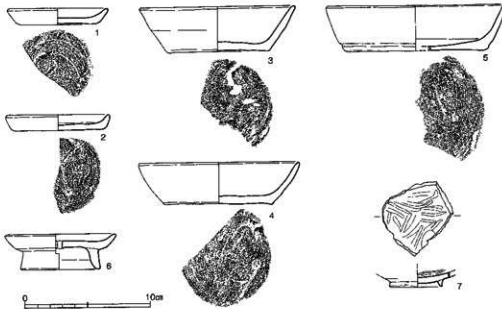
06-SK273 (第3-293図)

N64グリッドで検出した土坑である。平面形状は隅丸形状を呈し、長辺1.00m、短辺0.86m、深さ0.90mを測る。裡土は灰褐色土で、上部には褐色土のブロックが混じる。土坑の上位から中位にかけて礫や遺物がまぎって出土しており、廃棄土坑と考えられる。遺物の年代を示す遺物に乏しいが、Ⅰ～Ⅱ期(14世紀前半～末)に位置づける。

廃棄土坑



第3-291図 06-SK272実測図 (1/30)



第3-292図 06-SK272出土遺物実測図 (1/3)

06-SK273出土遺物 (第3-294図)

輪花形火鉢
の退化形態

1は瓦質土器の火鉢である。口縁部は円形であるが、胴部の中位に縦方向のスリット状の沈線がみられ、輪花形火鉢の退化形態と考えられる。2は東播磨須恵器の捏鉢で、底面に回転糸切り痕が残る。3は弥生土器の甕の底部である。4は紡錘形の土錘の破片で、側面に沈線を持つ。5は軒丸瓦であるが瓦当面を欠失する。凹面にはコビキ痕と小さい吊紐痕が残る。

06-SK303 (第3-295図)

古代の遺構
の可能性

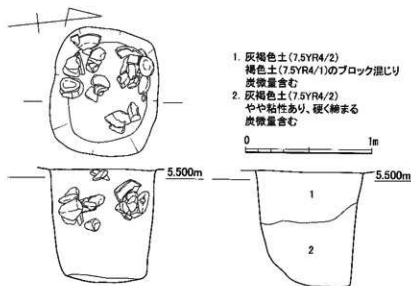
1区のM63・M64グリッドで検出した土坑である。この上位には銭貨等が出土した06-SK226が位置する。本土坑の平面形状は隅丸方形形状を呈し、長辺1.33m、短辺1.22m、深さ0.3mを測る。埋土は砂質のにぶい黄褐色土(10YR4/3)で、少量の炭を含む。遺物の出土は少なく、検出面から古代の土器が出土しているが、時期決定の決め手を欠く。06-SK226より古いことは確実で、IV期(15世紀中頃～後半)以前に位置づけられる。06-SK226からは銭貨とともに古代の金銭型甕が出土しており、検出面出土の古代土器とともに古代の遺構の可能性もある。

06-SK303出土遺物 (第3-296図)

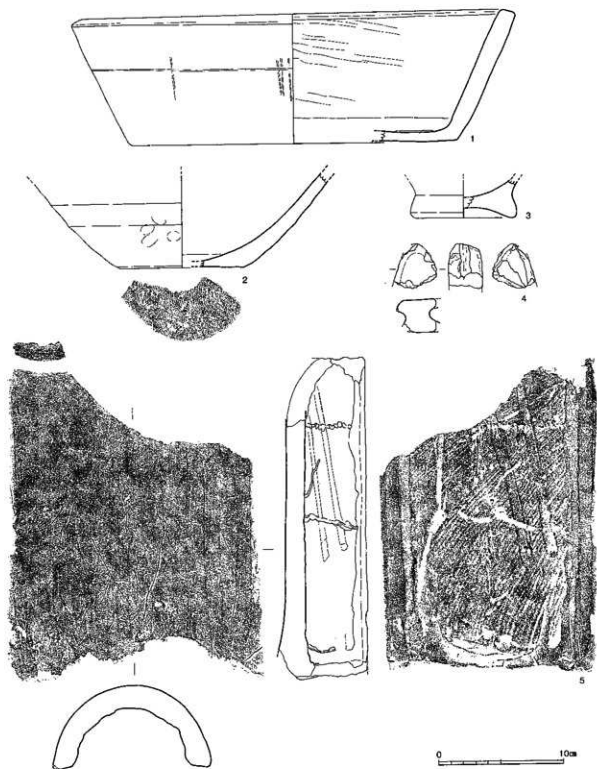
1は古代の上師器坏である。内面には粗いヘラミガキを施し、口縁部には1条の沈線を施す。底面にはヘラ切り離し痕が残る。

06-SK306 (第3-297図)

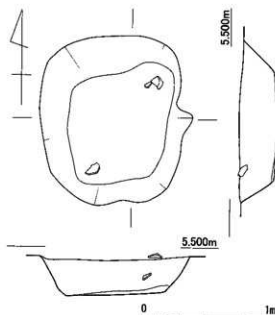
1区のN64グリッドで検出した土坑である。平面形状はやや歪な楕円形で、長辺0.96m、短辺0.83m、深さ0.58mを測る。埋土は5層に細かく分けられ、3層を除いて炭を含む。遺物の出土に乏しく、遺構の時期は明らかにできない。



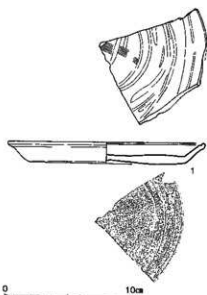
第3-293図 06-SK273実測図 (1/30)



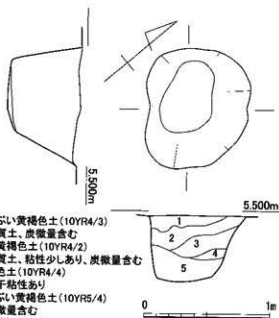
第3-294図 06-SK273出土遺物実測図 (1/3)



第3-295図 O6-SK303実測図 (1/30)



第3-296図 O6-SK303出土遺物実測図 (1/3)



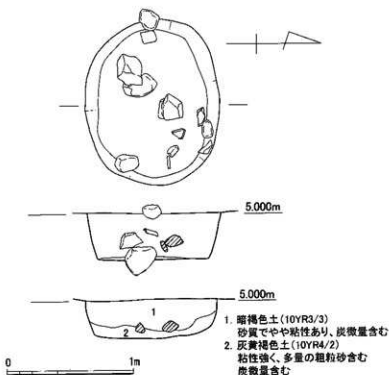
1. にぶい黄褐色土(10YR4/3)
砂質土、炭微量含む
2. 灰黄褐色土(10YR4/2)
砂質土、粘性少しあり、炭微量含む
3. 褐色土(10YR4/4)
若干粘性あり
4. にぶい黄褐色土(10YR5/4)
炭微量含む
5. 灰黄褐色土(10YR4/2)
褐色土(10YR4/4)混じり、炭微量含む

第3-297図 O6-SK306実測図 (1/30)

O6-SK311 (第3-298図)

1区のO62・O63グリッドで検出した土坑である。平面形状は楕円形で、長辺1.31m、短辺1.08m、深さ0.38mを測る。埴土は2層に分層でき、上層は砂質土、下層は粗粒砂混りの粘質土である。土坑内からは礫や遺物が散漫に出土しており、廃棄土坑と考えられる。遺物の時期は明確ではないが、O6-SE322を切ることからⅣ期(15世紀中頃～後半)以降である。

廃棄土坑



第3-298図 06-SK311実測図 (1/30)

06-SK313 (第3-299図)

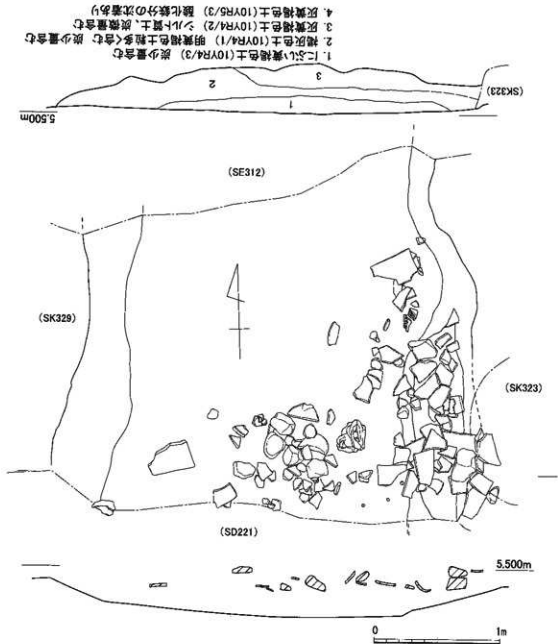
1区のO63グリッドで検出した土坑である。06-SK329を切り、06-SD221と06-SK323、06-SE312に切られている。そのため全体の規模は明らかにできないが、残存範囲で東西1.54m、南北1.41m、深さ0.33mを測る。埋土は3層に分層でき、いずれも炭を含む。土坑の南東部から瓦や礫が比較的まとまって出土しており、遺構上部から鬼瓦の顔部が伏せた状態で出土した。こうしたことから遺構の性格は廃棄土坑と考えられる。遺構の時期は06-SD221より古いⅢ期 (14世紀末～15世紀前半)に位置づける。なお、本遺構は06-SD093の延長線上に位置し、06-SD221とあわせて見かけ上方形区画を形成するように見えるが、本遺構と06-SD221には明瞭に切り合い関係があること、06-SD093と遺構の深さが異なること、06-SE312の築面で06-SD093の断面が確認できないことから、両者は別の遺構である。

鬼瓦
廃棄土坑

06-SK313出土遺物 (第3-300図～3-303図)

1は青磁皿の底部である。2は瀬戸丸濃窯の卸目で、見込に格子目状の卸目を施し、底面には回転糸切り痕が残る。3は備前焼の摺鉢で、口縁部の一端が片口となる。4は土師器の坏である。5は瓦質土器の風炉で、凸帯下に風門を配する。6・7は瓦質土器の摺鉢、8は瓦質土器の火鉢である。9は鬼瓦で、眼を吊り上げて観みをきかせた表情をリアルに表現している。06-SX100の鬼瓦と異なり、目は中空にならない。口の両端は中空になっており、おそらく別材の牙を挿入していたであろう。なお、周縁帯は第8次調査の土坑08-SK191出土のものが接合している。両遺構の距離は約22mである。10は平瓦、11は雁振瓦である。12は形状の凝灰岩で、側面に整形のノミ痕が無数に残る。13は滑石製石鍋で、口縁部は鍵状に外に折れる。14～17は銭貨である。14～16は北宋銭で、14は祥符通寶 (1009年初鑄)、15は不鮮明ながら皇宋通寶 (1038年初鑄)と思われるもの、

08-SK191
出土のものが接合



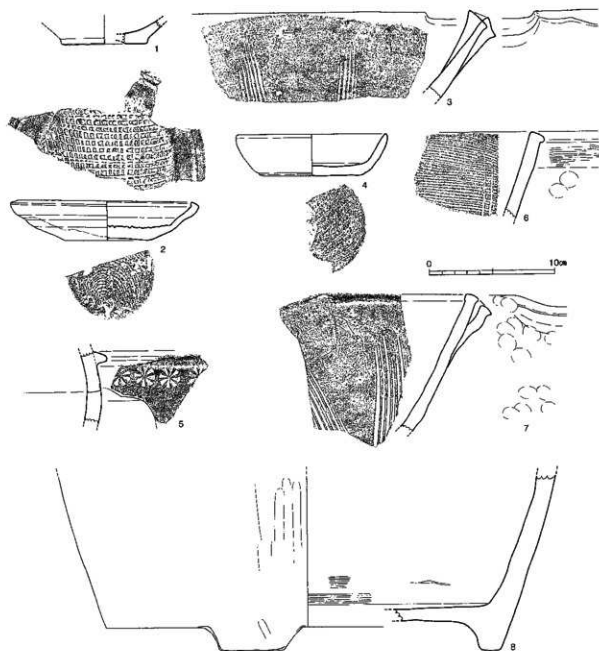
第3-299図 O6-SK313実測図 (1/30)

東園通寶 16は元祐通寶(1086年初鑄)である。17は高麗の東園通寶(1097年初鑄)で、中世大友府内町跡第29次調査に次いで2例目の出土である³³⁾。

O6-SK314 (第3-304図)

1区のN64グリッドで検出した土坑である。楕円形状を呈すると思われるが、西側はO6-SD288に切られている。遺構の規模は残存する範囲で長辺1.12m、短辺0.93m、深さ0.57mを測る。埋土は2層に分層でき、いずれも炭を含む。遺構の時期を特定できる遺物の出土がないが、O6-SD288に切られることからⅢ期(14世紀末～15世紀前半)以前である。

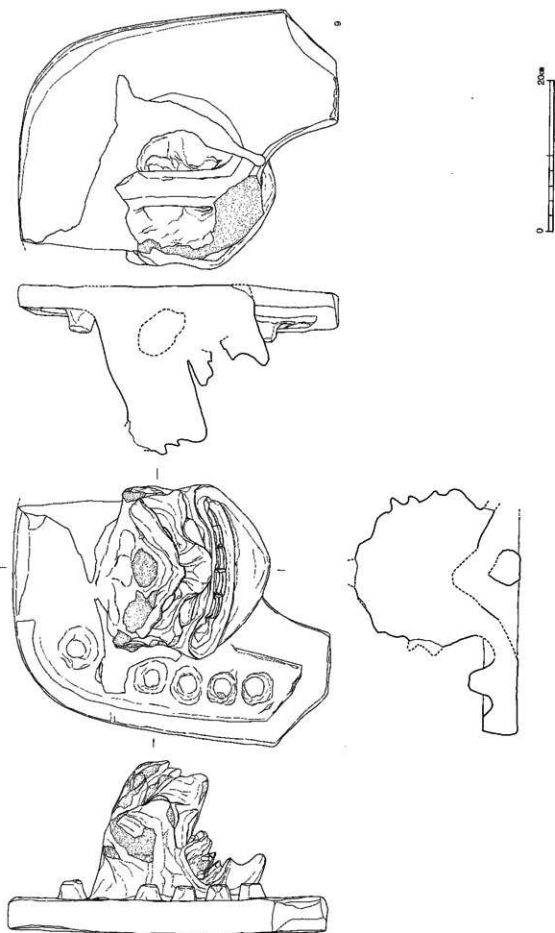
³³⁾ 中世大友府内町跡及び旧万寿寺跡における観音の出土量は以下の文献による。
坂本嘉弘2012「中世大友府内町跡の出土銭貨とその周辺」『西海考古』第8号、西海考古同人会



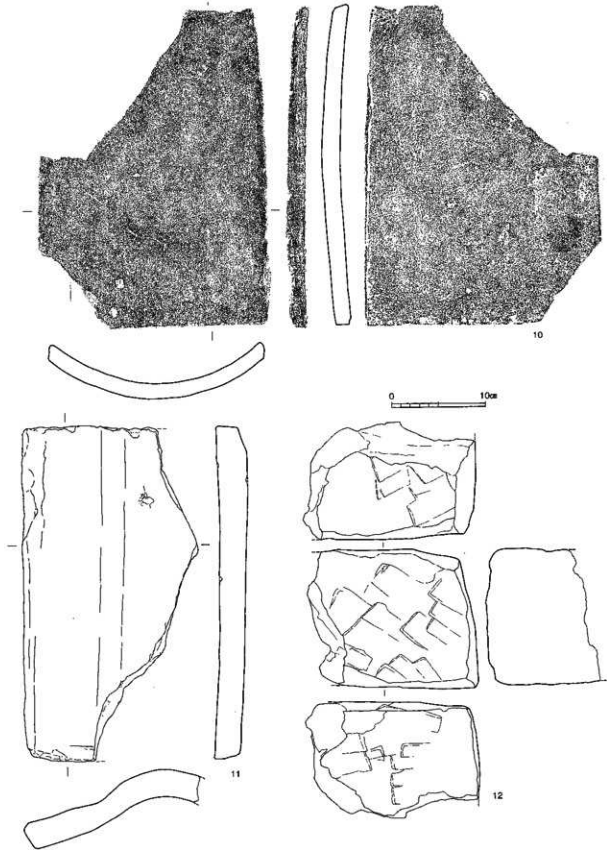
第3-300図 O6-SK313出土遺物実測図①(1/3)

O6-SK317 (第3-305図)

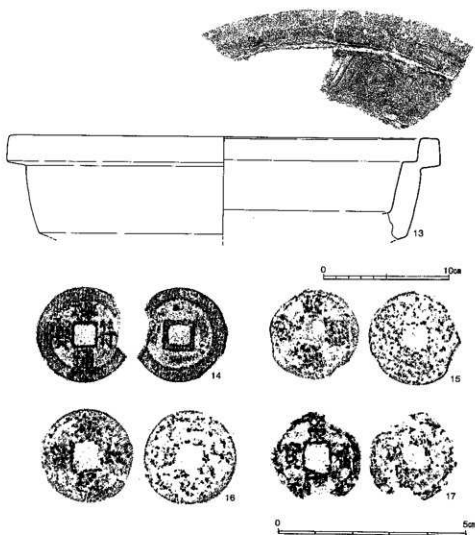
1区のN63グリッドで検出した土坑である。平面形状は略円形を呈し、長径0.63m、短径0.55m、深さ0.35mを測る。南側壁面は検出面よりもオーバーハングし、その部分で2点の銭貨が出土している。埋土はにおい黄褐色土(10YR4/3)で、微量の炭を含む。銭貨の他に図示できる遺物がなく、遺構の詳細な時期は明らかにできないが、1区で銭貨がまとまって出土する遺構の時期を勘案すると、I～IV期(14～15世紀)におさまる可能性が高い。



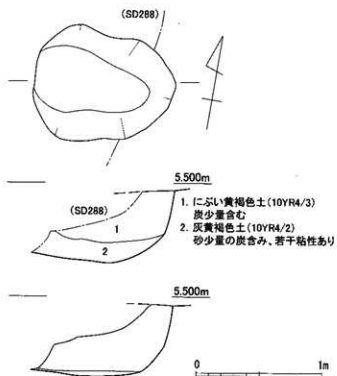
第3-301図 06-SK313出土遺物実測図② (1/5)



第3-302図 06-SK313出土遺物実測図③(1/4)



第3-303図 06-SK313出土遺物実測図④ (1/3・1/1)



第3-304図 06-SK314実測図 (1/30)

06-SK317出土遺物 (第306図)

1～3は銅銭で、いずれも北宋銭である。1は天禧通寶(1017年初鑄)、2は熙寧元寶(1068年初鑄)、3は元祐通寶(1086年初鑄)である。

06-SK323 (第3-307図)

1区のO63グリッドで検出した土坑である。06-SD221・06-SK276・06-SK313と重複するが、06-SK313を切り、06-SD221及び06-SK276に切られている。平面形状は方形気味の円形で、長辺1.20m、短辺0.91m、深さ0.38mを測る。埋土は灰黄褐色土(10YR4/2)のブロックが混じる褐色砂質土(10YR4/4)で、微量の炭を含む。遺物の出土に乏しいが、遺構の切り合いからⅢ～Ⅳ期(14世紀末～15世紀後半)に位置づける。

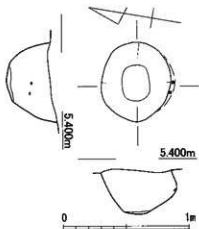
06-SK323出土遺物 (第3-308図)

1は銅銭の破片である。下部に楷書体の「元」字が判読できるが、小破片のため銭種は明らかにできない。

06-SK326 (第3-309図)

1区の南端、M64グリッドで検出した土坑である。南側が調査区外に続き、かつ東半部は06-SD288に切られるため全体の規模は明らかにできないが、検出範囲で長辺1.74m、短辺0.40m以上、深さ0.84mを測る。埋土は2層に分層でき、上層には焼上細粒を含む。壁面の立ち上がりは垂直に近く、底面はほぼ平坦である。土坑の中心から銭貨が集中して出土している。遺構の時期を示す遺物に乏しいが、06-SD288との切り合いからⅡ期(14世紀中頃～末)以前の遺構である。

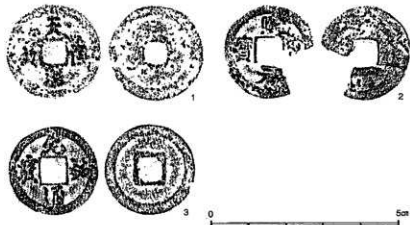
銭貨が集中して出土



第3-305図 06-SK317実測図(1/30)

06-SK326出土遺物 (第3-310図)

1～4は北宋銭で、1は淳化元寶(990年初鑄)、2は天聖元寶(1023年初鑄)、3は元符通寶(1098年初鑄)、4は政和通寶(1111年初鑄)である。5は左側の「寶」字だけが残る小破片で銭種は明らかにできない。6・7は2枚の

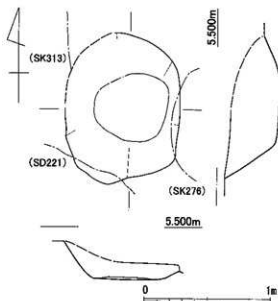


第3-306図 06-SK317出土遺物実測図(1/1)

銭貨が鋳着したもので、6は北宋の元豊通寶（1078年初鑄）と皇宋通寶（1038年初鑄）が判読できるが、7はいずれも背面のため銭種は不明である。

06-SK328 (第3-311図)

1区のO62・P62グリッドで検出した土坑である。本遺構の上位に06-SK198が位置するが、直接の切り合い関係にはない。平面形状は不整形で、西側が浅く東半部は一段深く掘り込む形状から2基の土坑の重複という可能性もある。遺構の規模は長辺1.33m、短辺1.10m、深さ0.43mを測る。埋土は3層に分層でき、1層はビット状に掘り込む。遺構の時期を示す遺物の出土はないが、06-SK166埋設後の構築で、かつ上位に06-SK198が位置することから、Ⅲ～Ⅵ期（14世紀末～16世紀後葉）の間に位置づけられる。



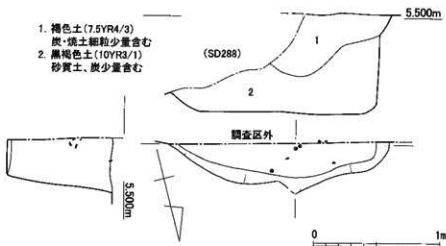
第3-307図 06-SK323実測図 (1/30)

06-SK329 (第3-312図)

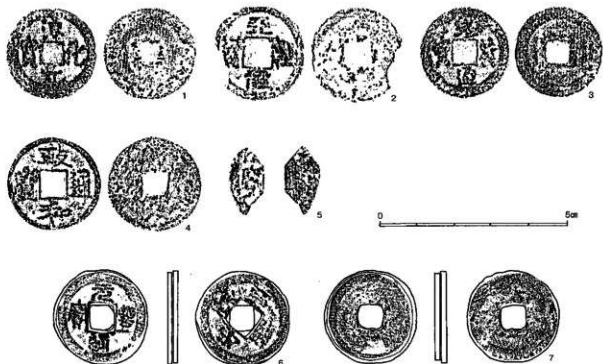
1区のO63グリッドで検出した土坑である。北は06-SE312、南は06-SD221、東は06-SK313に切られるため、全体の形状および規模は明らかにできないが、残存範囲で東西3.65m、南北2.25m、深さ約0.60mを測る。埋土は2層に分層でき、上層と下層の間には酸化鉄分の沈着が認められる。遺構の時期を示す遺物の出土はないが、遺構の切り合いからⅡ期（14世紀中頃～末）に位置づける。



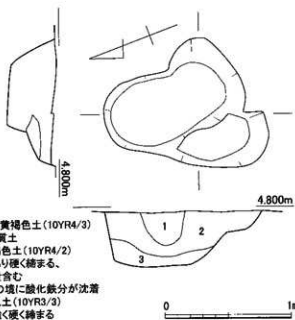
第3-308図 06-SK323出土遺物実測図 (1/1)



第3-309図 06-SK326実測図 (1/30)



第3-310図 06-SK326出土遺物実測図 (1/1)

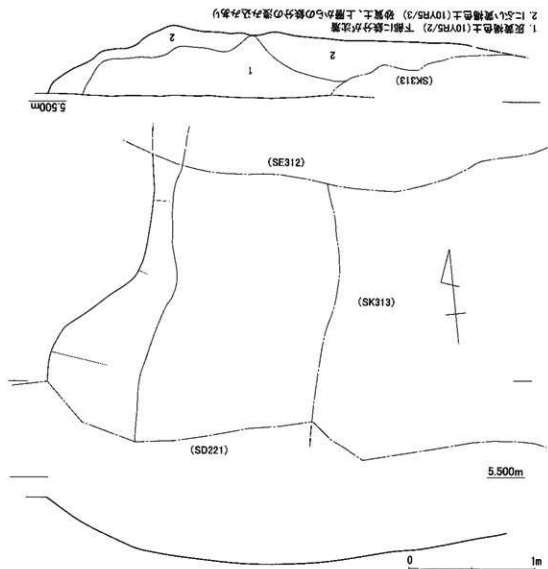


1. にぶい黄褐色土(10YR4/3)
シルト質土
2. 灰黄褐色土(10YR4/2)
粘性あり硬く締まる、
炭微量含む
3. 暗褐色土(10YR3/3)
粘性強く硬く締まる

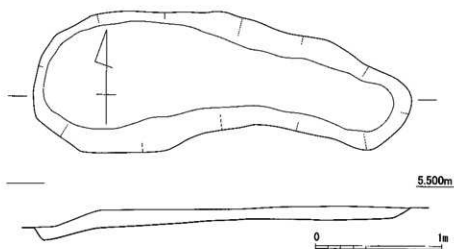
第3-311図 06-SK328実測図 (1/30)

06-SK333 (第3-313図)

1区のO64グリッドで検出した上坑である。東西方向に細長く伸び、西端部は06-SK202に切られている。遺構の規模は長辺3.02m、短辺1.12m、深さ0.15mを測る。掘り込みは浅い皿状で、底面はほぼ平坦である。埋土は褐色砂質土(10YR4/4)で、灰黄褐色土(10YR4/2)のブロックが混じる。遺構の時期を示す遺物に乏しいが、06-SK202に切られることからI期(14世紀前半)、もしくは古代の可能性もある。



第3-312図 06-SK329実測図 (1/30)



第3-313図 06-SK333実測図 (1/30)

06-SK335 (第3-314図)

1区のO64グリッドで検出した土坑である。平面形状は逆台形状で、北端部は2基のピットに切られている。遺構の規模は長辺2.78m、短辺2.02m、深さ1.73mを測る。埋土はシルト質の褐色土(75YR4/3)で、微量の炭を含む。土坑の底部付近及び上位から数点の礫や遺物が散発的に出土している。遺物は古代の土師器や緑釉陶器、黒色土器が出土しており、9世紀前半～中頃に位置づけられる。

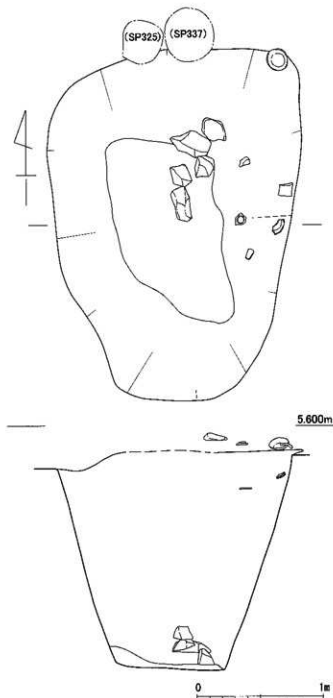
06-SK335出土遺物 (第3-315図)

1・2は緑釉陶器である。1は底面に回転糸切痕が残る。2は貼付高台である。3は須恵器の高台付坏で、断面方形の高台を貼り付ける。4は土師器甕で、外面に一部曲線状のハケ目を施す。5～9は土師器の坏である。5～7は器高の低い皿状のもの、8・9はやや深手のタイプで、6・7・9には粗いヘラミガキを施す。10～14は黒色土器で、内面を黒色に施したA類碗である。いずれも内面にはヘラミガキを施す。1・2・8～14は9世紀前半～中頃、3・5～7はそれよりもやや古手のものである。

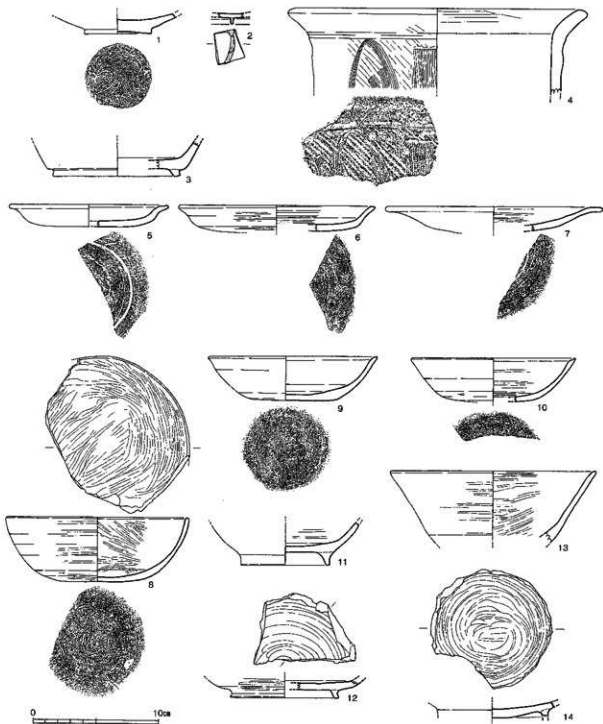
製塩土器

15～17は製塩土器で、16・17は内面に布目痕が残る。18は縄文土器の浅鉢で、晩期前半のものである。19は大型の管状土鍾である。20は古代の丸瓦で、凸面にカキ目、凹面に布目痕が残る。

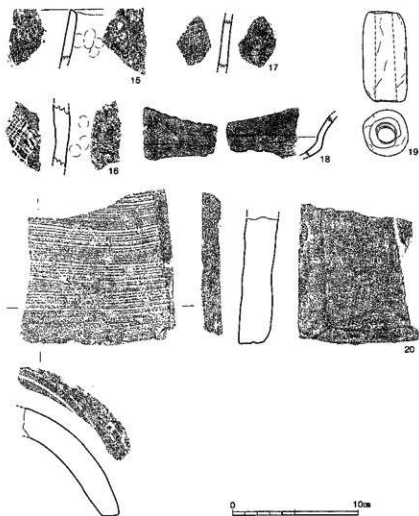
古代の丸瓦



第3-314図 06-SK335実測図 (1/30)



第3-315図 06-SK335出土遺物実測図①(1/3)



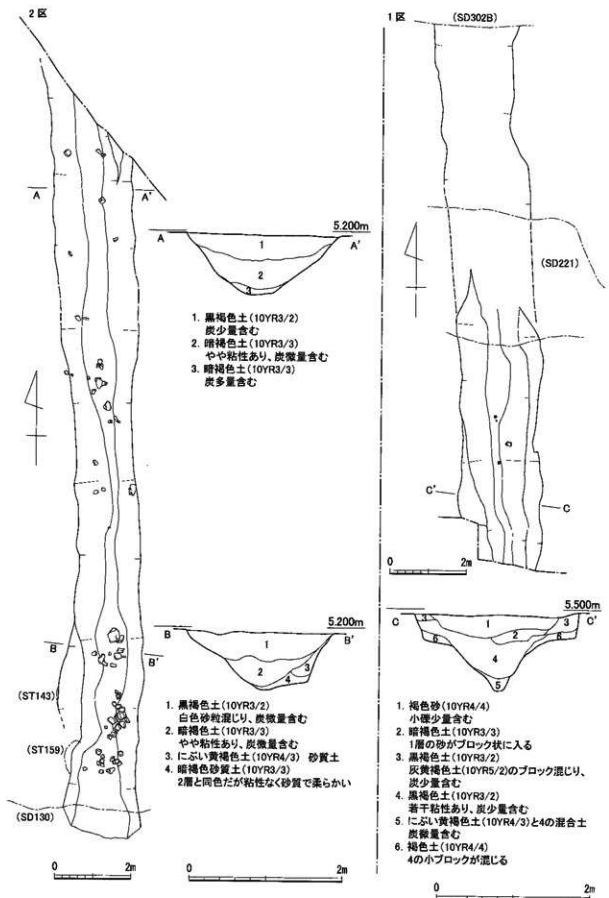
第3-316図 06-SK335出土遺物実測図②(1/3)

4. 溝

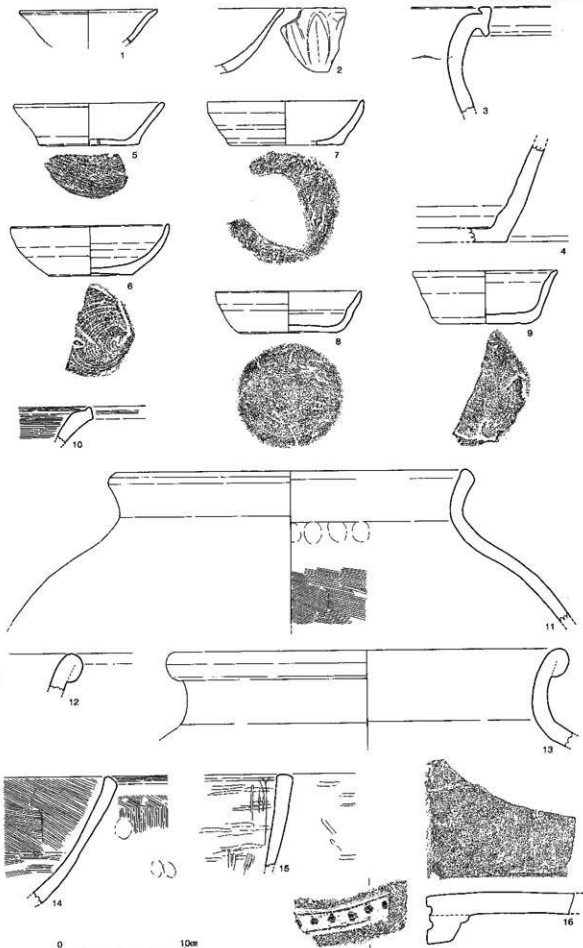
06-SD090 (第3-317図)

1・2区の西部、L59～L・M64グリッドにかけて検出した溝である。調査区を南北に縦断し、07-SD090に続く。長さ46m以上、幅2.25m、深さ約0.75～1.0mを測る。複数の遺構と複雑に重複しており、06-ST143・06-ST159の土坑墓群や溝06-SD345を切り、土坑06-SK035・06-SK131・06-SK258・06-SK259・06-SK324、溝06-SD130・06-SD221・06-SD302に切られている。断面形状は2区ではV字状を呈するのに対し、1区では上部が箱形で、下部はV字状となる。埋土は概ね上部が黒褐色土、下部が暗褐色土であるが、1区では堆積が複雑である。遺物は14世紀代のものが目立つが、わずかに15世紀前半の遺物を含んでいる。Ⅲ期の溝06-SD345を切ることから、遺構の時期はⅢ期（14世紀末～15世紀前半）に位置づけられる。遺構のプランが直線的であることから、何らかの区画溝と考えられる。

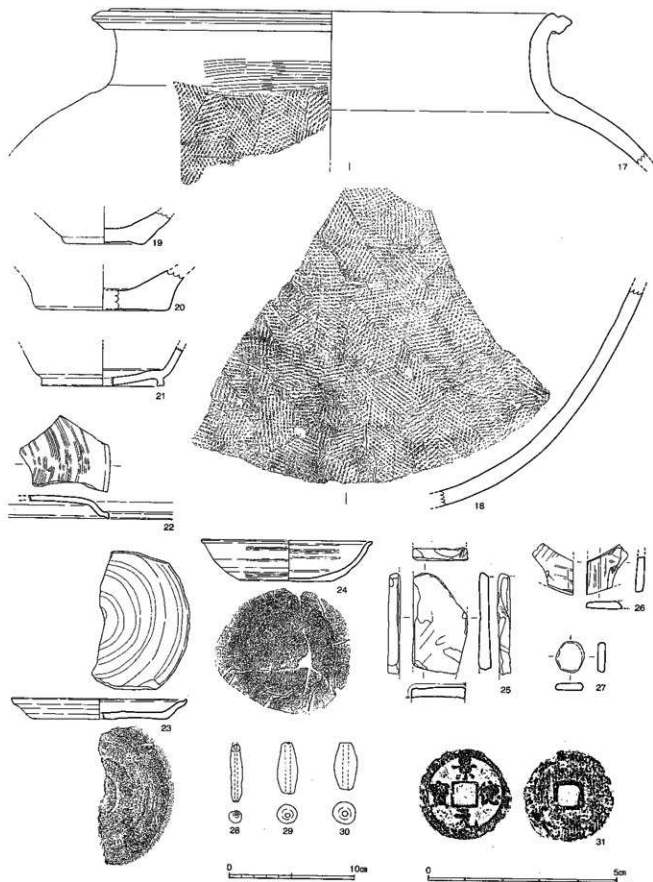
区画溝



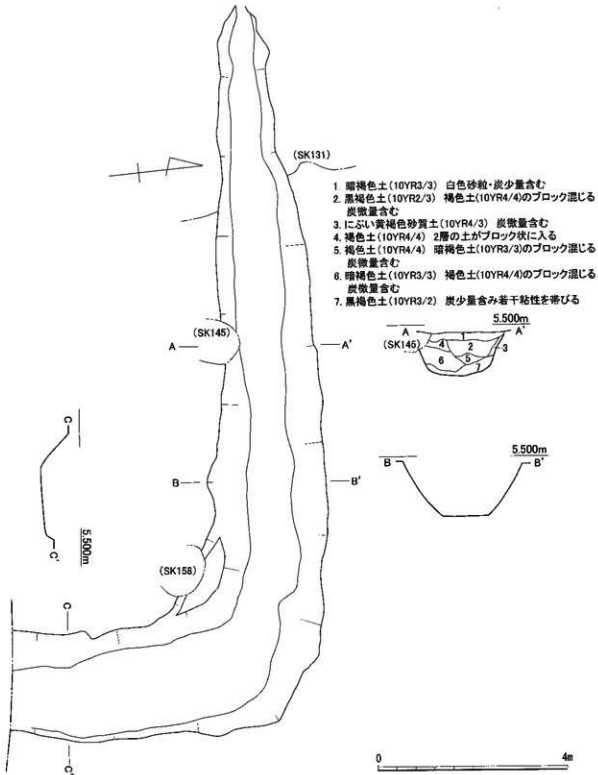
第3-317図 06-SD090実測図 (1/100・1/50)



第3-318図 06-SD090出土遺物実測図①(1/3)



第3-319図 06-SD090出土遺物実測図②(1/3・1/1)



第3-320図 06-SD093実測図(1/80)

06-SD090出土遺物 (第3-318・3-319図)

1は白磁の口禿皿である。2は青磁碗で、外面に鎮蓮弁文を施す。3は常滑焼の甕で、外反する口縁を上下に拡張し緑帯部を作る。4は焼締陶器の壺の底部である。5～9は土師器の坏で、口縁が直に開くもの(5)、内湾口縁のもの(6・7)、胴部の中位が膨らむもの(8)、口縁端部を削いで先尖りとなるもの(9)がある。10は土師器の鍋である。11～13は瓦質土器の甕で、12・13は口縁部を折り返して玉縁状にする。14は瓦質七器の鉢である。15は瓦質土器の火鉢で、口縁部は輪花形を呈する。16は軒平瓦で、瓦当部の区画線内に連珠文を施す。17・18は東播系須恵器の甕で、胴部には方向を変えた鏤杉状のタタキ目を持つ。19・20は弥生土器で壺の底部であろう。21～24は古代の遺物で、21は須恵器の高台付坏、22は土師器の坏壺、23・24は坏である。22～24はヘラミガキを施す。25・26は砥石、27は土師器の土製円盤、28～30は管状土錘、31は北宋の景德元寶(1004年初铸)である。

06-SD093 (第3-320図)

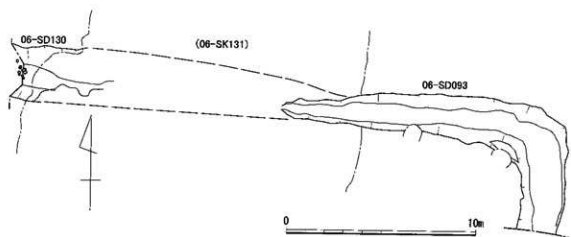
2区のM61・62～O62グリッドにかけて検出した溝である。東西方向に延びながらO61・62グリッドで南に折れ、1区との調査区境に至る。南端部は06-SK141・SK142や、1区の06-SE312等に切られるため、終端部は確認できない。また、西側は大型土坑06-SK131に切られ、その延長上には溝06-SD130が位置する。両者の関係を確実に示せないために別遺構として扱うが、遺構の規模や出土遺物から、本来06-SD130と同一の溝である可能性が高い(第3-321図)。また、南の延長上には土坑06-SK313等が位置するが、06-SK313で述べたようにこちらは別遺構と判断する。

06-SD130
と同一の溝

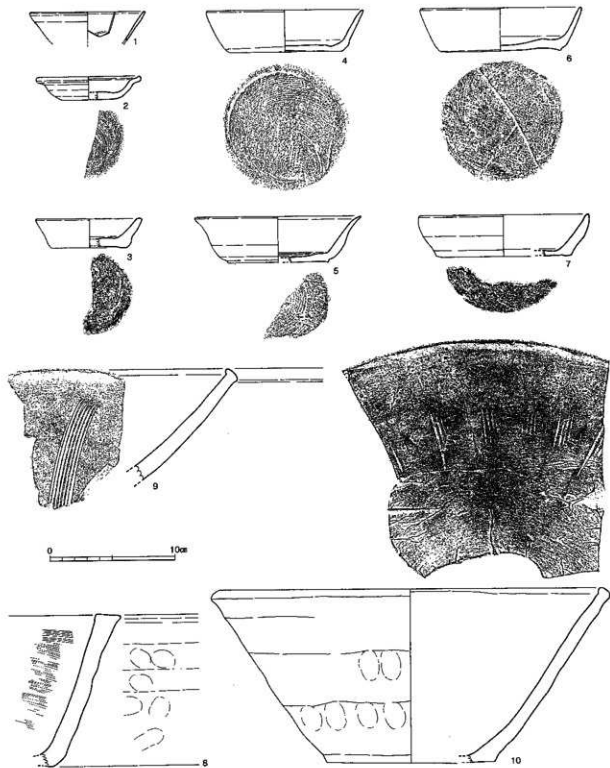
遺構の規模は東西方向で15.2m、南北方向6.5m、幅は最大で3.1m、深さ1.1mを測る。埋土は7層に分層でき、1～4層の掘り返しが認められる。遺構の年代は出土遺物からⅢ期(14世紀末～15世紀前半)に位置づける。遺構の性格としては区画溝の可能性が高いが、これに対応する遺構は明確ではない。可能性としては1区の06-SD345は時期的に合致するが、上部を大幅に削られているために遺構規模等の検討ができない。しかし、この想定が妥当であるなら、東西25m、南北16～17m程度の方形区画を形成することになる。

区画溝

方形区画を
形成



第3-321図 06-SD093出土遺物実測図(1/200)



第3-322図 06-SD093出土遺物実測図①(1/3)



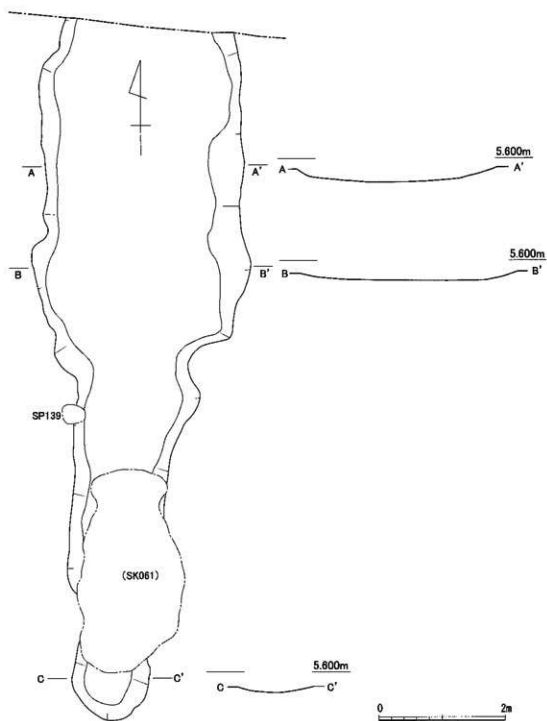
第3-323図 06-SD093出土遺物実測図②(1/3)

06-SD093出土遺物 (第3-322・3-323図)

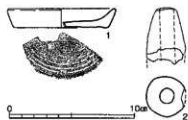
1は白磁の口縁片である。2は瀬戸美濃窯の折縁皿で、底面に回転糸切り痕が残る。3は土師器の小杯、4～7は土師器杯である。5は口縁部が外反し、端部は内側を削いで先尖りとなる。8は瓦質土器の火鉢、9～11は瓦質土器の摺鉢である。10は使用により摺目が摩滅する。12は土師器の鍋で、口縁部には穿孔が見られる。13～15は軒平瓦である。13は中心飾りが菱形の菱形唐草文を施す。14は連珠文で、区画線と珠文の一部が末端部で途切れている。

06-SD106 (第3-324図)

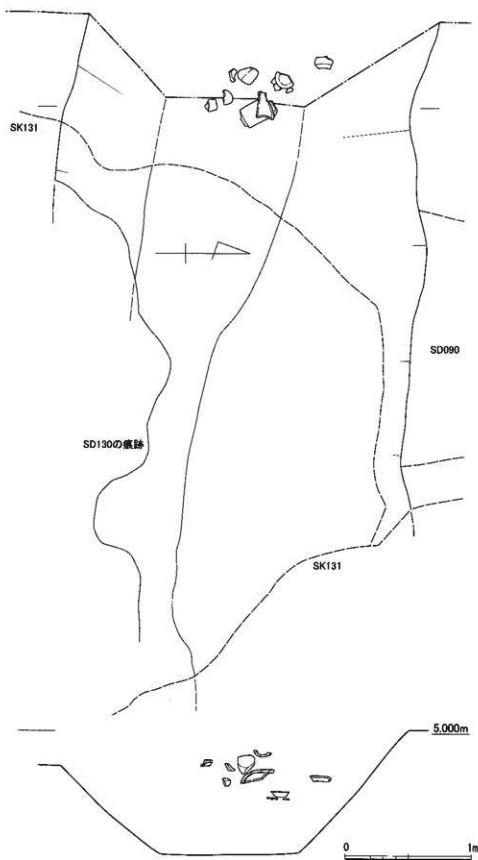
2区のN60・N61グリッドで検出した溝である。北側が調査区外に続くが、検出した範囲で長さ11.0m、幅3.5mで、深さは0.2m程度と浅い。南端部付近は土坑06-SK061に切られている。掘土は灰褐色土(75YR4/2)で、炭を含む。遺構のプランがいびつで、掘り込みも浅いことから区画等の施設ではない。遺構の規模に比して出土遺物は少ないが、Ⅰ～Ⅱ期(14世紀前半～末)に位置づける。



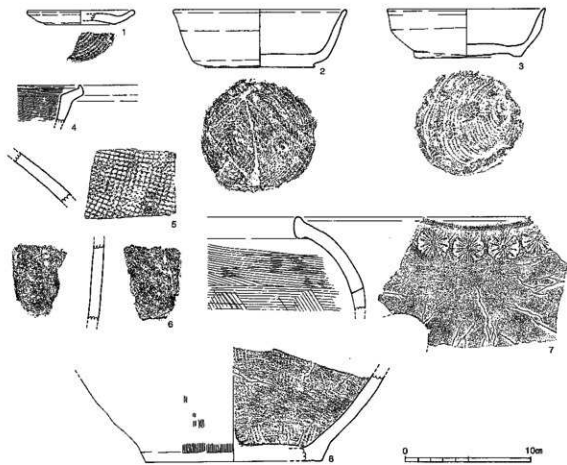
第3-324図 06-SD106実測図 (1/60)



第3-325図 06-SD106出土遺物実測図 (1/3)



第3-326図 O6-SD130実測図 (1/30)



第3-327図 06-SD130出土遺物実測図(1/3)

06-SD106出土遺物(第3-325図)

1は土師器小皿で、底面に回転糸切り痕が残る。2は土師質焼成の管状土鉢である。

06-SD130(第3-326図)

2区の西端部、L61グリッドで検出した溝である。東側を大型土坑06-SK131に切られるが、その延長上に06-SD093が延びており、両者は同一の遺構である可能性が高い。西側は中世大友府内町跡第29次調査の溝SD0681に続く。また、06-SD090と重複しており、検出面での観察から06-SD130が06-SD090を切ることを確認した。遺構の規模は長さ5.24m以上、幅2.90m、深さ0.92mを測る。第3分冊の図版19に示すように埋土は複雑に分層されるが、土層断面夷削前に壁面が崩壊したため図化できなかった。遺構の年代はⅢ期(14世紀末～15世紀前半)で、06-SD090埋没後あまり時間を置かずに構築された可能性が高い。

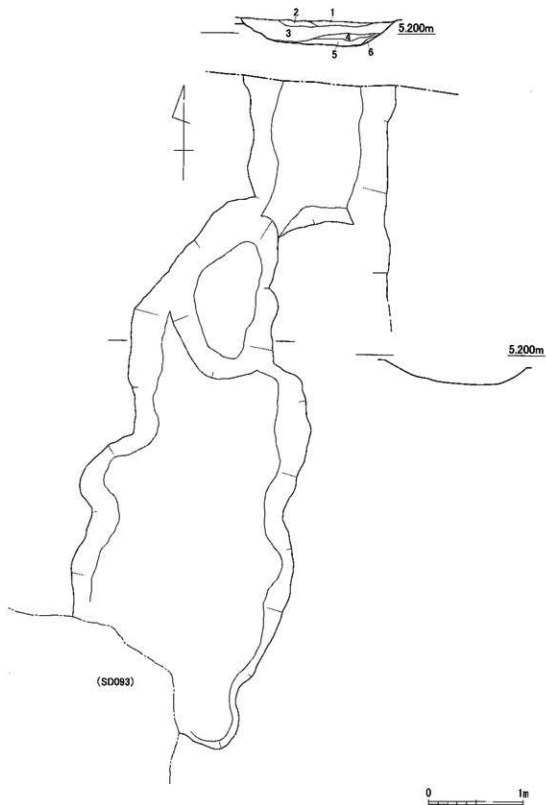
06-SD130出土遺物(第3-327図)

多量の金葉
母を含む
搬入品

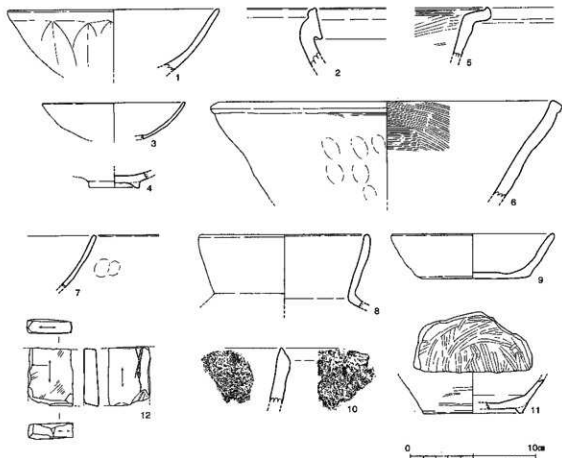
1は土師器小皿である。2・3は在地の土師器坏で、3は粘土に多量の金葉母を含むことから、他地域からの搬入品と考えられる。4は土師器の鍋、5は東播系須恵器の甕である。6は製塩土器で、古代の遺物である。7は瓦質土器の風炉で、肩部に風門を配する。8は瓦質土器の摺鉢で、内面下半部は使用による摩滅が顕著に認められる。

第3章 旧万寿寺跡第6次調査

1. 褐色土(10YR4/4) 砂質土、炭微量含む
2. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 砂質土、炭微量含む
3. 褐色土(7.5YR4/3) 灰褐色土(7.5YR4/2)のブロック混じり、炭微量含む
4. 褐色土(10YR4/4) シルト質土
5. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 砂質土、にぶい褐色(7.5YR5/4)粘質土混じる
6. 褐色土(7.5YR4/3) シルト質土



第3-328図 06-SD165実測図 (1/80)



第3-329図 O6-SD165出土遺物実測図(1/3)

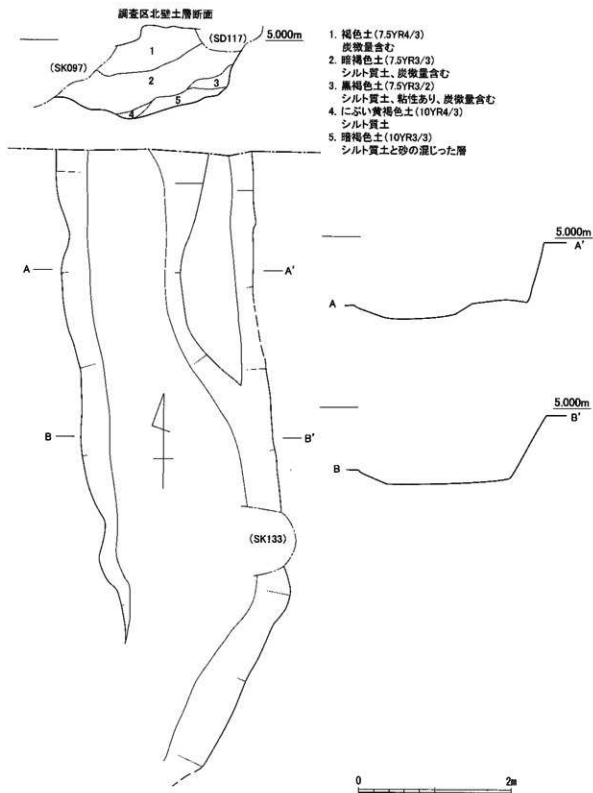
O6-SD165 (第3-328図)

2区の東部、O60～O62グリッドで検出した溝である。整地土が複雑に分布したため範囲の把握は困難を極めた。そのため平面形状は不整形である。北側が調査区外に続くが、検出した範囲で長さ14.2m以上、幅約5m、深さ約0.65mを測る。埋土は5層に分層できるが、浅い窪みに水平に堆積したような状況である。そのため人為的な遺構ではなく、自然地形の窪地あるいは何らかの整地の単位の可能性もある。遺構の時期は出土遺物からI期(14世紀前半)に位置づける。

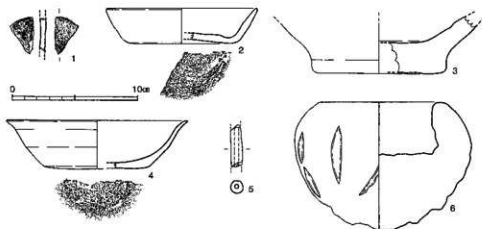
O6-SD165出土遺物(第3-329図)

1は青磁碗で、外面に鎊蓮弁文を施す。2は常滑焼の甕で、外反する口縁を上下に拡張して縁帯部を作る。3は白色薄手の土師器で、京都産土師器皿の可能性が高い。4は吉備系土師器碗の底部、5は土師器の鉢、6は瓦質土器の鉢、7は瓦器碗である。8～11は古代以前の遺物である。8は土師器の甕、9は土師器の坏、10は製塩土器である。11は黒色土器碗で、内面にヘラミガキを密に施す。8は古墳時代、9～11は古代に位置づけられる。12は砥石である。

京都産土師器
鉢皿



第3-330図 O6-SD184実測図 (1/50)



第3-331図 06-SD184出土遺物実測図(1/3)

06-SD184 (第3-330図)

2区のM60・M61グリッドで検出した溝である。土坑06-SK097完掘後に検出した遺構で、土層断面の観察から06-SK097に切られることが確認できる。また、東側は溝06-SD117に切られている。北側が調査区外に続くが、長さ8.17m以上、幅2.60m、深さ1.10mを測る。内部は東側にテラス状の段が付く。埋土は5層確認でき、1～3層は炭を含む。遺構の年代は06-SK097との切り合いからⅢ期(14世紀末～15世紀前半)に位置づける。

06-SD184出土遺物(第3-331図)

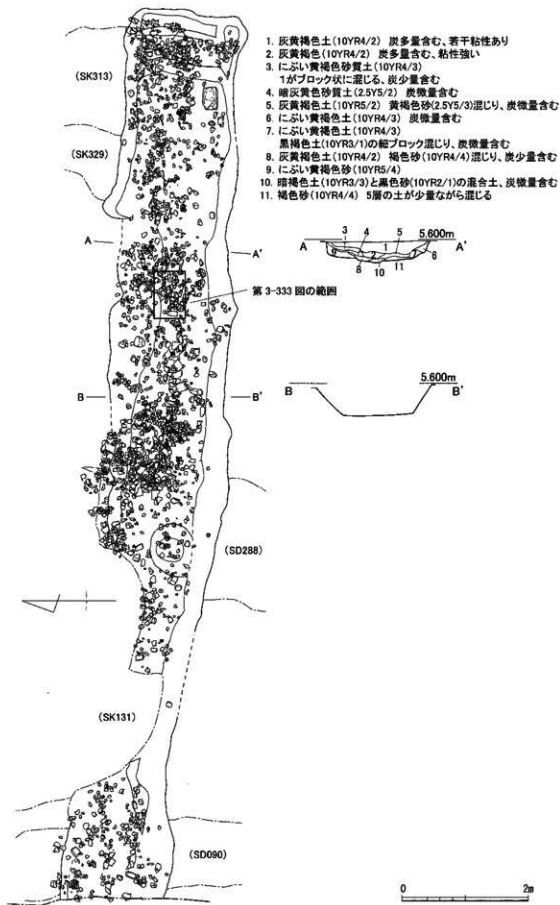
磁磁窯の壁 1は緑色釉を施す磁磁窯の壁である。2は在地の土師器坏で、底面に回転糸切り痕が残る。3は弥生土器の壺、4は古代の土師器坏で、前代の混入品である。5は土師質焼成の管状土鍾で、上下両端を欠く。6は凝灰岩製の半球形を呈する製品で、外面には数条の線刻と、上部には方形の窪みをもつ。石塔の部材であろうか。

06-SD221 (第3-332図)

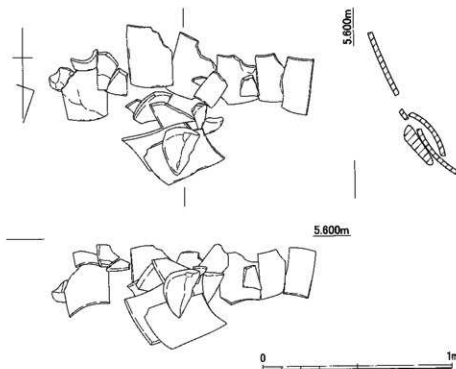
1区のL63～O63グリッドにかけて検出した東西方向の溝で、西側は中世大友府内町跡第29次調査のSD011に続く。他の遺構と複雑に切り合っており、06-SK313・06-SK329・06-SD345を切り、06-SK131・06-SK220・06-SK260等に切られている。旧万寿寺跡第6次調査区における区画性のある遺構では、南北方向の溝の埋没後に東西方向の溝が掘られており、本遺構もその傾向は同じである。長さ28.2m以上、幅3.9m、深さは西側で約1.5m、中央部で約1.0m、東部では0.7mと、東側に進むにつれて浅くなる。埋土は複雑であるが、特に溝の上位から中位にかけて多量の遺物が出土している。N63グリッドの一部では数点の平瓦が凸面を上にして、南側から投棄されたような状態で並んで出土している(第3-333図)。遺物は14～15世紀代のものがあり、中には天目碗や風炉、華瓶、香炉等の茶道具類や、大内系白色土師器皿、梵字文軒丸瓦等、稀少な遺物も目立つ。遺構の年代はⅣ期(15世紀中頃～後半)に比定される。

南側から投棄

梵字文軒丸瓦



第3-332図 O6-SD221実測図 (1/120)



第3-333図 O6-SD221瓦等出土状況 (1/20)

O6-SD221出土遺物 (第3-334図～3-381図)

枢府系白磁碗

1～10は白磁である。1は枢府系白磁碗で、内面に印花文を施す。2・3は碗である。2は薄手の器壁で内面に印花文を施す。4・5は皿、6は瓶である。7～9は合子で、それぞれ外面に印花文を施す。10は水注の把手で、上部の突起部には貫通する孔を穿つ。11～23は青磁である。11～17は碗で、11は外面に鎮蓮弁文を施す。12～14は厚手で無文の粗製碗である。15は見込みに花文を施す。18～21は皿で、20は口縁部及び外面の一部に付着物を削いだような痕跡が残る。21は底部が基筋底となる。22は青白磁の皿、23は青白磁の瓶である。24～28は緑釉を施す磁甕蓋の蓋である。29は陶器の鉢であろうか。口縁部を外側に拡張し、刻み目凸帯状に作る。30は陶器の壺である。31は薄手の器壁を持つ陶器の壺である。32・33は陶器の茶入で、ともに中国産と考えられる。

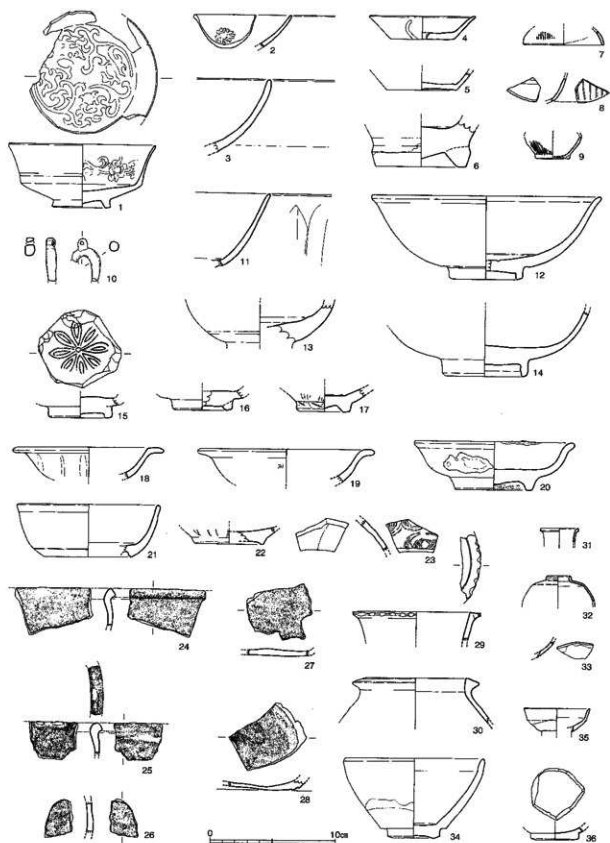
天目碗のミニチュア

34～36は中国産の天目碗で、34は外面には釉薬を二度掛けした痕跡が残る。35は天目碗のミニチュアである。37～55は国産の陶器類である。37は瀬戸美濃窯の卸皿、38は瀬戸美濃の水注の蓋である。39は胴部が膨らむ古瀬戸の尊式華瓶で、肩部には環を表現した粘土を貼り付ける。40・41は備前焼の甕で、口縁部を折り返して玉縁状に作る。42～44は常滑焼の甕である。45は焼締陶器の甕で、同部外面に爪の痕跡が残る。46は緑釉陶器で古代のものである。47～49は備前焼の摺鉢で、いずれも14世紀後半から15世紀初めに位置づけられる。50は焼締陶器で、底部から胴部が外に大きく開く器種不明のものである。51～55は甕である。

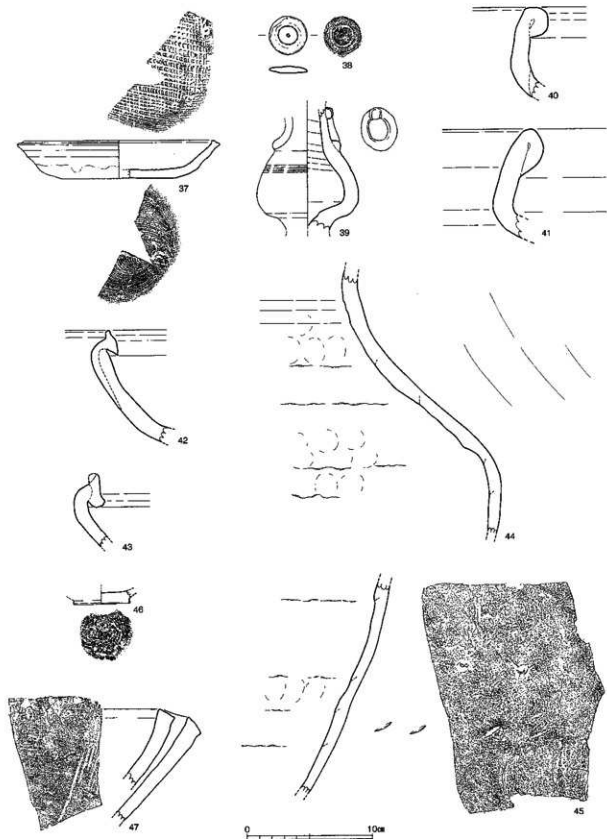
大内系土師器皿

56～239は土器類である。56～89は土師器小皿、90～138は土師器杯である。139～143は白色胎土で薄手の大内系土師器皿で、141・142は見込みに指頭による凹みを持つ。ロクロ目が顕著に認められることから、大内Ⅱ式に比定される。144～146は土師器の燗台で、144・145は高台状の高い脚が付く。147は土師器の羽釜である。148・149は瓦質土器の鍋、150は土師器の鍋で、150は内面に楊書状の痕跡がある。151は瓦質土器の甕で、外面に格子目状のタタキを施す。152は高台の付

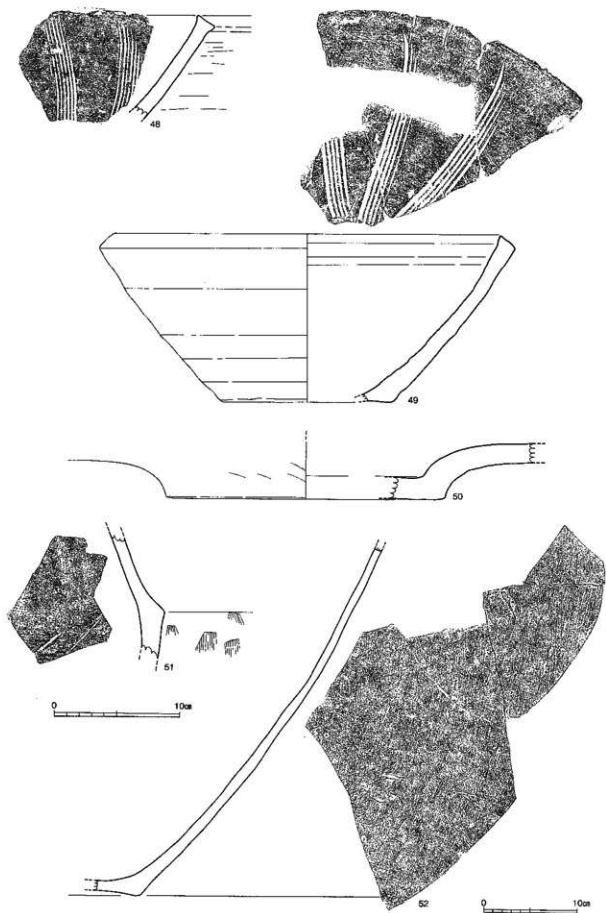
楊書状の痕跡



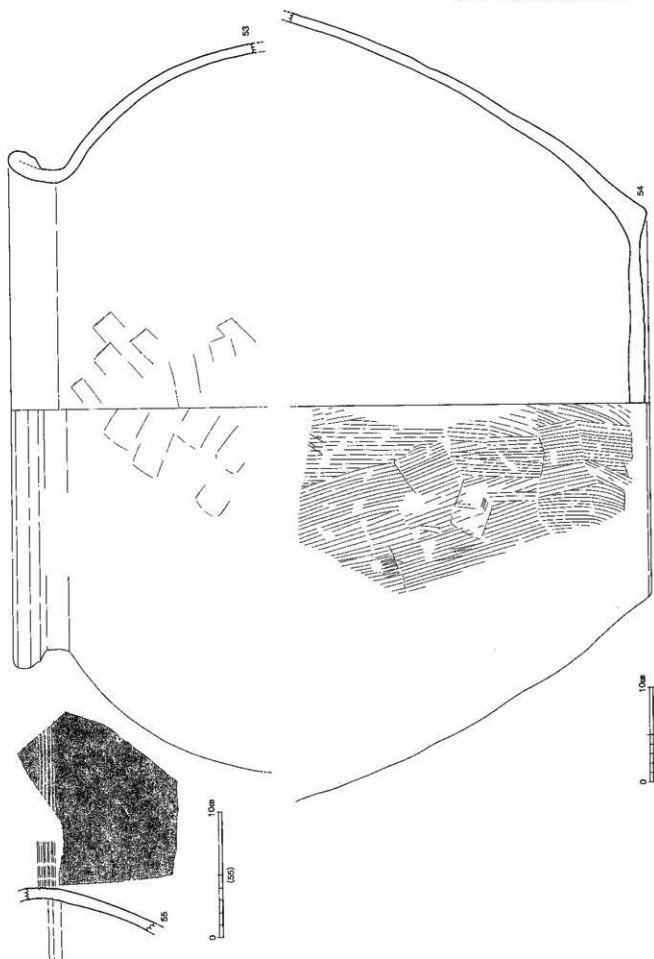
第3-334図 06-SD221出土遺物実測図①(1/3)



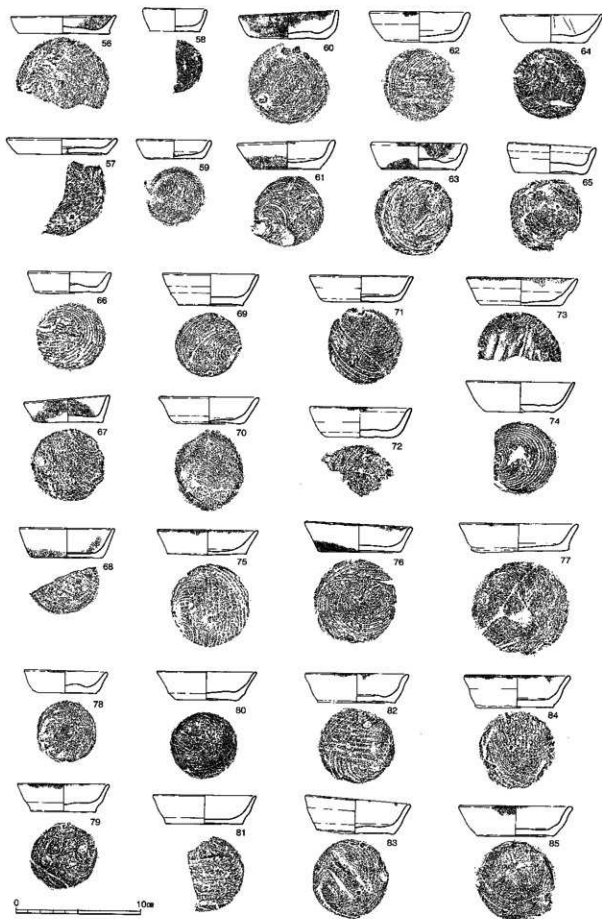
第3-335图 06-SD221出土遺物実測図② (1/3)



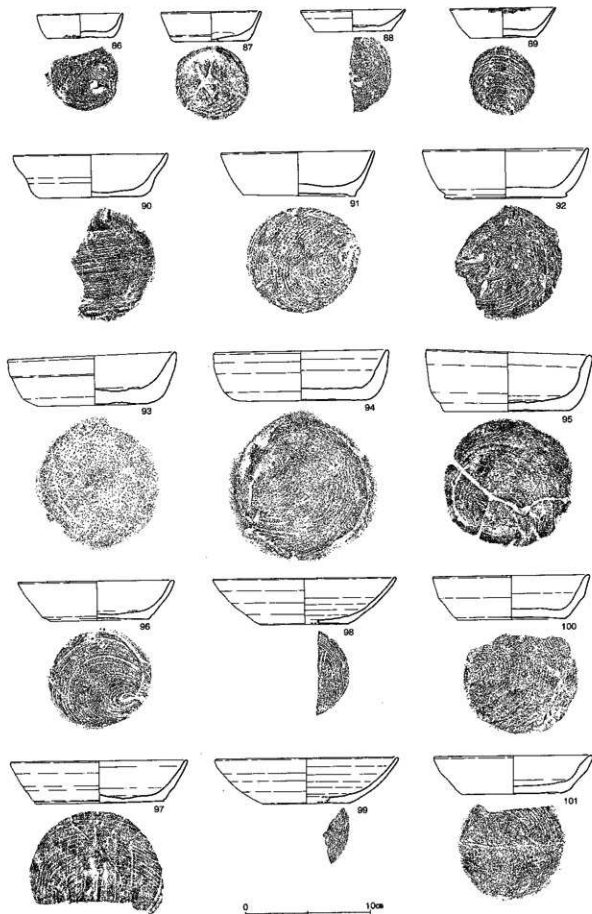
第3-336図 06-SD221出土遺物実測図③ (1/3)



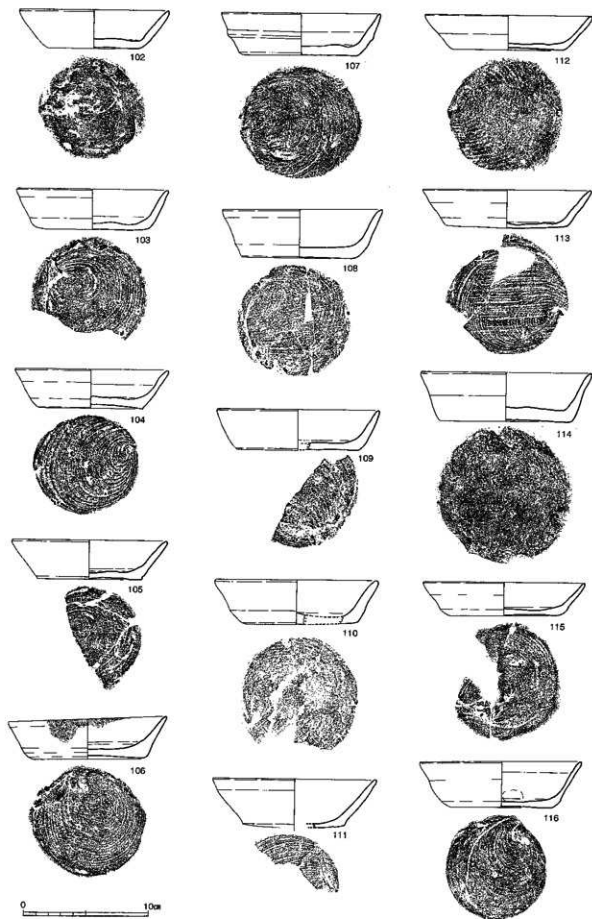
第3-337図 06-SD221出土遺物実測図④(1/4)



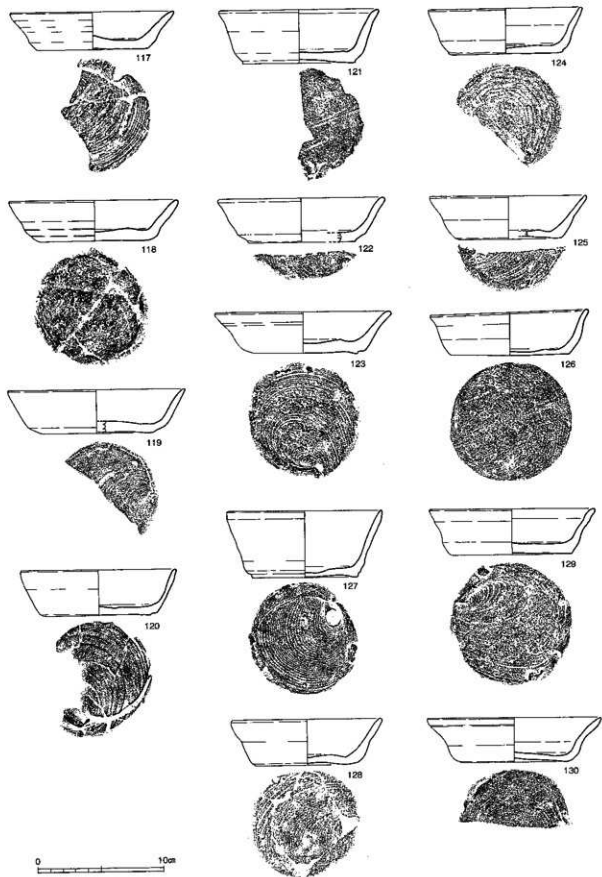
第3-338図 06-SD221出土遺物実測図③ (1/3)



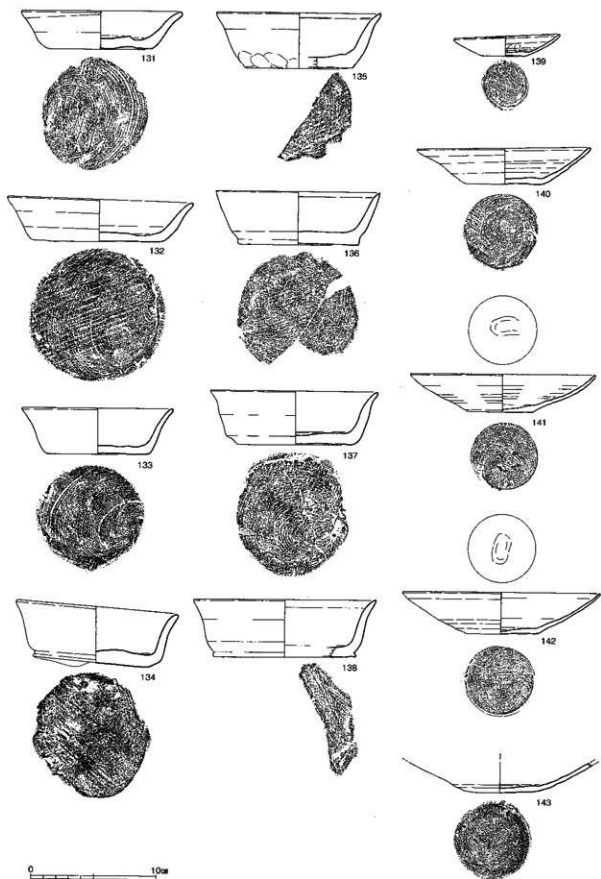
第3-339図 06-SD221出土遺物実測図⑥ (1/3)



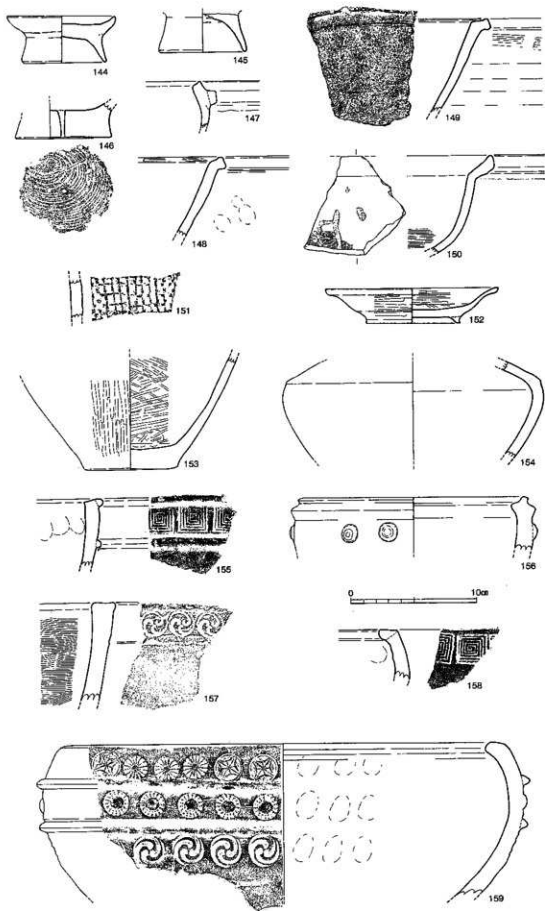
第3-340図 06-SD221出土遺物実測図⑦(1/3)



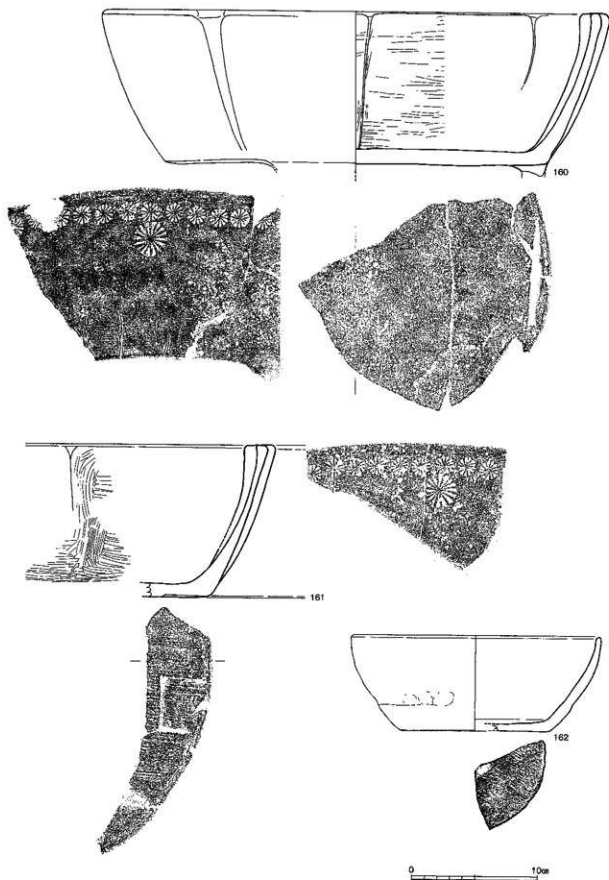
第3-341図 06-SD221出土遺物実測図⑥(1/3)



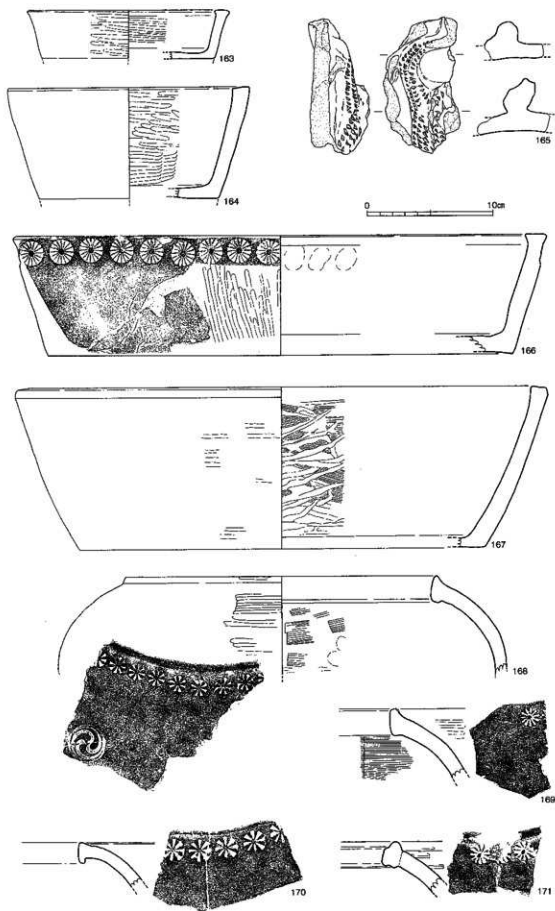
第3-342図 06-SD221出土遺物実測図③ (1/3)



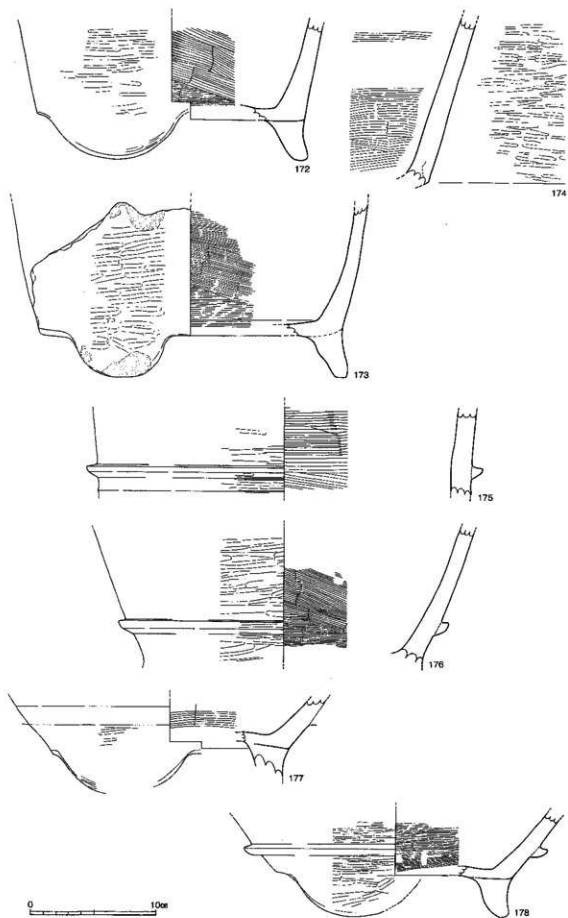
第3-343図 06-SD221出土遺物実測図⑩ (1/3)



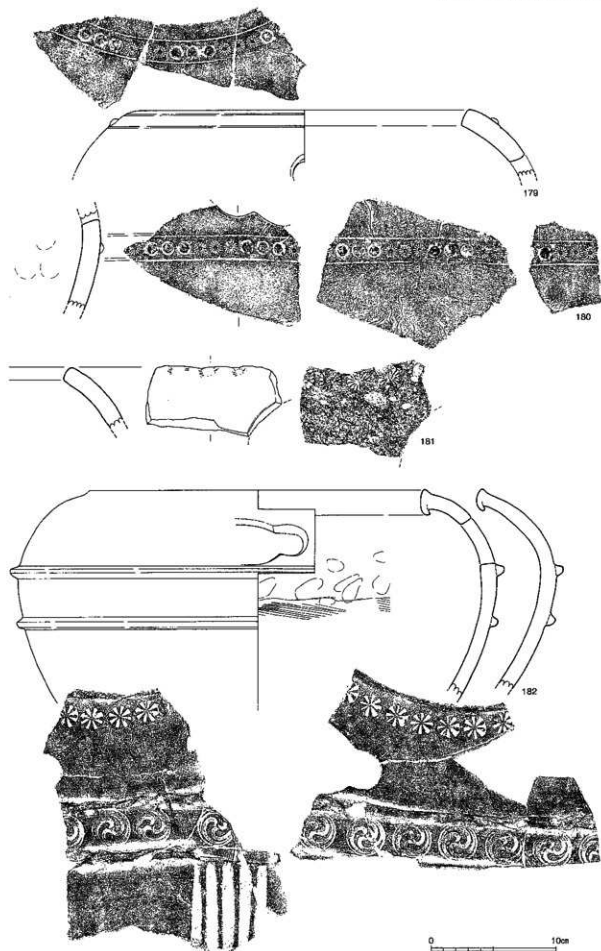
第3-344図 06-SD221出土遺物実測図①(1/3)



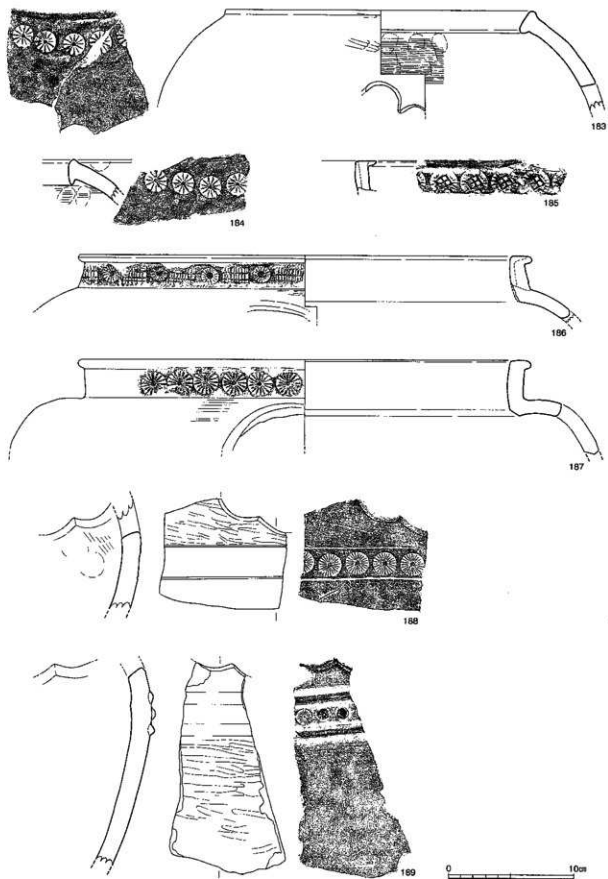
第3-345図 06-SD221出土遺物実測図② (1/3)



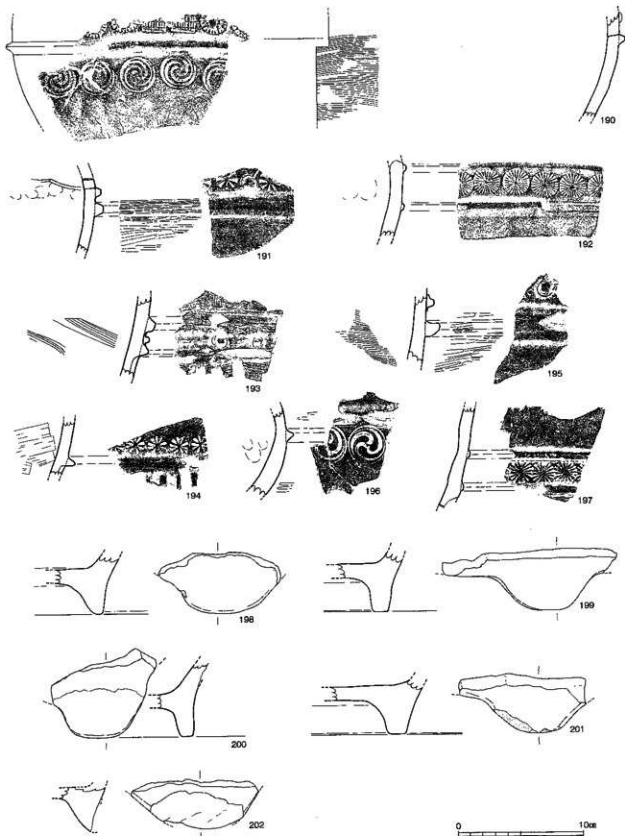
第3-346図 06-SD221出土遺物実測図③ (1/3)



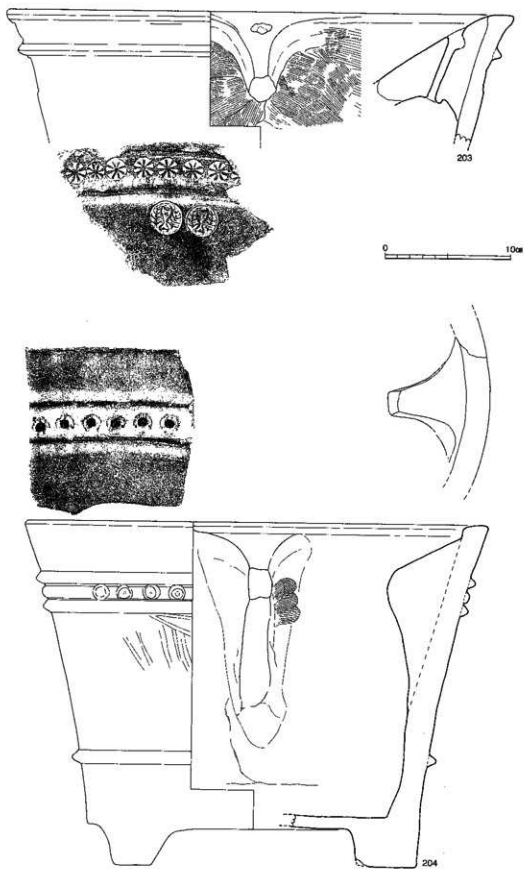
第3-347图 O6-SD221出土遺物実測図④ (1/3)



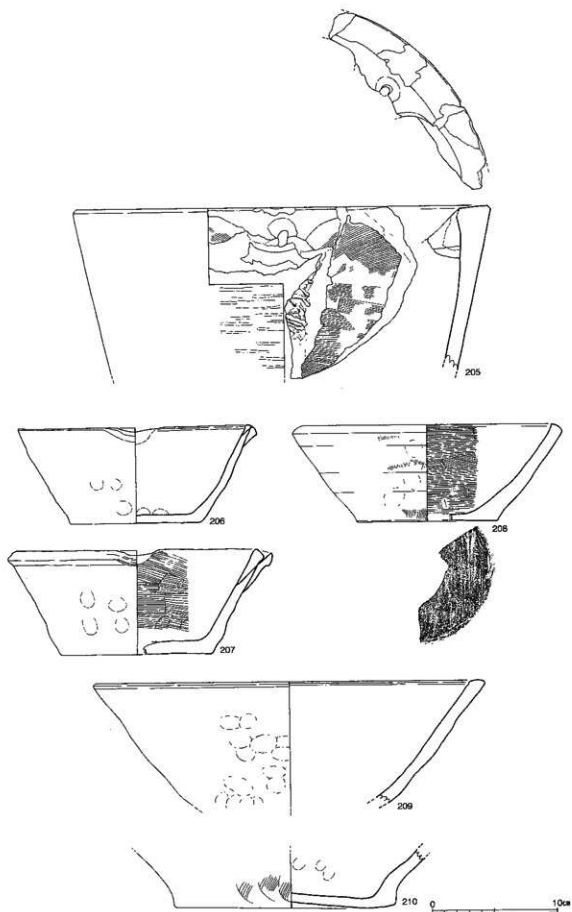
第3-348図 06-SD221出土遺物実測図⑤ (1/3)



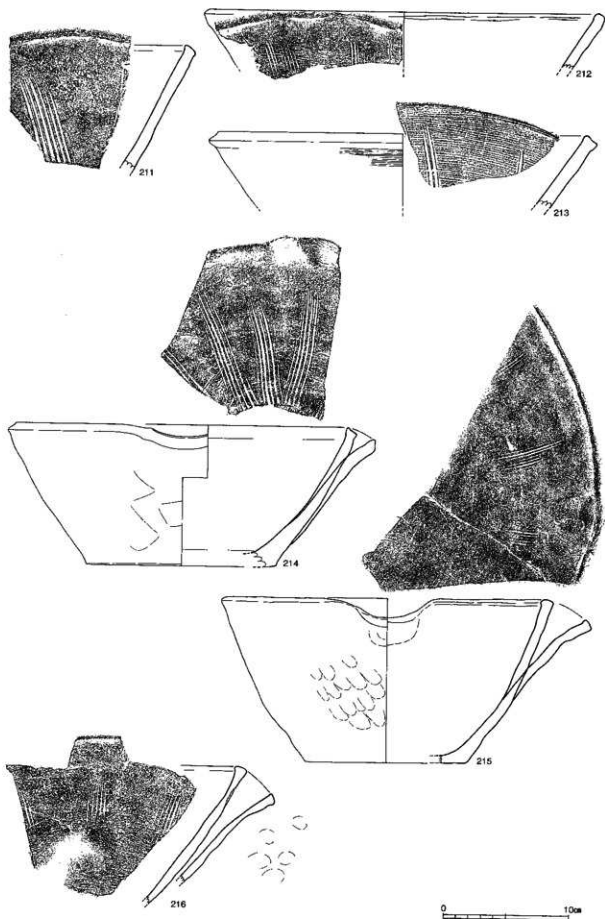
第3-349図 06-SD221出土遺物実測図⑯ (1/3)



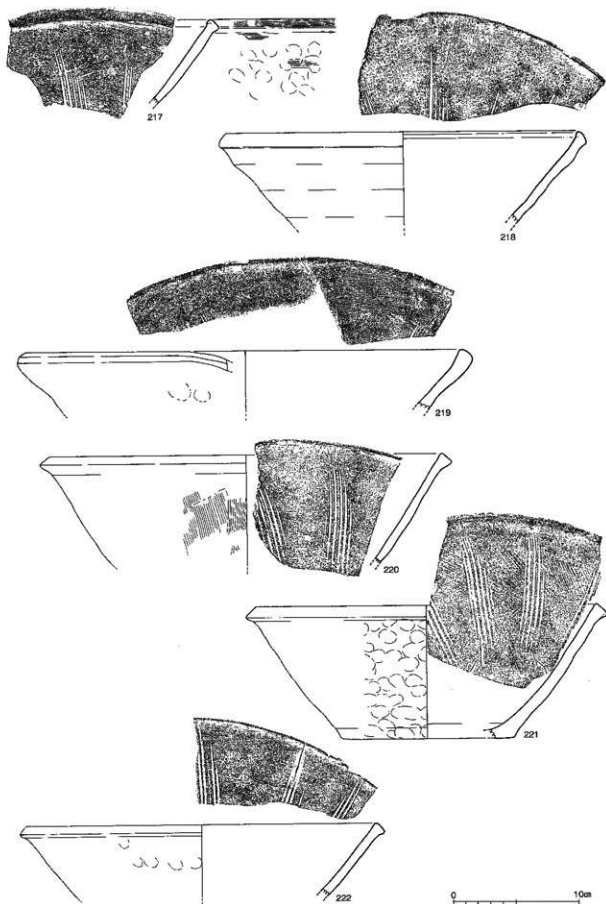
第3-350図 06-SD221出土遺物実測図㊸ (1/3)



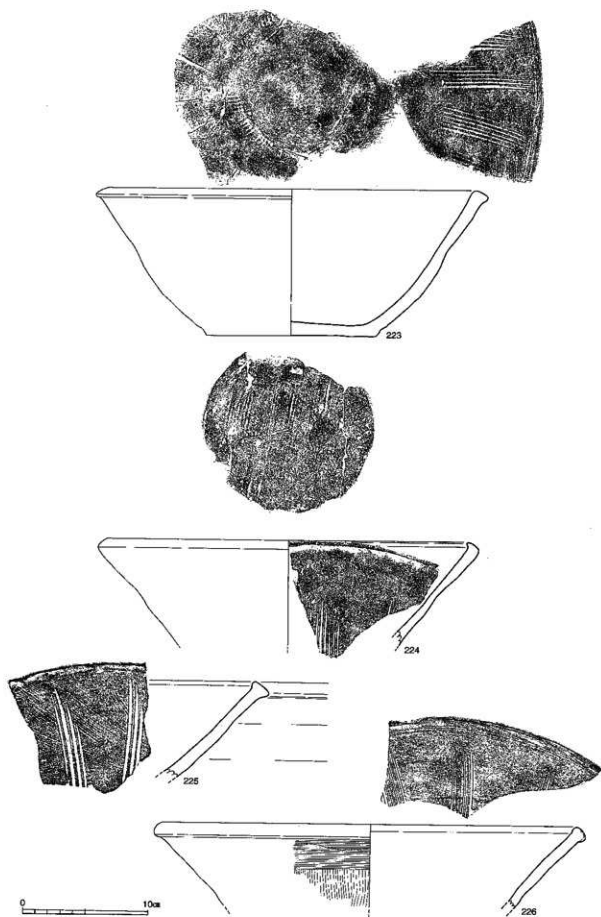
第3-351図 06-SD221出土遺物実測図⑧(1/3)



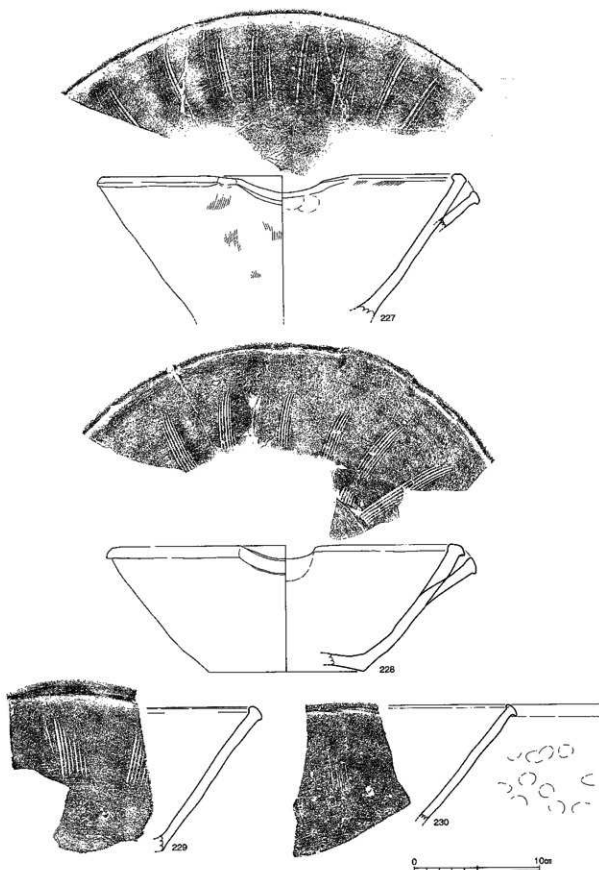
第3-352図 06-SD221出土遺物実測図④ (1/3)



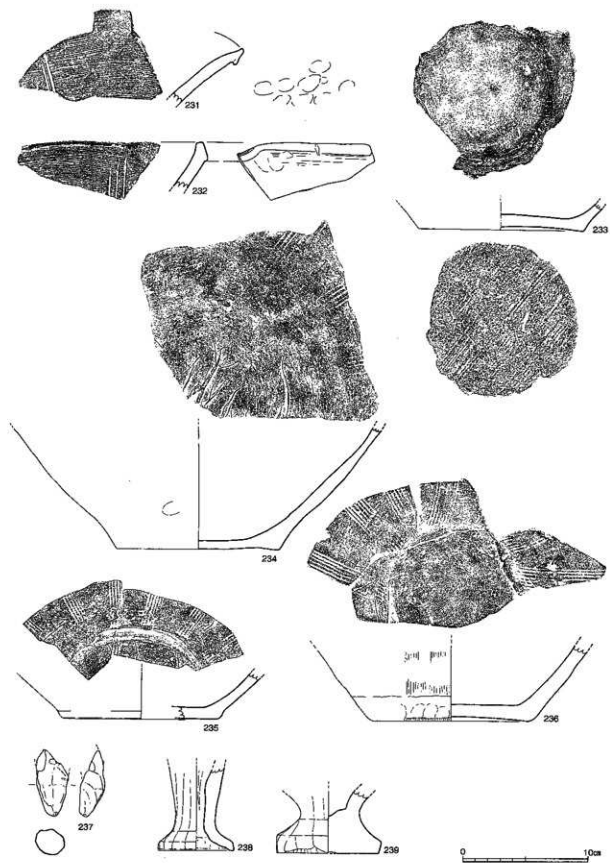
第3-353図 06-SD221出土遺物実測図①(1/3)



第3-354図 06-SD221出土遺物実測図⑧ (1/3)



第3-355図 06-SD221出土遺物実測図② (1/3)

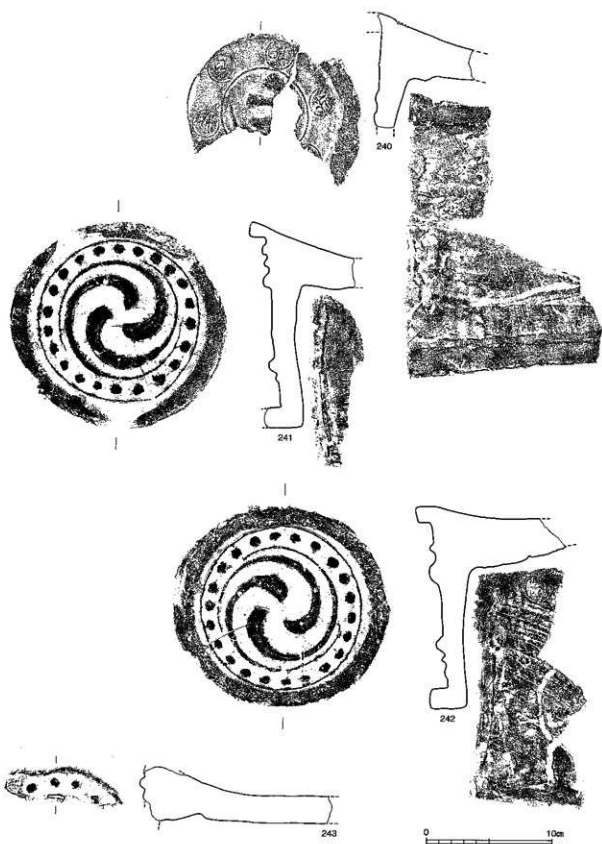


第3-356図 06-SD221出土遺物実測図② (1/3)

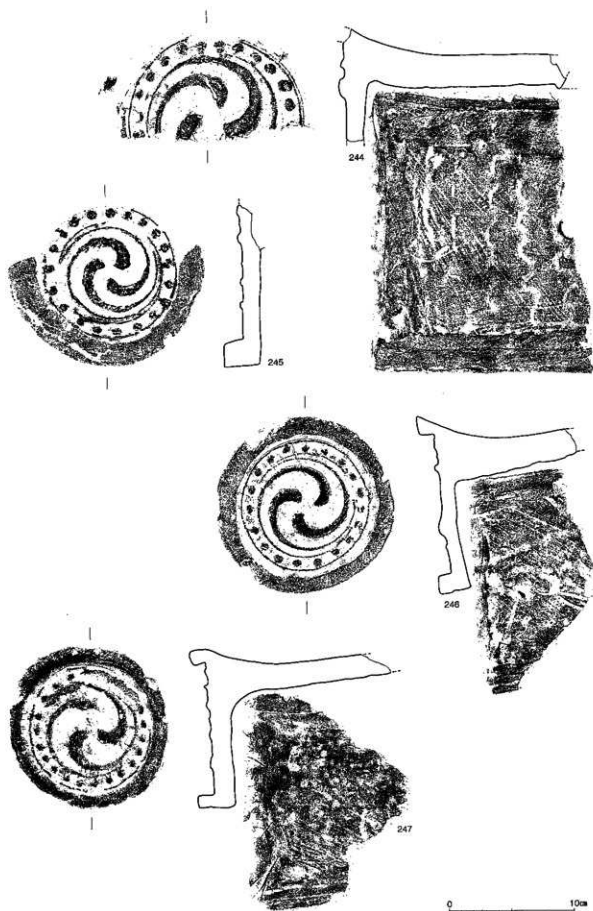
- く土師器坏で、古代の遺物である。153は弥生土器の壺、154は須恵器の壺である。155～239は瓦質土器である。155～178は火鉢で、160・161は口縁が輪花形となる奈良火鉢であろう。165は竜の貼り付け文を持つもので、刺突により鱗を表現する。同様の竜の貼り付けを持つものが旧万寿寺跡第10次調査区から出土しており、それには「万寿寺」の刻書が見られる。179～192は風炉である。口縁部が内湾するもの、ないしは内湾する肩部に口縁部が上方に短く立ち上がる器形で、それぞれ肩部に風門を配する。193～197は火鉢又は風炉の凸帯部の破片である。198～202は火鉢の底部で脚が付く。203～205は火鉢であるが、内面に突起が付くもので焔炉としての用途が考えられよう。206～210は鉢、211～236は楕鉢である。237は香炉の脚であろう。238・239は華蓋であろうか。底部は多角形状に面取りする。
- 奈良火鉢
竜の貼り付け文
- 焔炉
- 梵字文軒丸瓦
240～293は瓦類である。240～251は軒丸瓦で、240は梵字文軒丸瓦である。瓦当の中心に大きく「オン」の梵字を置き、上部から時計回りに「ア」、「ウーン」、(2字欠字、「ラ」、「ケン」)、「ソワ」、「カー」の梵字を配する。これは「四天王惣呪」の真言で、類例は大阪府能勢町の真如寺にある元応元年(1319)銘の梵鐘銘がある¹⁴が、他に類例を知らない。それぞれの種子には月輪と思われる円相を配する。241～251は右巻き巴文と珠文を配する軒丸瓦で、珠文数は241・242・248が22、245は20、246は19である。247は上部の珠文数点が潰れている。249・251は珠文の外側に圈線を持たない。252～260は軒平瓦である。瓦当に蕙草唐草文を施すもので、252～255は端部に区画線が残るのに対し、259は唐草文の末端が途切れている。254は釘穴を穿つ。257は斜めに切断した切隅瓦である。261は斗拱に似た表現を持つもので、瓦塔ないしは返子のようなものであろうか。262は鬼瓦ないしは道具瓦の一部で、赤彩の痕跡が残る。263は平瓦で、凸面に5箇所の穴を持つが、いずれも貫通しない。264～269は丸瓦である。264～268は凸面に縄目タタキ、凹面に布目と小さく連続する吊紐痕が残る。269は凸面に「×」状の線刻を施す。270～287は平瓦である。271・278は凸面の2箇所に成形台の痕跡と思われる方形状の突起が付く。288・289は扉振瓦、290～293は塼である。
- 切隅瓦
- 赤彩の痕跡
- 「×」状の線刻
成形台の痕跡
- 赤色顔料が付着
- 294～339は土製品・石製品・金属製品である。294は土師器坏の底部を転用した加工円盤である。295も底部を転用した加工円盤で、上面には赤色顔料が付着する。296は輪羽口である。297～305は土鍾で、297は紡錘形を呈し側面に沈線が巡る。298～305は管状土鍾である。306～318は石製品で、306～309は滑石製石鍋の転用品である。306は石鍋の肩部の破片の周囲を研磨し、背面には円形状の線刻を持つ。310は円形の溶結凝灰岩で、周縁に数箇所の切込みを持つ。石鍾であろうか。311～318は砥石である。319～328は鉄製品である。319～323は刀で、320・321は一部に木質が残る。324は刀子である。325は方形状を呈するもので、釘ないしは鏝であろうか。326～328は釘である。329・330は銅製品で、329は吊手金具、330は板状の製品である。331～339は銅銭で、331は北宋の至道元寶(995年初鑄)、332・333は北宋の皇宋通寶(1038年初鑄)、334は北宋の治平元寶(1064年初鑄)である。335は「寶」字以外は判読できない。336～338は銭種不明である。339は円環に銭貨が鑄されたものであるが、銭の遺存状態は悪く銭種は明らかにできない。
- 340～345は06-SD221の最下層として取り上げた遺物である。340は瀬戸美濃窯の鉤皿で、底面に回転糸切り痕が残る。341は頂部に擴みが付く土師器の坏蓋で、古代の遺物である。342は瓦質土器の鍋である。343・344は瓦質土器の風炉で、それぞれ風門を持つ。345は瓦質土器の火鉢の底部で、半円形状の脚が付く。

14 川藤政太郎(1946)「梵字線刻」、河原書房

この真言については狭川真一氏(元興文文化財研究所)、三木浩子氏からそれぞれ御教示を頂いた。



第3-357図 06-SD221出土遺物実測図①(1/3)



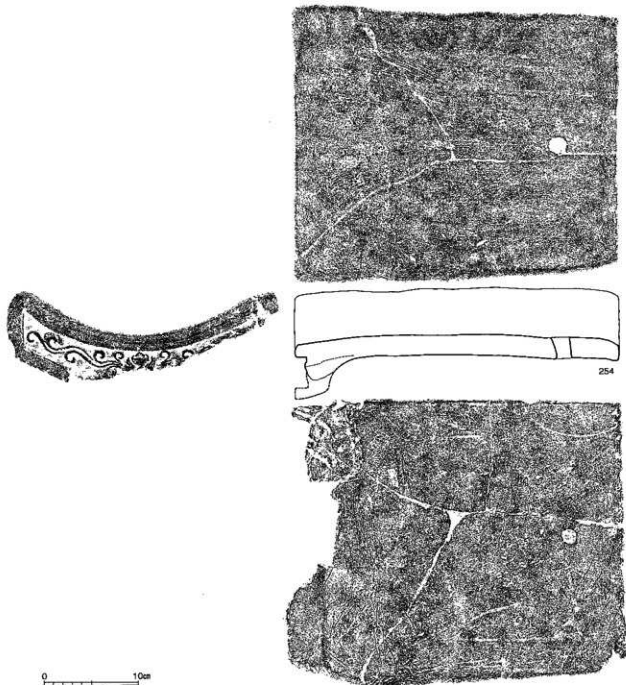
第3-358図 06-SD221出土遺物実測図④ (1/3)



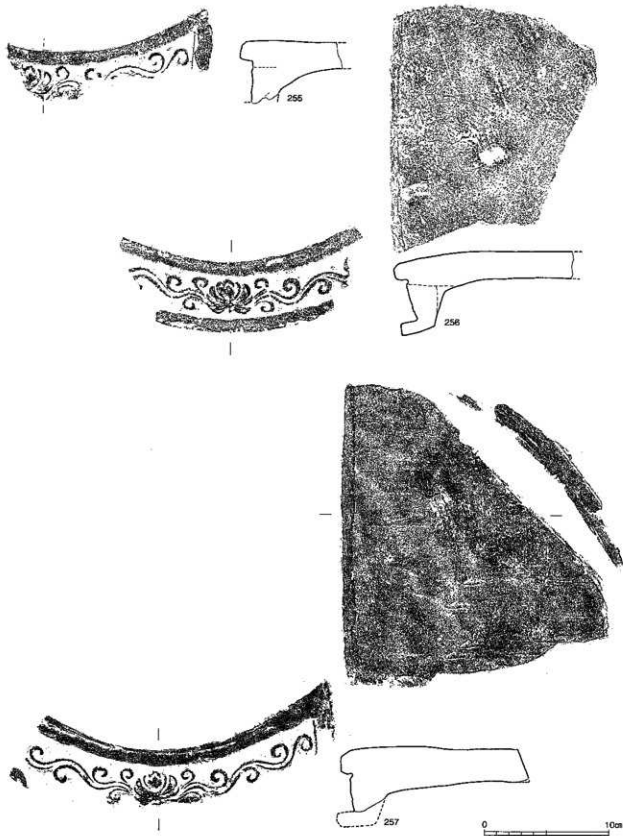
第3-359図 06-SD221出土遺物実測図④ (1/3)

06-SD282 (第3-382図)

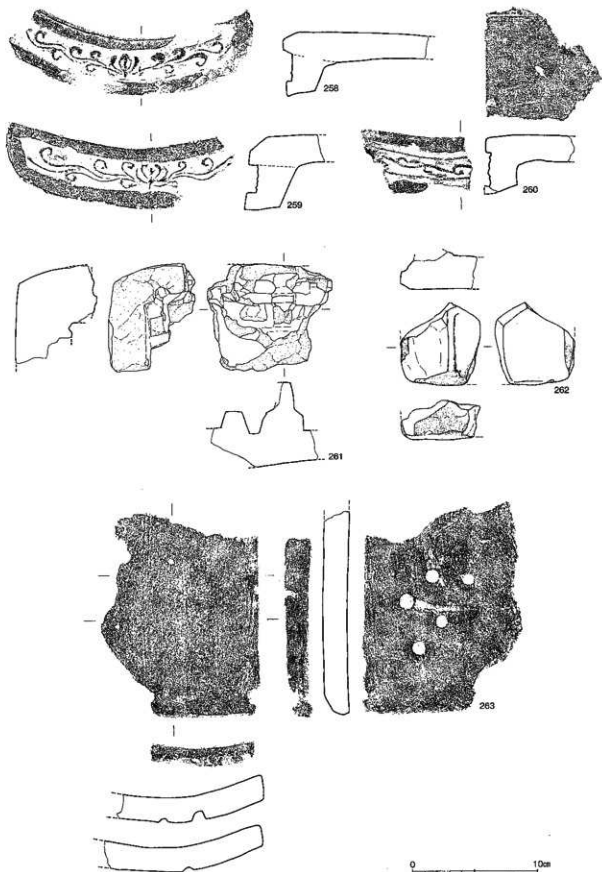
1区のN62・O62グリッドで検出した溝である。東西両端をそれぞれ06-SE312、06-SK131に切られるため全体の規模は明らかにできないが、長さ7.8m以上、幅1.62m、深さ0.23mを測る。上記の他に06-SE283・06-SK239・06-SK274と重複しており、06-SE283を切り、06-SK239・06-SK274に切られている。遺物の量は多くはないが、遺構の時期はI～II期（14世紀前半～末）に位置づける。



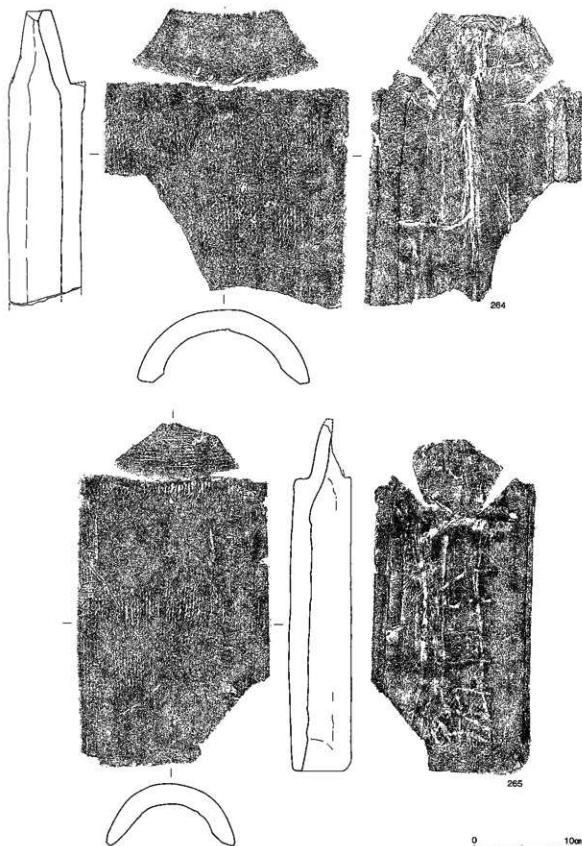
第3-360図 06-SD221出土遺物実測図②(1/4)



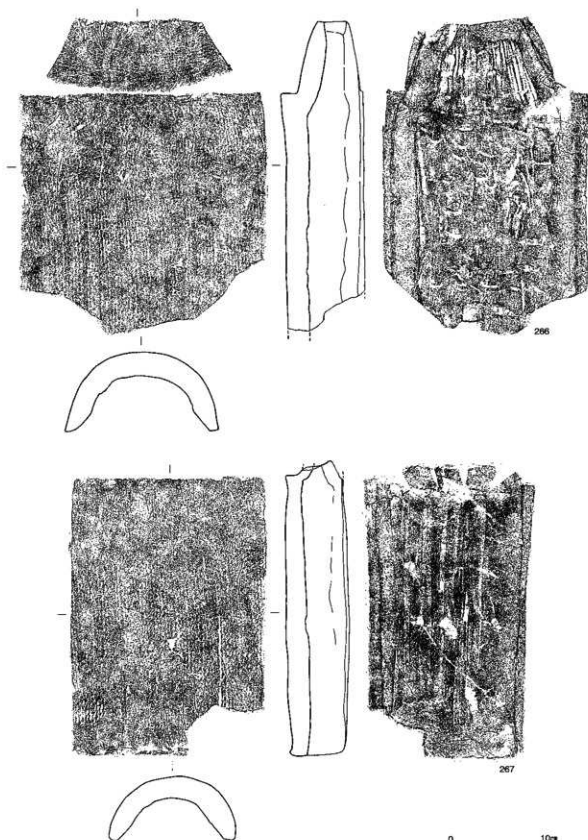
第3-361図 06-SD221出土遺物実測図④ (1/3)



第3-362図 06-SD221出土遺物実測図④ (1/3)



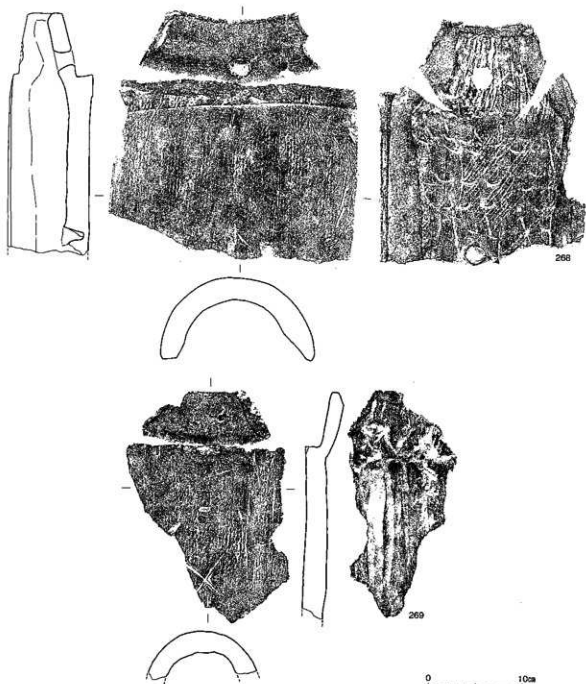
第3-363圖 06-SD221出土遺物実測図④ (1/4)



第3-364図 06-SD221出土遺物実測図⑤ (1/4)

06-SD282出土遺物 (第3-283図)

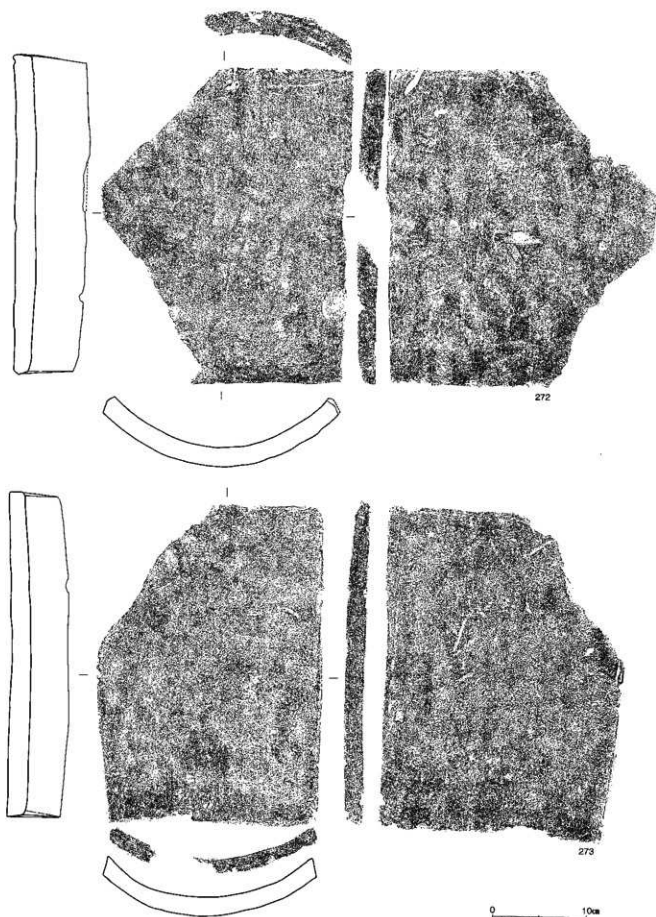
古瀬戸の梅瓶 1は古瀬戸の梅瓶である。2は土師器小皿で、底面に回転糸切り痕と板状圧痕が残る。3は軒丸瓦で、瓦当に右巻きの巴文とその周所に珠文を施す。4は滑石製石鍋の破片を加工したもので砥石であろう。



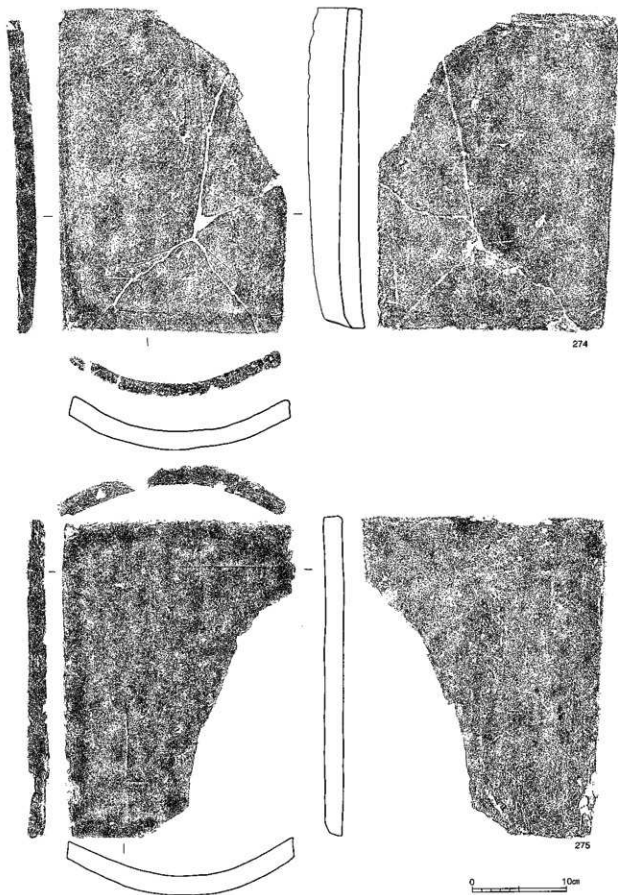
第3-365図 06-SD221出土遺物実測図② (1/4)



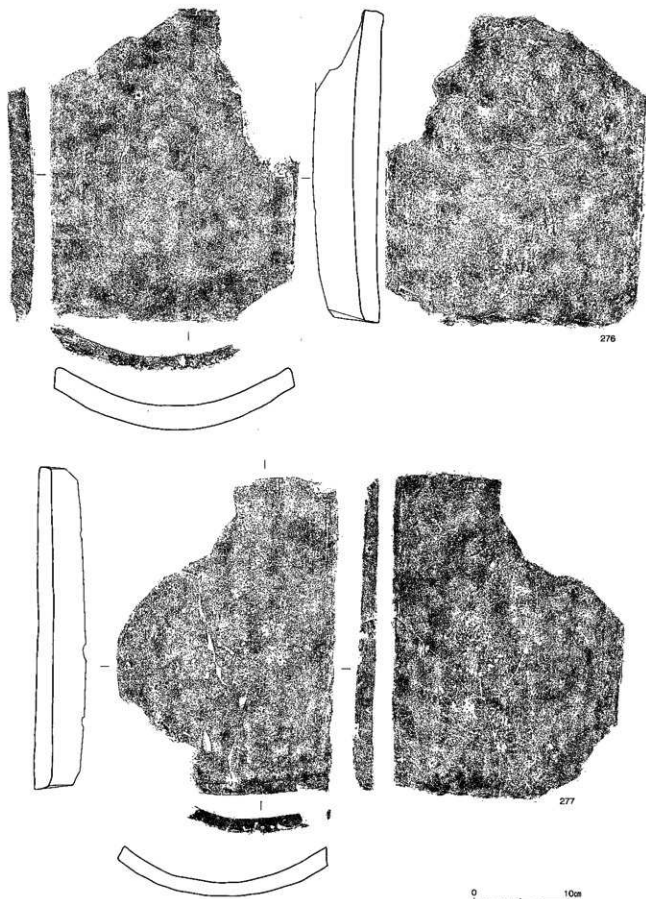
第3-366図 06-SD221出土遺物実測図⑨(1/4)



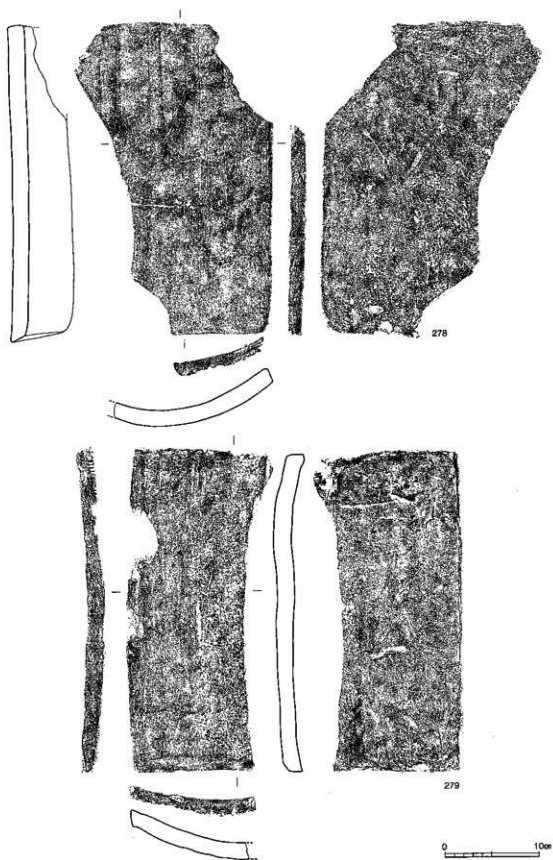
第3-367図 06-SD221出土遺物実測図⑨ (1/4)



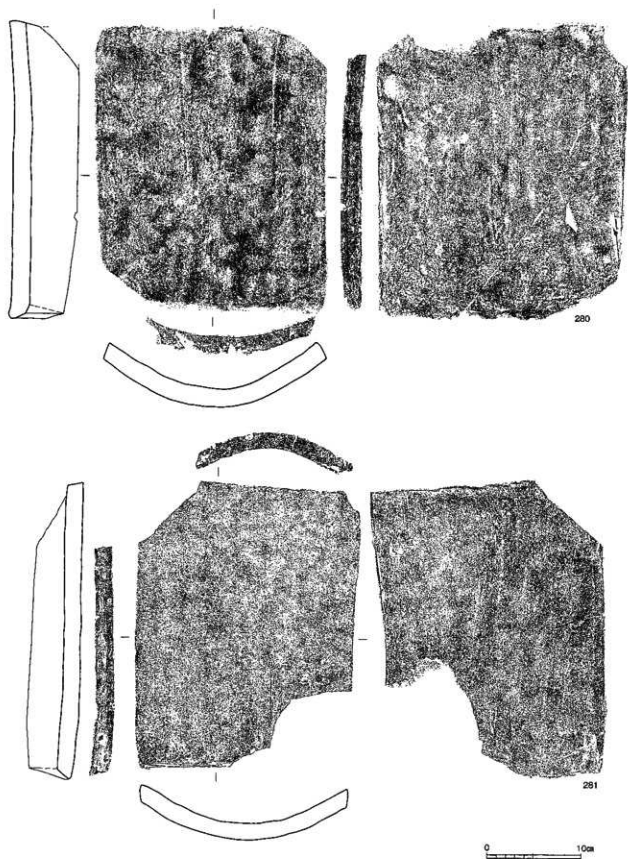
第3-368図 06-SD221出土遺物実測図④ (1/4)



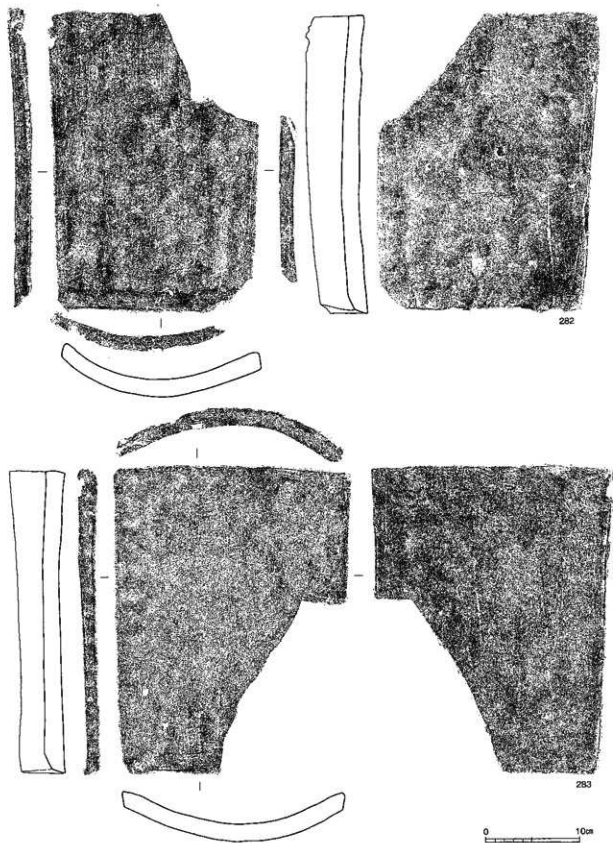
第3-369図 06-SD221出土遺物実測図④ (1/4)



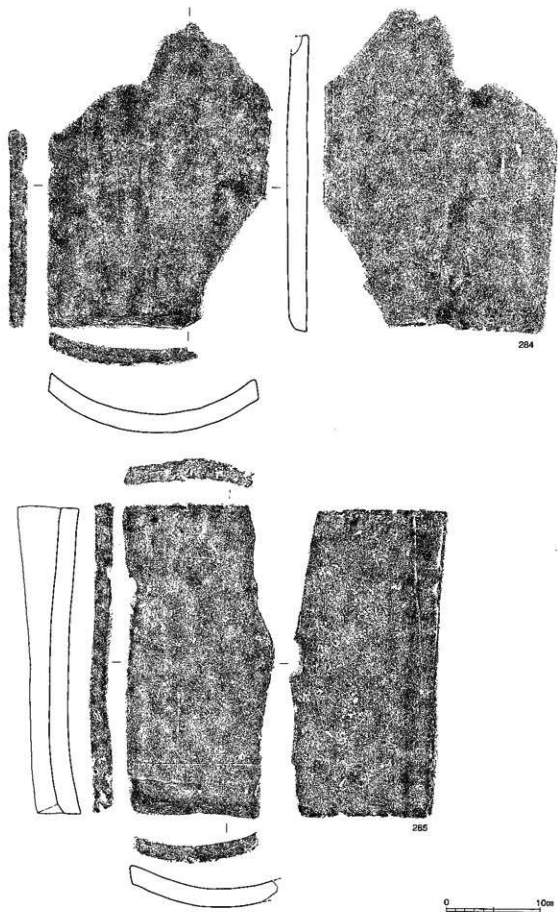
第3-370図 06-SD221出土遺物実測図⑤ (1/4)



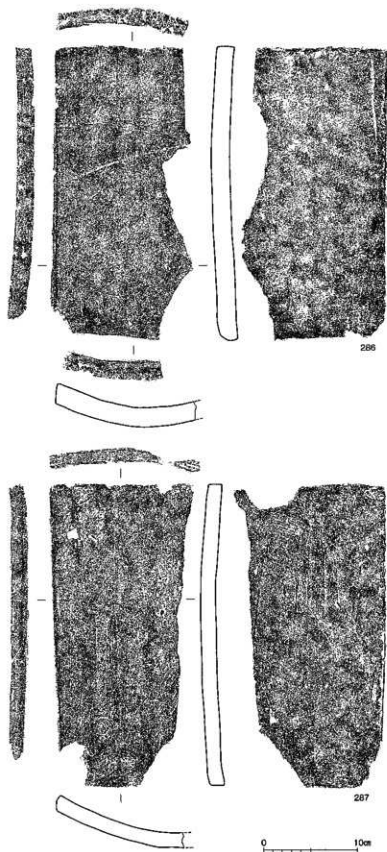
第3-371図 06-SD221出土遺物実測図④ (1/4)



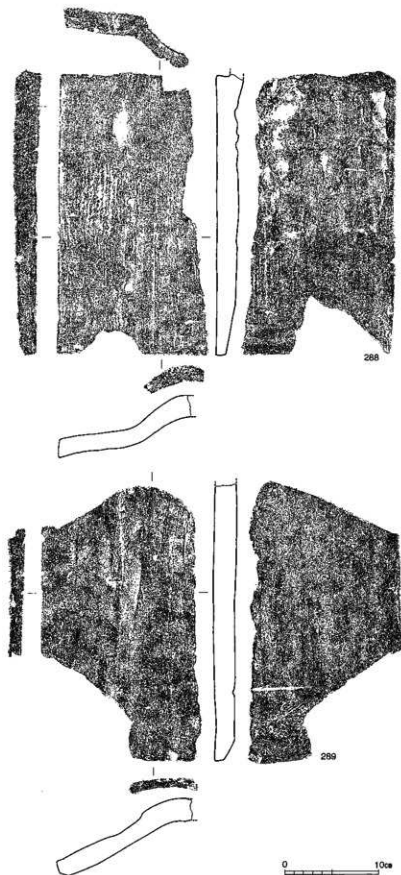
第3-372図 06-SD221出土遺物実測図⑨(1/4)



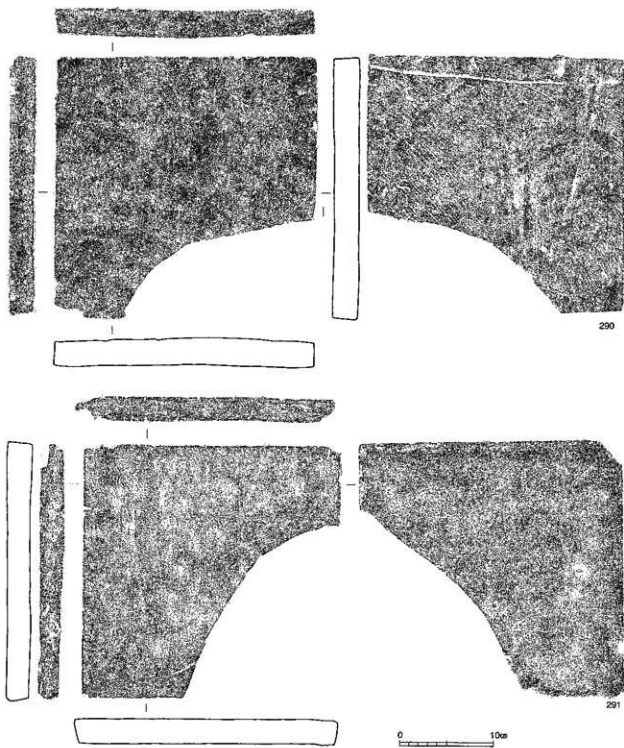
第3-373図 06-SD221出土遺物実測図④ (1/4)



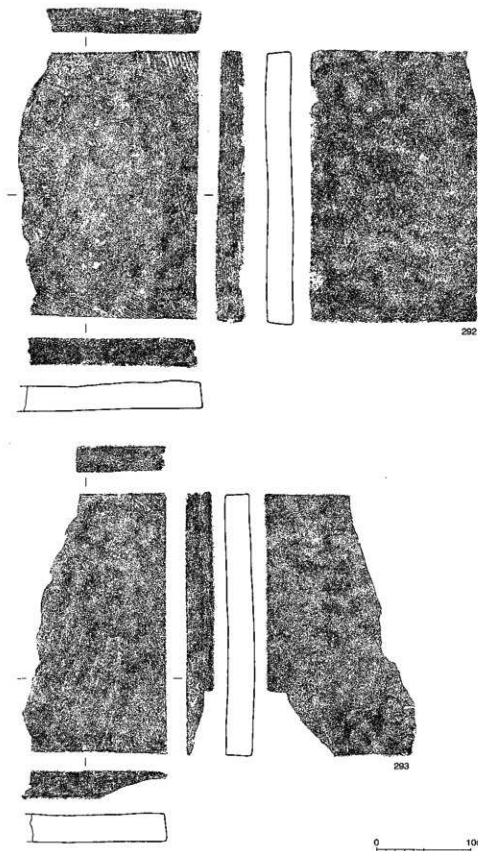
第3-374図 06-SD221出土遺物実測図④ (1/4)



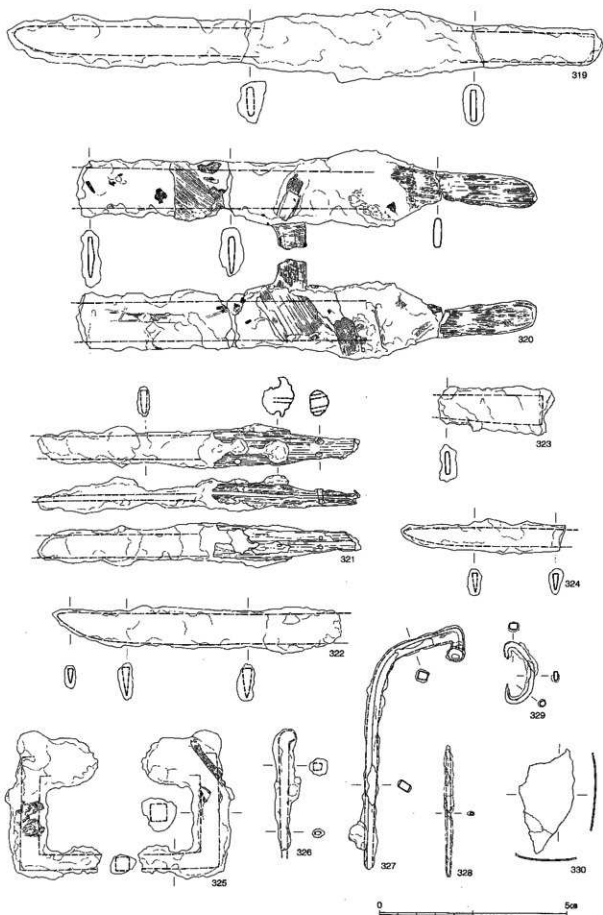
第3-375図 06-SD221出土遺物実測図④ (1/4)



第3-376図 O6-SD221出土遺物実測図⑧ (1/4)



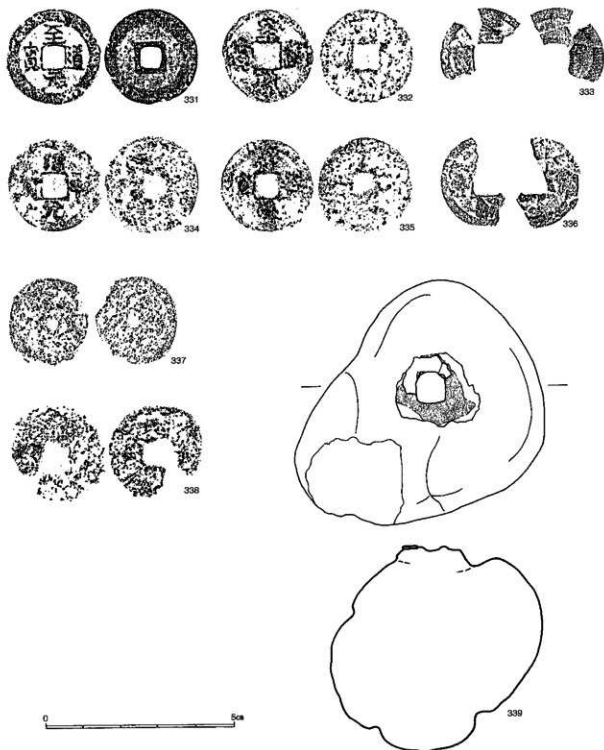
第3-377図 06-SD221出土遺物実測図④(1/4)



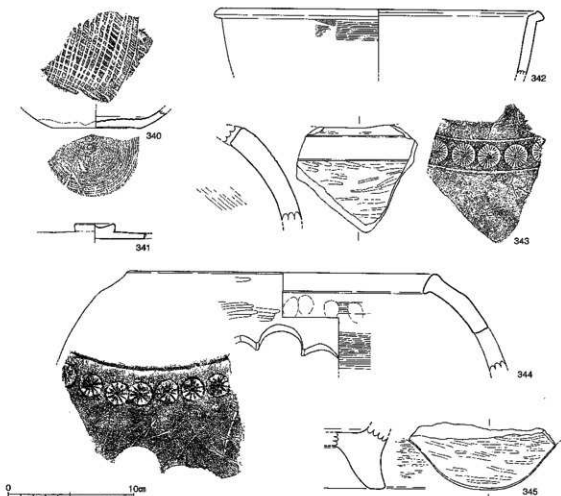
第3-379図 06-SD221出土遺物実測図①(1/2)

06-SD288 (第3-284図)

1区のM63・N63・M64・N64グリッドで検出した南北方向の溝で、北は06-SD221に切られ、南は旧万寿寺跡第7次調査区の07-SD288に続く。検出範囲で長さ6.14m、幅4.08m、深さ1.16mを測る。複数の遺構と重複しており、06-SK314・06-SK326を切り、06-SD221・06-SK269に切られている。埋土は6層に分層でき、大きく1層が入るのに対し、2～6層の単位は比較的細かい。溝の断



第3-380図 06-SD221出土遺物実測図①(1/1)



第3-381図 O6-SD221下層出土遺物実測図(1/3)

土師器坏がまとまって出土
鉢が集中して出土
区画溝

面形状は上部東側に段が付き、底に向かってV字状に掘り込んでいる。遺物は土師器坏がまとまって出土している他、南壁際で錢貨が集中して出土している。出土遺物から、遺構の年代はⅢ期(14世紀末～15世紀前半)に位置づける。遺構の規模や形状から区画溝と考えられる。

O6-SD288出土遺物(第3-285図～3-290図)

1は白磁の皿で、内面に節撰文を施す。2は白磁の合子蓋で、外面に狸押し文を施す。3は青白磁の瓶類の破片である。4は緑釉陶器の底部である。5～7は土師器の小皿、8は小坏で、8は口縁部に煤が付着する。9～41は土師器の坏である。9～19は口縁部が内湾するもので、9は底面に方形の釘穴、14は円形の小孔を穿つ。20～29は口縁部が直線的に開くもので、21～26は胴部器壁の中心が膨らむ。27～29は外面に整形による稜線が顕著に残る。30～40は口縁部が外反するもので、35～40は端部の内側を削いで先尖り気味に作る。41は底部で、見込に墨書の痕跡があるが判読できない。42は土師器の坏で、口縁部内面に1条の沈線を施す。古代の遺物である。43は東播磨須恵器の甕で、外面にタタキを密に施す。44は土師器の羽釜、45は土師器の鍋、46は瓦質土器の鉢、47は瓦器碗である。48は瓦質土器の火鉢で、外面に擬位のミガキを施す。49は瓦質土器の指鉢、50～52は土師質焼成の管状土錘である。

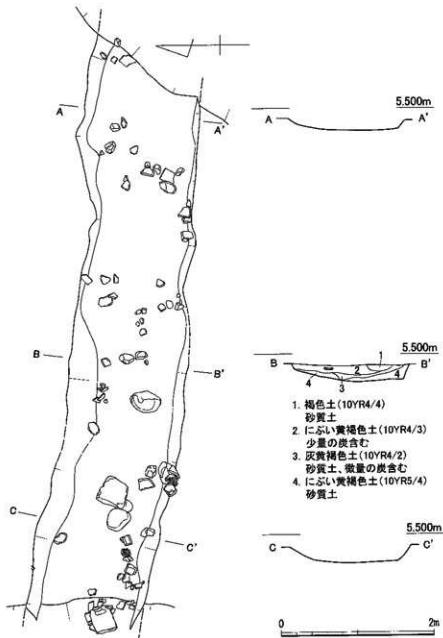
墨書の痕跡

53～68は錢貨である。53は唐の開元通寶(621年初鑄)である。54～61は北宋錢で、54は咸平

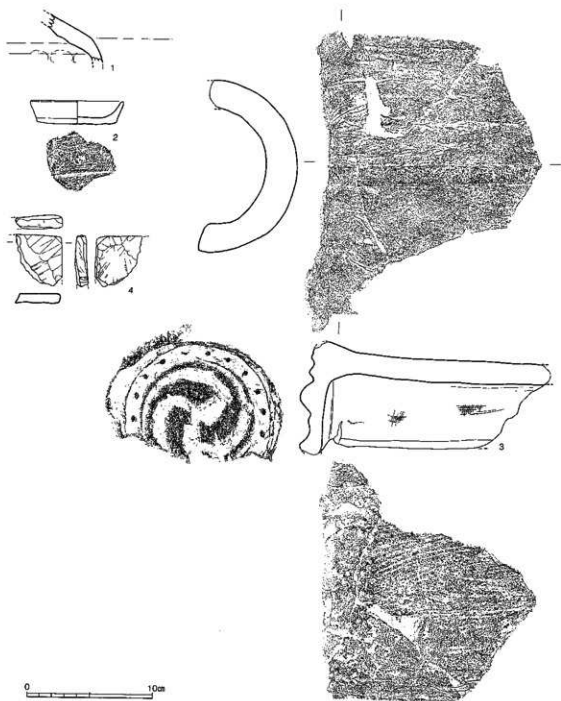
元寶(998年初鑄)、55は祥符元寶(1009年初鑄)、56は皇宋通寶(1038年初鑄)、57は嘉祐通寶(1056年初鑄)、58は熙寧元寶(1068年初鑄)、59は元豐通寶(1078年初鑄)、60は紹聖元寶(1094年初鑄)、61は政和通寶(1111年初鑄)である。62は南宋の嘉定通寶(1208年初鑄)。63は全体の3分の2を欠失し、寶の字が判読できるが錢種は不明。64～68は数点の錢貨が鏽により固着したものである。64は3点が固着しており、うち2点は唐の開元通寶と北宋の紹聖元寶とわかる。65は14点が固着するもので、1点は錢文が不鮮明ではあるが唐の軋元重寶(758年初鑄)の可能性が高い。軋元重寶は1枚で10文に相当する当十錢である。66は3点が固着し、うち2点が判読できる。1点は前蜀の咸康元寶(925年初鑄)、もう1点は北宋の皇宋通寶である。67は2点が固着するもので、うち1点は北宋の元豐通寶である。68は鏽の状態ではなく、5cm×7cmの範囲にある8点の錢貨が固着したもので、北宋の熙寧元寶1点だけが判読できる。

南宋の嘉定通寶

唐の軋元重寶

当十錢
前蜀の咸康元寶

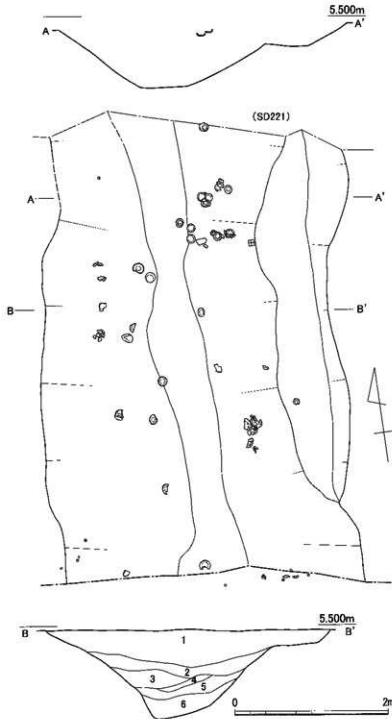
第3-382図 06-SD282実測図(1/50)



第3-383図 06-SD282出土遺物実測図(1/3)

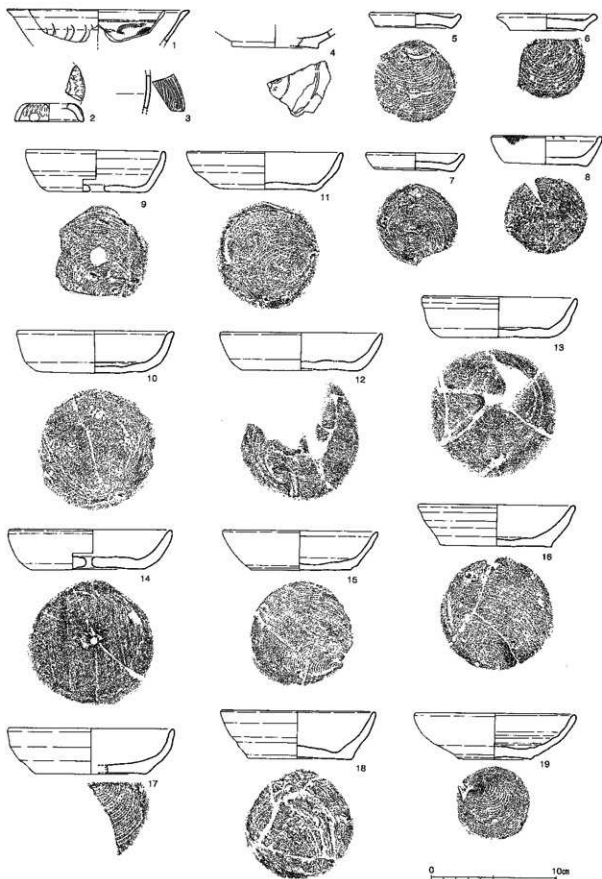
06-SD345 (第3-391図)

I区のL62・L63・M63グリッドで検出した溝である。溝06-SD090や06-SD221の完掘後に検出したもので、そのため上部の大部分を削平されている。北半部は06-SD090とほぼ同じ位置にあるが、06-SD221と切り合う部分で東に緩やかに折れる。長さ10.92m、幅1.03m、深さ1.08mを測る。埋土は灰黄褐色砂質土(10YR5/2)の単一層である。遺物は検出面近くから古墳時代初頭の土師器が出土したが、内部からは中世の遺物が出土しており、Ⅲ期(14世紀末～15世紀前半)に位置づける。

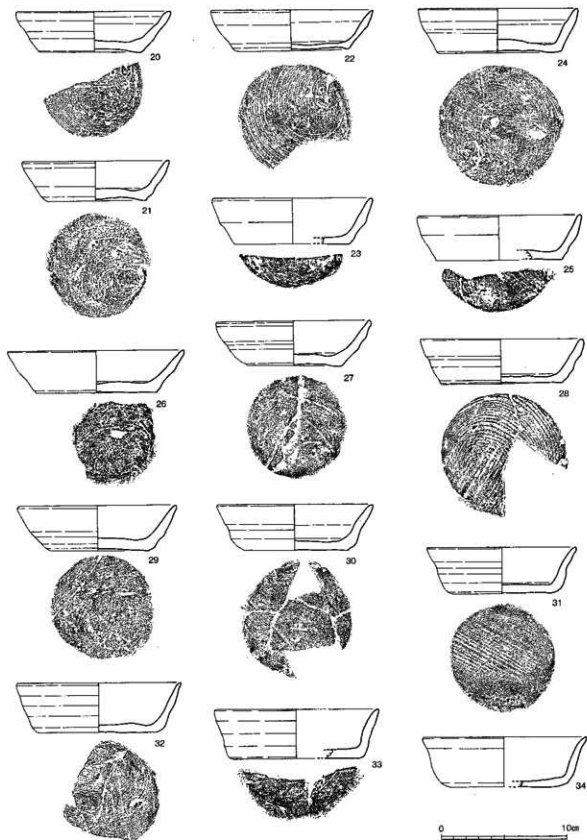


1. 灰褐色土(7.5YR4/2) シルト質土、褐灰色土(7.5YR4/1)が斑状に混じる砂及び炭少量含む
2. 褐色土(10YR4/4) シルト質土、炭少量含む
3. 暗褐色土(10YR3/3) シルト質土、炭微量含む
4. 褐灰色砂質土(10YR5/1) 細粒砂層、炭微量含む
5. にぶい黄褐色土(10YR4/3) シルト質で粘性やや強い、炭中量程度含む
6. オリーブ褐色砂(2.5YR4/3) 粗粒砂多く粘り、炭微量含む

第3-384図 O6-SD288実測図 (1/50)



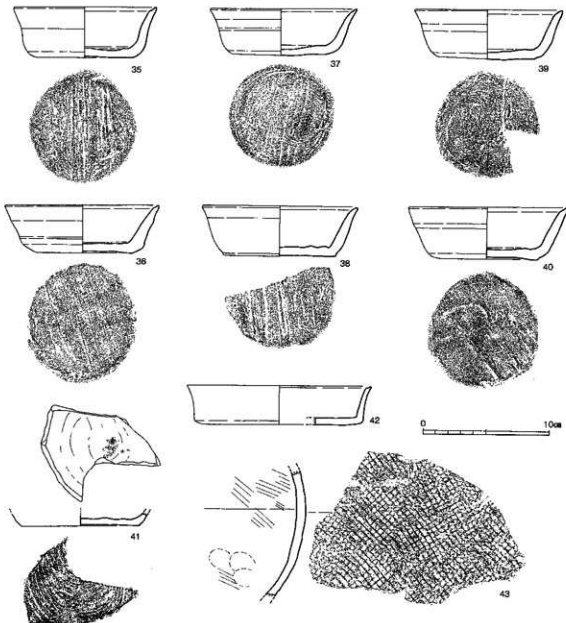
第3-385図 O6-SD288出土遺物実測図①(1/3)



第3-386図 06-SD288出土遺物実測図②(1/3)

06-SD345出土遺物 (第3-392・3-393図)

1は白磁の口罎である。器壁は薄く、内面に梨押し文を施す。2は土師器小皿である。3～10は土師器坏で、器形には口縁部が直線的に開くもの(3～5)、器壁の中段が膨らむもの(6)、口縁が外反し、端部を内削ぎにより先尖りとするもの(7～10)、とバリエーションがある。11は瓦質土器の鉢である。12は軒丸瓦で、瓦当の中央に右巻ききの巴文を配し、その周囲に17点の珠文を施す。13は砥石、14は先尖りとなる木製品である。15は縄文土器で、外面に条痕を施す。全体に摩滅が著しい。16は複合口縁の土師器壺で、口縁部外面に3段の櫛溝波状文を施す。



第3-387図 06-SD288出土遺物実測図③ (1/3)

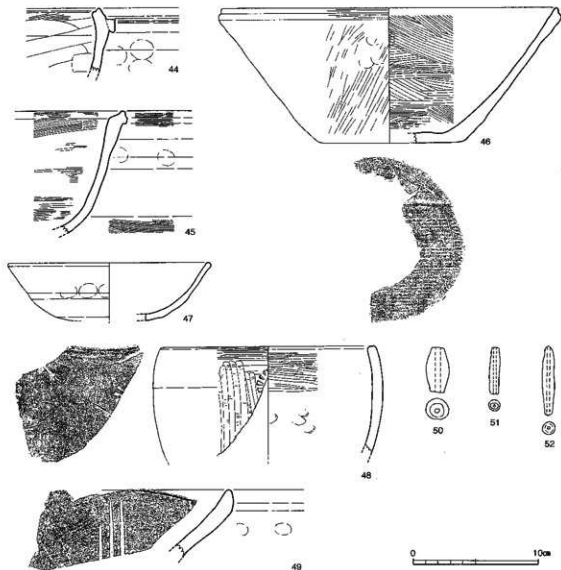
5. 井戸

SE167 (第3-394図)

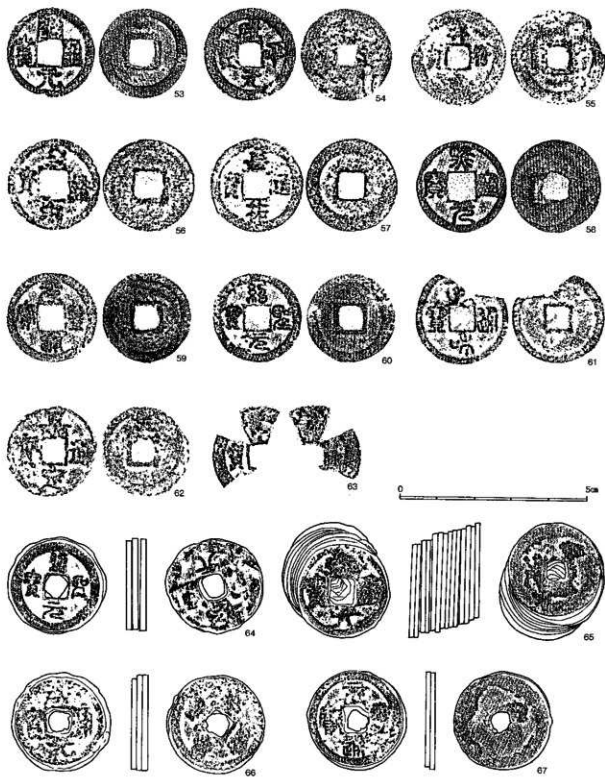
2区のO62・P62グリッドで検出した井戸である。平面形状は楕円形状を呈し、南側には不整形の浅い土坑が重複するが、両者の切り合いは押さえられなかった。井戸部の規模は長辺2.61m以上、短辺2.46m、土坑部も合わせた長辺は3.80m、土坑部の幅は1.90mを測る。内部で確認した井戸側は長辺1.40m、短辺1.30mである。内部は約1.6m掘り下げたが、土壌が軟質で崩壊の危険があったためこれ以上の掘り下げを行わなかった。そのため遺構の時期は不明な点が多いが、16世紀代の遺物が見られないことからⅣ期（15世紀中頃～後半）以前に位置づけられる可能性が高い。

SE167出土遺物 (第3-395図)

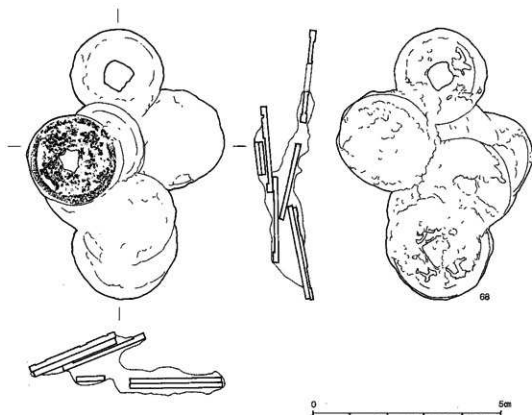
1は青磁碗である。2は土師器の鍋で、内面に横位のハケ目を密に施す。3は軒丸瓦、4は砥石である。



第3-388図 06-SD288出土遺物実測図①(1/3)



第3-389図 06-SD288出土遺物実測図③(1/1)



第3-390図 06-SD288出土遺物実測図⑧(1/1)

06-SE283 (第3-396図)

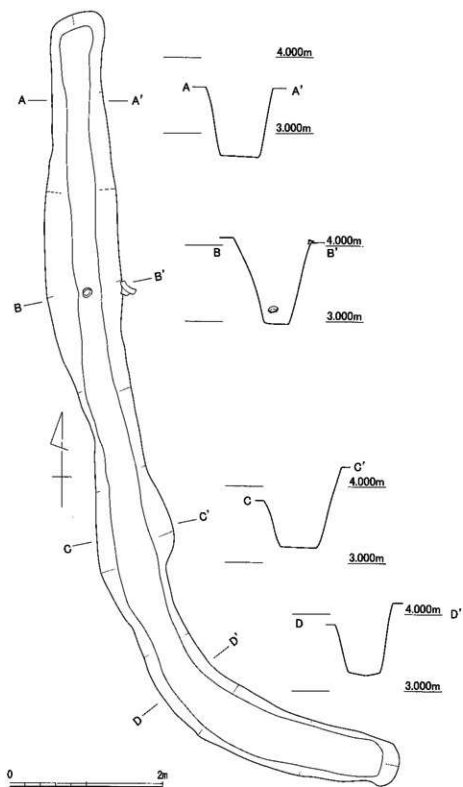
1区のN62グリッドで検出した井戸である。06-SD282及び06-SK131に切られるが、平面形状は方形気味の楕円形で、長辺3.20m、短辺2.99mを測る。深さ約1.5mで長辺1.05m、短辺0.90mの円形の井戸側プランを確認しており、それを掘り下げたところ長さ約0.65mの円礫が掘えられていた。礫を用いた井戸封じの痕跡である。出土遺物は極めて少ないが、古代の井戸の可能性が高い。

06-SE283出土遺物 (第3-397図)

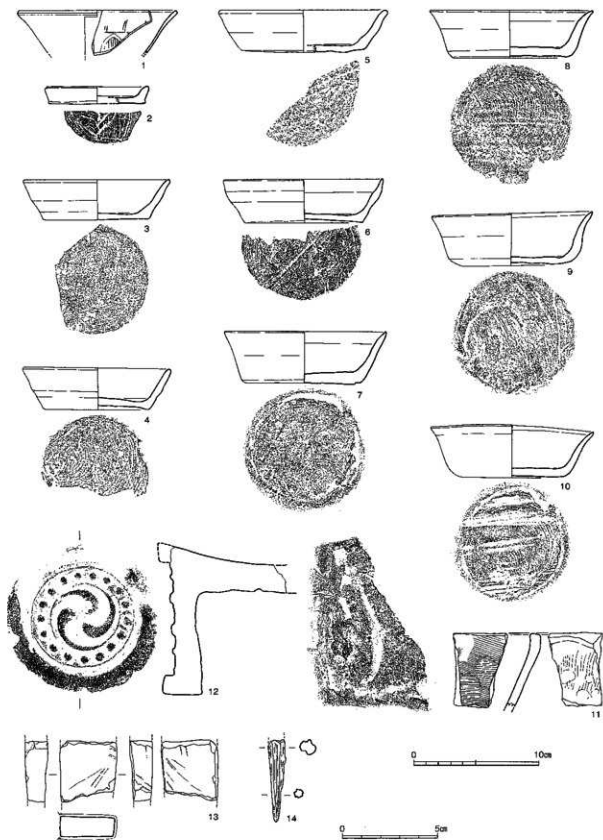
1は縄文土器で、内外面に条痕を施す。2は弥生土器の壺である。3・4は土師器の臺で、3は頸部に断面台形状の凸帯を貼り付ける。4は胴部の張りが弱く、古代のものであろう。5・6は石材である。

06-SE312 (第3-398図)

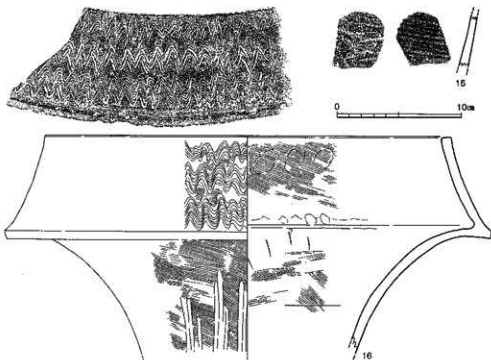
1区のN62・O62・N63・O63グリッドで検出した井戸である。規模は06-SE271より一回り大きく、長辺7.4m、短辺5.6mを測る。東側には浅い土坑状の掘り込みがあり、06-SE322に切られている。また、06-SE330と06-SK166を切っている。壁面の立ち上がりはやや緩やかで摺鉢状を呈する。06-SE271完掘後に確認したため、大部分の土層は確認できないことから、断面図の作成は行っていない。遺構の時期はIV期(15世紀中頃～後半)に位置づける。



第3-391図 06-SD345実測図 (1/50)



第3-392図 06-SD345出土遺物実測図①(1/3)



第3-393図 06-SD345出土遺物実測図②(1/3)

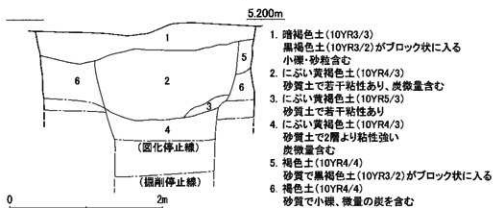
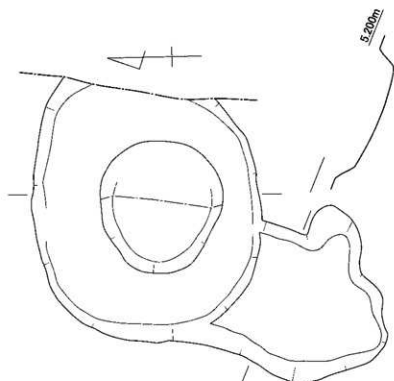
06-SE312出土遺物 (第3-399・3-400図)

鬼瓦

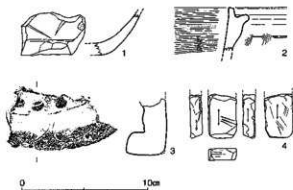
1は施軸陶器の碗、2は古瀬戸の水注の注口部である。3は在地の土師器小皿で、口縁部に煤が付着する。4・5は瓦質土器の火鉢で、5は外面に軒丸瓦のような巴文のスタンプを施す。6～9は磁石である。10は北宋銭で、皇宋通寶(1038年初鑄)と判読できる。11は鬼瓦で、左眼の部分がわずかに確認できる。眼は竹管状の円形刺突で表現するが、中空とはならない。12は軒平瓦で、唐草文を施す。13は鳥表瓦で、右巻きの巴文とその周囲に珠文を配する。14・15は埴である。

06-SE322 (第3-401図)

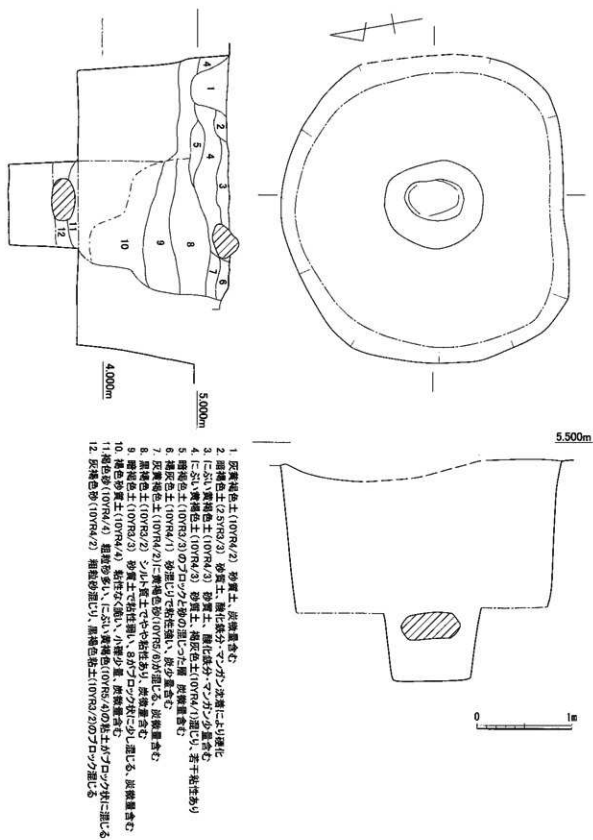
1区の東端部、062・063グリッドで検出した井戸である。東半部は旧万寿寺跡第8次調査の08-SE152に続く。北側は不整形の土坑と重複している。平面プランで切り合いを確認できなかったため、この土坑を06-SE322Bとして区別したが、土層断面の観察から06-SE322Bが井戸を切ることを確認できた。この土坑は8次調査区の08-SK169と同一であり、こちらでも土坑が井戸を切っており前後関係に矛盾はない。遺構の規模は東西2.56m以上、南北6.44m、深さ1.18mを測る。底面で井戸側を確認できなかったが、底面で灰色粘土が堆積しており井戸と判断した。なお、井戸側は08-SE152で確認している。遺物は06-SE322Bから土師器小皿・坏がややまとまって出土している。遺構の年代は06-SE322BはⅣ期(15世紀中頃～後半)、06-SE322はそれ以前のⅢ期(14世紀末～15世紀前半)に位置づける。



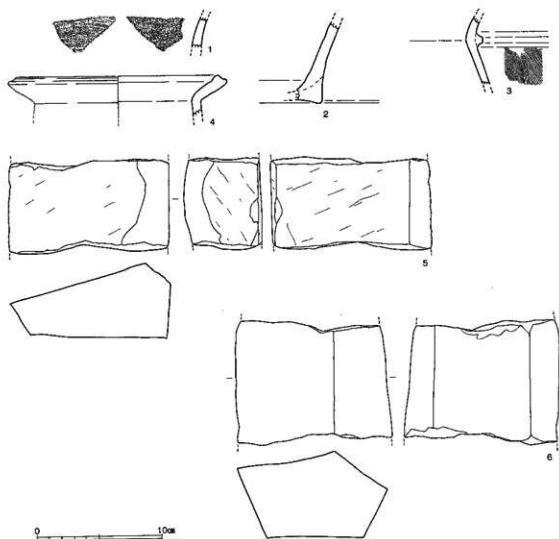
第3-394図 O6-SE167実測図 (1/40)



第3-395図 O6-SE167出土遺物実測図 (1/3)



第3-396図 06-SE283実測図(1/40)



第3-397図 06-SE283出土遺物実測図(1/3)

06-SE322出土遺物(第3-402図)

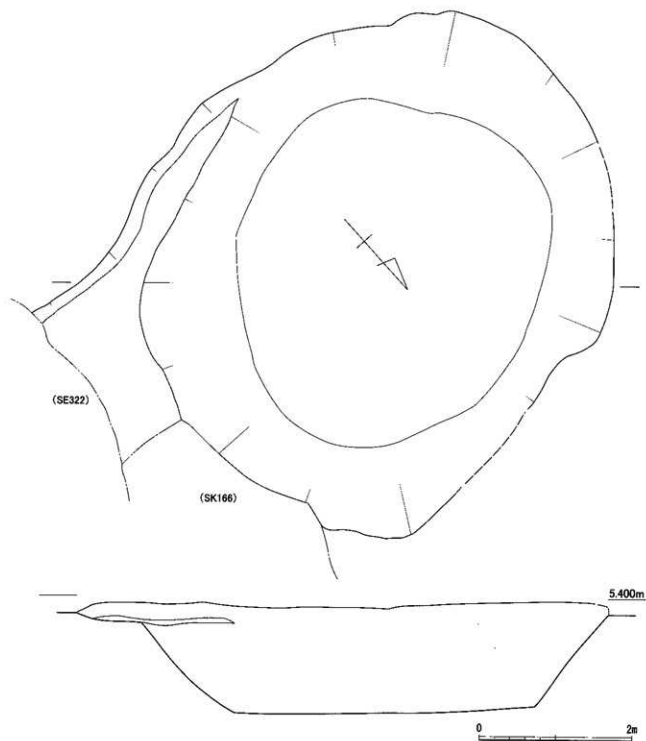
1は青磁碗で、内外面とも無文の粗製碗である。2は施釉陶器の碗である。3は古瀬戸の瓶で、肩部に2条の沈線を施し、外面には濃緑色の軸葉が掛かる。4は備前焼の摺鉢である。5～7は土師器の小皿で、7は口縁部に煤が付着する。8は土師器の小杯、9・10は土師器の坏である。11は土師器の鍋で、口縁部が短く外に折れる。12～14は瓦質土器の火鉢である。15は縄文土器で、内外面ともに貝殻条復を施す。16は軒丸瓦で、瓦当の中央に右巻きに巴文と、その周間に珠文を施す。17は軒平瓦で、唐草文を施す。以上のうち、5～6は06-SE322Bからの出土である。

06-SE330(第3-403図)

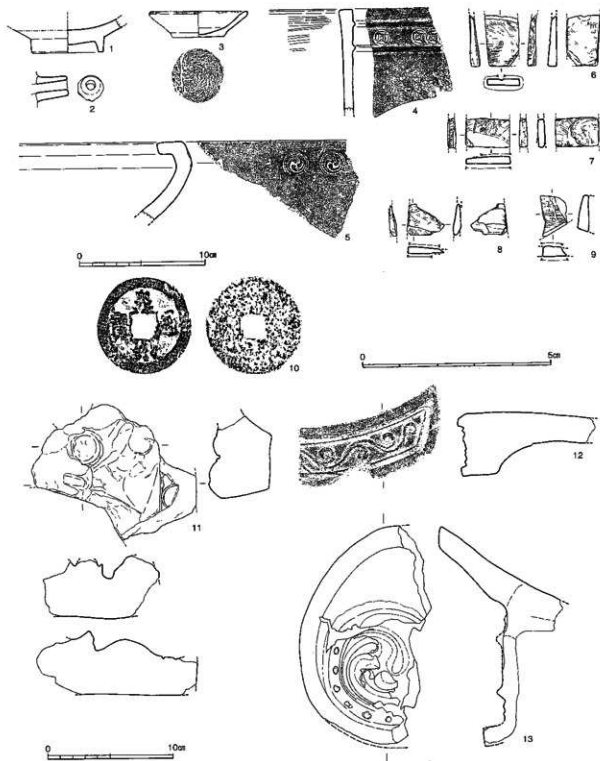
古代の井戸

1区のN63・O63グリッドで検出した古代の井戸である。東半部は06-SE312に切られるが、平面形状は楕円形を呈し、長辺286m、短辺210m以上、深さ1.76mを測る。壁面の立ち上がりは摺鉢状を呈し、井戸側部分には段を付けてさらに深く掘り込んでいる。遺物は井戸側部分を中心に古代の土器がまともに出土している。遺構の年代は9世紀後半～10世紀前半代に位置づけられ、当該期の良好な一括資料といえる。

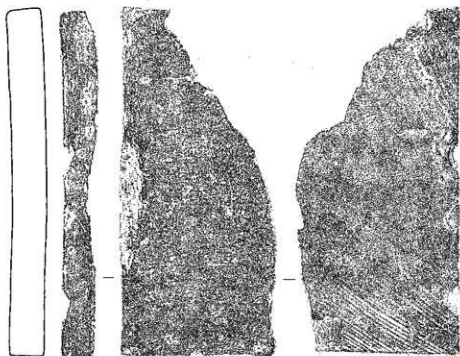
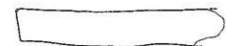
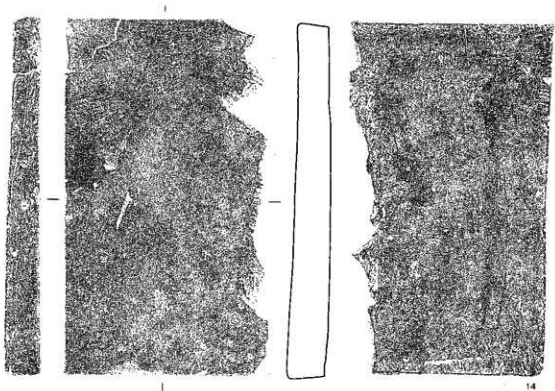
古代の土器
がまとも
に出土
良好な一括
資料



第3-398図 06-SE312実測図 (1/50)

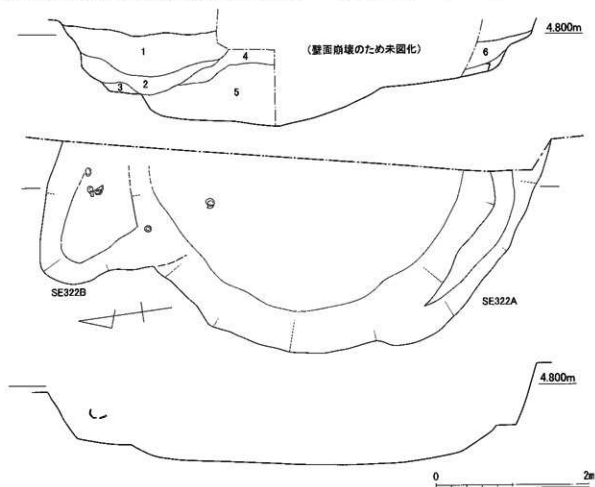


第3-399図 06-SE312出土遺物実測図①(1/3・1/1)



第3-400図 06-SE312出土遺物実測図② (1/3)

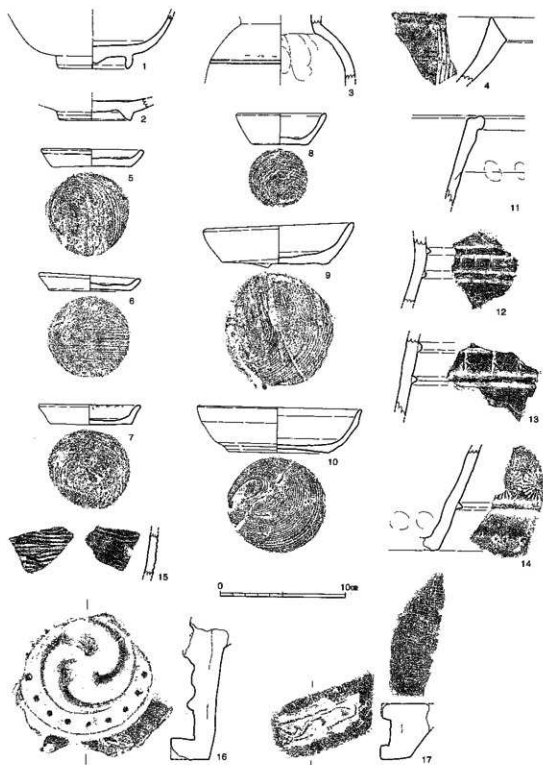
- | | |
|-------------------------------------|---|
| 1 ぶい黄褐色土(10YR4/3) 酸化鉄分混じり、砂粒・少量の炭含む | 6 褐色土(10YR4/4)と灰黄褐色土(10YR4/2)の混合土
やや粘性を帯び、砂粒多く含む |
| 2 灰黄褐色粘質土(10YR4/2) 砂粒・少量の炭含む | 7 暗褐色粘質土(10YR3/3) 多量の砂・微量の炭含む |
| 3 褐色砂質土(10YR4/6) 酸化鉄分の沈着により硬化 | |
| 4 褐色土(7.5YR4/6) 砂・微量の炭含む | |
| 5 褐灰色粘質土(10YR4/1) 有機質を含み、多量の砂・小礫混じる | ※1~3はSE322B, 4~7はSE322A埋土 |



第3-401図 O6-SE322実測図(1/50)

O6-SE330出土遺物(第3-404図)

1~7は土師器の坏である。いずれも底面にはヘラ切り離し痕を有するもので、口縁部が直線的に開くもの(1・5)、外反するもの(2~4・6・7)に分けられる。5は器面に煤が付着する。8は高い高台が付くもので椀であろう。9は土師器の鍋である。10は内面に黒色に燻した黒色土器A類椀で、内面にはヘラミガキを密に施す。11は土師器の高坏で、脚部に透かし孔をもつ。12は製塩土器で、内面に布目痕が残る。13は縄文土器で、外面にRLの単節縄文を施す。



第3-402図 06-SE322出土遺物実測図 (1/3)

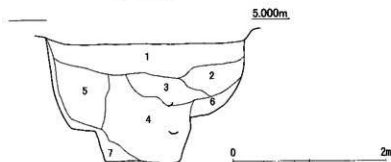
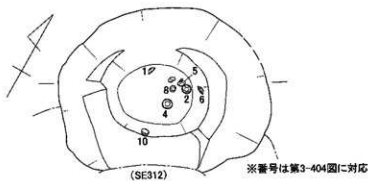
6. 土坑墓

06-ST045 (第3-405図)

土坑墓

定形の土師
器塚

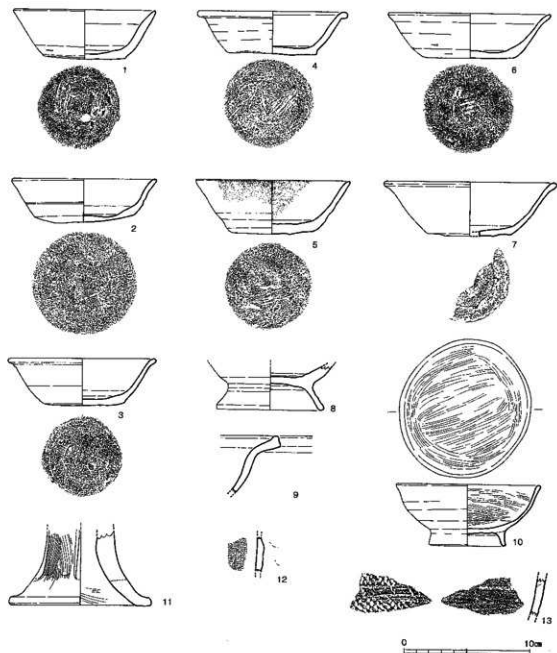
2区のL61グリッドで検出した土坑墓である。西側は調査区外に続くが、平面形状は方形気味の円形を呈し、東西0.76m以上、南北1.25m、深さ0.47mを測る。埋土は3層に分層されるが、乱れたような状況は見られない。土坑の中位から完形の土師器塚1点が出土している。土坑内から骨は出土していないが、西接する中世人友府内町跡第29次調査で検出された土坑墓群に関連する遺構の可能性が高い²⁰⁴。遺構の時期はⅡ期（14世紀中頃～末）に位置づける。



- 1.褐色土(10YR4/4) 砂質土で締まりあり、0.5～1cm大の小石が疎らに混じる
0.1～0.5cmの赤色粒子を若干含み、1mm程度の白色粒子が疎らに入る
- 2.褐色土(10YR4/4) 1層と基本的に同じだが、部分的に黄褐色砂質土(10YR5/6)が混じる
- 3.灰黄褐色土(10YR4/2) 砂質土で硬く締まる 部分的に鉄分混じる
1cm大の小石を疎らに含み、3cm大の小石が若干入る
- 4.褐色土(10YR4/4) 砂質土で締まり弱く、粘性なし
0.5～2cm大の小石を疎らに含み、微量の炭化物が混じる
遺物出土層位で、下層は灰褐色の砂質土に変化、鉄分を疎らに含む
- 5.ぶい黄褐色土(10YR4/3) 砂質土で締まりあり、0.5～1cm大の小石を疎らに含む
微量の炭化物を含み、下層は灰褐色の砂質土に変化する
- 6.褐色土(10YR4/4) 砂質土で締まりあり、0.5～1cm大の小石を若干含み、下部は地山砂が混じる
- 7.褐灰色砂(10YR5/1) 基本的には粘性・締まりともないが、部分的に硬く締まる

第3-403図 06-SE330実測図(1/50)

204 後藤良一 2009 「中世大友府内町跡第29次調査」『豊後府内12』大分県教育庁歴史文化財センター調査報告書第41集、大分県教育庁歴史文化財センター
なお、土坑墓の解釈を巡っては後藤良一氏（大分県教育庁文化歴、現大分県立歴史博物館）から御教言を頂いた。



第3-404図 06-SE330出土遺物実測図 (1/3)

06-ST045出土遺物 (第3-406図)

1は土坑の中心から出土した完形の土師器杯である。底面には回転糸切り痕が残る。2は東播系須恵器の捏鉢で、口縁部は玉縁状を呈する。

06-ST143 (第3-407図)

土坑墓

2区のL61グリッドで検出した円形の土坑墓である。大部分を溝06-SD090に切られるため本来の規模は明らかにできないが、長辺1.10m、短辺0.95m以上、深さ0.74mを測る。埋土は4層に分層でき、1層は掘り返しと判断される。骨や06-ST045のような完形の遺物の出土はないが、土坑の形状や規模、検出位置から土坑墓の可能性が高い。遺構の時期はⅠ～Ⅱ期(14世紀前半～末)に位置づける。

06-ST143出土遺物 (第3-408図)

1は土師器の鍋である。2は須恵器の高台付坏で、古代に位置づけられる。3は砥石である。

06-ST144 (第3-409図)

土坑墓

1区のL61グリッドで検出した土坑墓で、06-ST045のすぐ南に位置する。西側は調査区外に続くが、平面形状は円形を呈し、長辺1.06m、短辺0.53m以上、深さ0.43mを測る。埋土は数層に分層できたが、壁面崩壊により図化できなかった。土坑の中心から瓦質土器の輪花形火鉢が出土している。骨の出土はないが、土坑の検出位置や規模等から土坑墓の可能性が高い。遺構の時期はI～II期(14世紀前半～末)に位置づける。

輪花形火鉢

06-ST144出土遺物 (第3-410図)

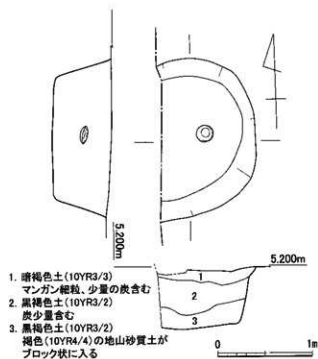
奈良火鉢

1は瓦質土器の輪花形火鉢で、いわゆる奈良火鉢である。外面に縦位のスリット状沈線を描き、口縁部を輪花形にする。

06-ST159 (第3-411図)

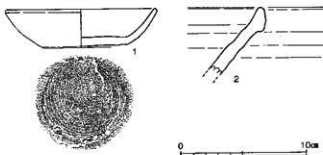
土坑墓

2区のL61グリッドで検出した土坑墓で、06-ST143の南に位置する。06-ST143同様大部分を06-SD090に切られるため全体の規模及び形状は明らかできないが、東西0.90m以上、南北0.90m、深さ0.64mを測る。埋土は4層に分層でき、1・2層には炭とともに焼土細粒を含む。図示できる遺物が無いが、遺構の規模や位置から土坑墓の可能性が高い。従って、周辺の

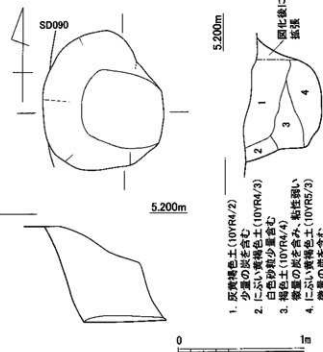


1. 暗褐色土(10YR3/3)
マンガン細粒、少量の炭を含む
2. 黒褐色土(10YR3/2)
炭少量含む
3. 黒褐色土(10YR3/2)
褐色(10YR4/4)の地山砂質土が
ブロック状に入る

第3-405図 06-ST045実測図(1/30)



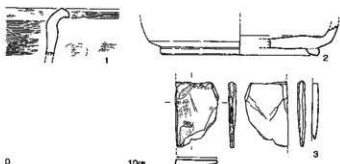
第3-406図 06-ST045出土遺物実測図(1/3)



1. 灰質褐色土(10YR4/2)
少量の炭を含む
2. にんじろ黄褐色土(10YR4/3)
白色砂粒少量含む
3. 褐色土(10YR4/4)
炭量の炭を細く混入、粘性強い
4. にんじろ黄褐色土(10YR4/3)
炭量の炭を含む

第3-407図 06-ST143実測図(1/30)

土坑墓と同じⅠ～Ⅱ期（14世紀前半～末）に位置づける。

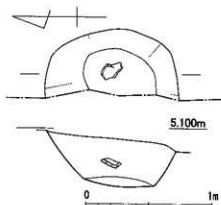


第3-408図 06-ST143出土遺物実測図 (1/3)

7. 遺物集中ブロック

06-SX134 (第3-412図)

1区のM61グリッド、瓦庵兼土坑06-SK097のすぐ南で検出した遺物集中ブロックである。東西3.17m、南北約2.0mの範囲に瓦を中心とした遺物がまわって出土している。検出高は5.0～5.1mである。周囲を精査したが掘り込みは確認できなかった。06-SK097と関連する遺物の可能性が高く、遺構の時期はⅣ期（15世紀中頃～後半）に位置づける。



第3-409図 06-ST144実測図 (1/30)

06-SX134出土遺物 (第3-413～3-415図)

1は枢府系白磁碗である。

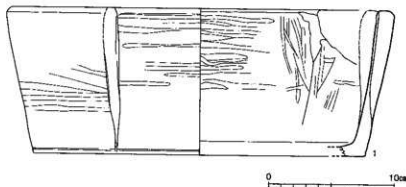
口縁部は刻みを持ち、内面には緻密な印文を施す。2は備前焼の甕で、口縁部を折り返して玉縁状に作る。3は常滑焼甕の緑帯部である。4は瓦質土器の火鉢で、外面には横位のミガキを密に施す。5は磁石である。6～8は軒丸瓦で、瓦当の中央に右巻きの巴文と、その周囲に珠文を施す。7・8は珠文の外側に圈線を持たない。珠文数は7は27、8は15である。7は凸面に連続する「×」状の刻印を持つ。9～11は丸瓦で、9は凹面に大振りの吊紐痕、10は連続する小振りの吊紐痕を持つ。12は平瓦で、凸面に成形台の痕跡と思われる方形状の突起が見られる。

遺物集中ブロック

枢府系白磁碗

「×」状の刻印

成形台の痕跡



第3-410図 06-ST144出土遺物実測図 (1/3)

06-SX300 (第3-416図)

銭貨集中部

1区のN64グリッドで検出した銭貨集中部である。5点7枚の銅銭がまとまって出土したため遺構として扱ったが、掘り込みは確認できない。分布範囲は東西0.15m、南北0.34m、検出高は約5.5mである。遺構の時期を示す遺物がなく、詳細な時期は明らかにできない。

06-SX300出土遺物 (第3-417図)

1・2は2枚の銅銭が鑄着したものである。1は北宋の祥符通寶(1009年初鑄)と錢種不明のものが固着する。2は2点とも北宋の景祐元寶(1034年初鑄)である。3は北宋の元豊通寶(1078年初鑄)、4は北宋の政和通寶(1111年初鑄)である。5は銹のため錢文が判読できない。

8. 柱穴遺構

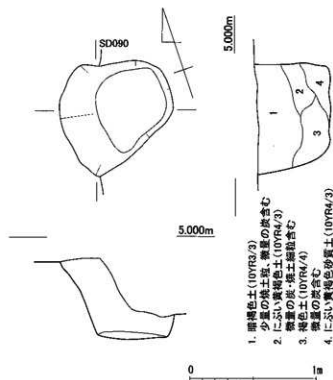
柱穴

下層に属する柱穴のうち、図示できる遺物が出土したもの、埋土が分層できるものを中心に第3-418図に図示した。

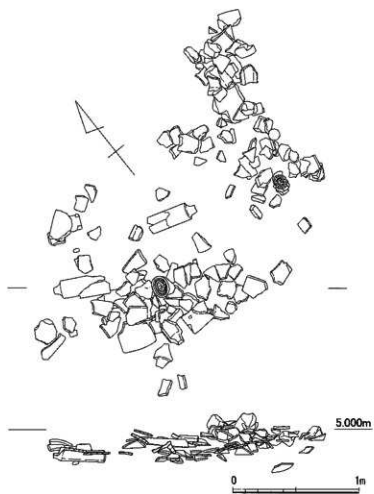
下層柱穴出土遺物 (第3-419図)

古代の柱穴

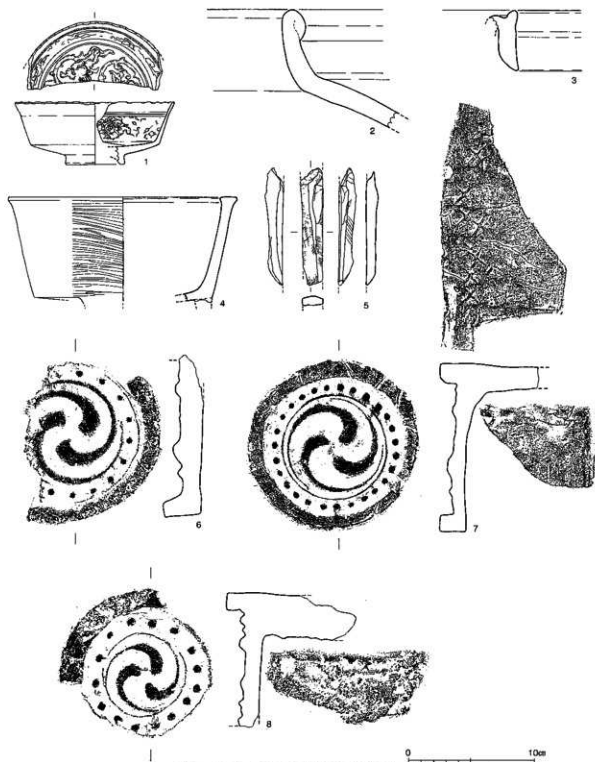
1は焼締陶器の甕の底部である。2区の06-SP136から出土した。2は土師器の坏で、2区の06-SP161から出土した。3は土師器坏で、底面に回転糸切り痕が残る。2区の06-SP169から出土した。4は黒色土器A類碗で、内外面ともにミガキを施す。2区の06-SP338からの出土で、古代の柱穴の可能性が高い。



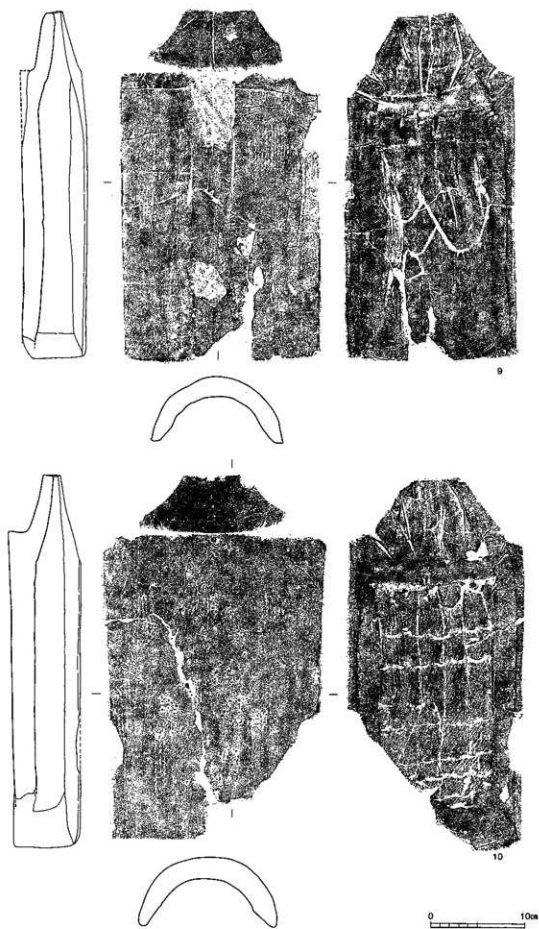
第3-411図 06-ST159実測図 (1/30)



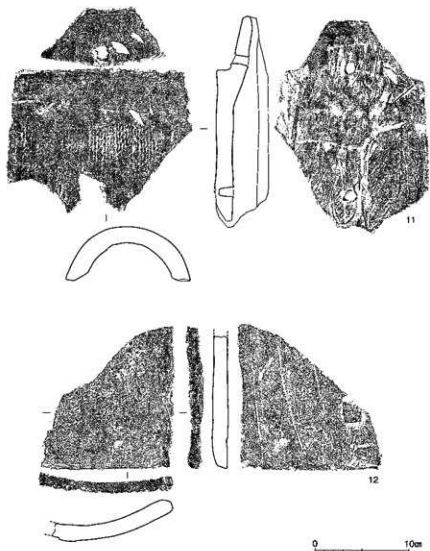
第3-412図 O6-SX134実測図 (1/30)



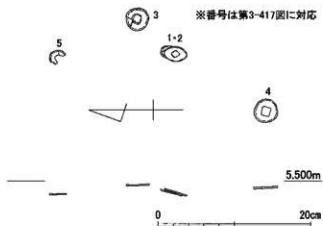
第3-413図 06-SX134出土遺物実測図①(1/3)



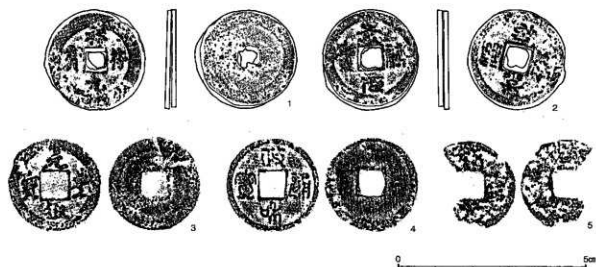
第3-414図 06-SX134出土遺物実測図②(1/4)



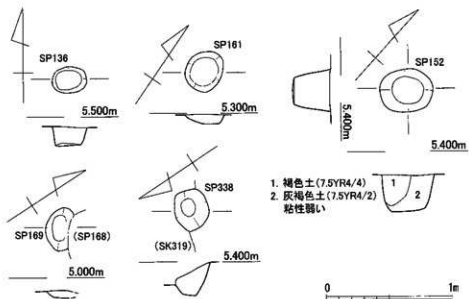
第3-415図 06-SX134出土遺物実測図③(1/4)



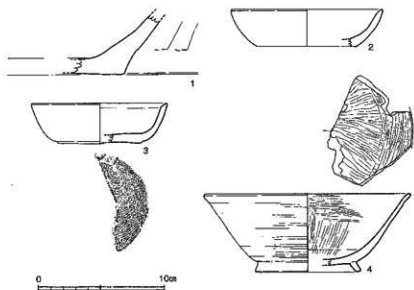
第3-416図 06-SX300実測図 (1/5)



第3-417図 06-SX300出土遺物実測図 (1/1)



第3-418図 O6-柱穴遺構実測図 (1/30)



第3-419図 O6-柱穴遺構出土遺物実測図 (1/3)

第6節 包含層出土遺物

1. 第1～3層出土遺物(第3-420・3-421図)

1は青磁の皿である。2は染付磁器の小坏で、口縁が外反する。3は焼締陶器の鉢で、中国南部産のものであろう。4は緑釉陶器碗で、古代の遺物である。5は土師質焼成の管状土鉢、6は黒色の碁石、7は磁石である。8は北宋の紹聖元寶(1094年初鑄)である。2は1層、3～8は2層、1は2～3層から出土した。

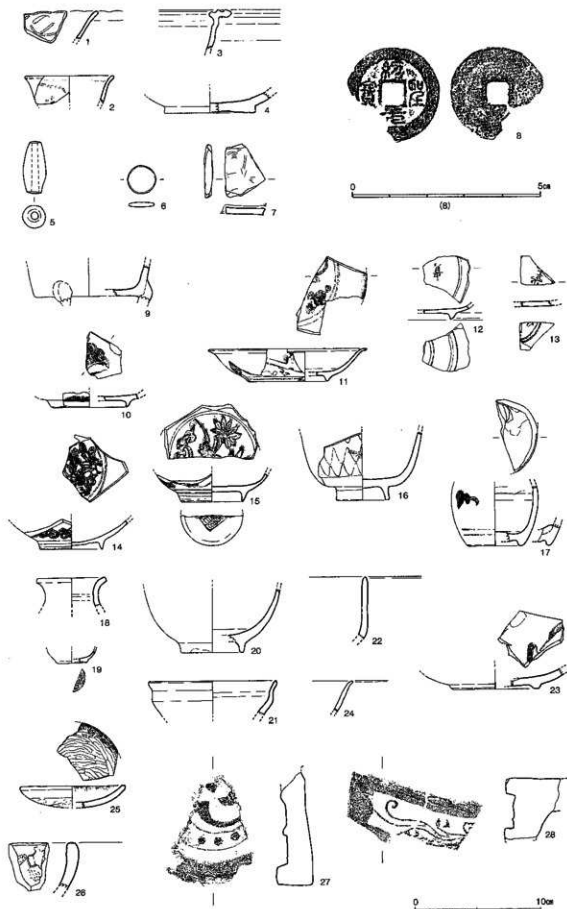
9～62は第3層出土遺物である。9は青磁の香炉で、底部に短い脚が付く。10～13は青花皿、14・15は青花碗である。16は一重網目文を施す染付磁器碗、17は染付の瓶で、いずれも初期伊万里である。18は焼締陶器の瓶、19は陶器の茶入、20は褐釉陶器碗である。21は瀬戸美濃窯の天目碗で、口縁部は外反する。22は施釉陶器の碗、23は皿で、ともに唐津焼である。24は緑釉陶器の細片である。25は瓦器皿で、内面にヘラミガキを施す。26は増埜で、金属溶解液が付着する。27は軒丸瓦、28は軒平瓦である。29～42は土製品である。29～33は加工円盤で、29は備前焼、30は土師器、31・32は瓦質土器の破片を転用する。30は煤が付着しており、灯明皿の灯芯押さえであらう。34～42は土鉢で、34は両端に穿孔する棒状土鉢、35～42は管状土鉢である。43～47は石製品で、43・44は滑石製石鐙の破片、45は硯、46・47は磁石である。48～62は金属製品で、48～50は鉛製の火縄銃弾、51は銅製の銃前、52は棒状の銅製品、53・54は板状の銅製品である。55は釘状を呈する。56は菱形状の裝飾を施す。58は煙管の火皿である。59～62は銅銭で、59は北宋の景德元寶又は景祐通寶、60は明の洪武通寶(1368年初鑄)、61・62は細片のため銭種は明らかにできない。63はガラス小玉である。

2. 第4層出土遺物(第3-422～3-432図)

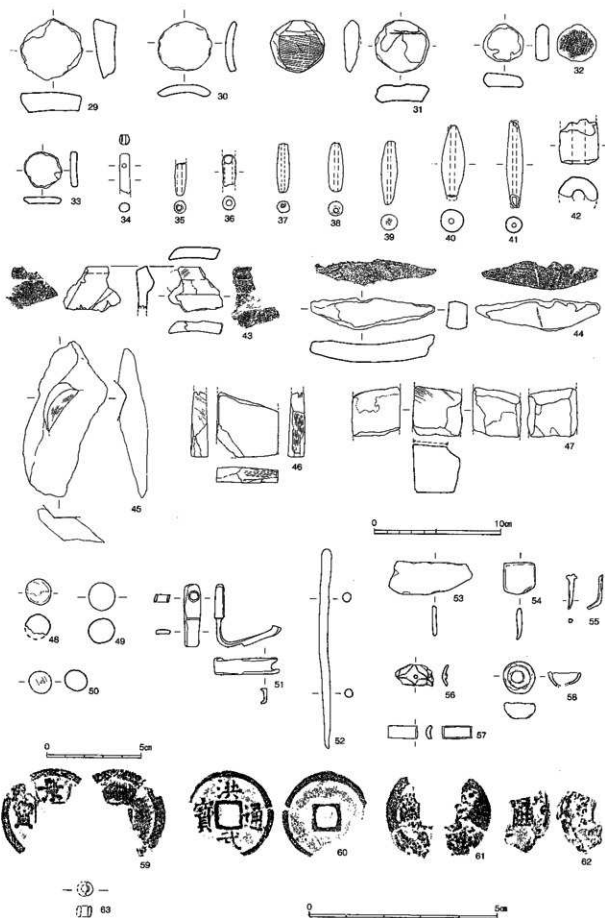
1～8は白磁である。1は口禿皿、2は内面に段が付く碗で玉縁碗の底部であらう。3は碗で、見込に梅摺文を施す。7は多角形を呈する小坏である。8は瓶で、肩部に磁器片が溶着する。9～18は青磁である。9～13は碗で、9は鑄造弁文を施す。14は水注の把手、15は鉢、16～18は香炉である。19～24は青花である。19は外面に褐色釉を施す皿、21は小碗、23は小坏、24は蓋である。25～30は造電窯の盤、31～33は陶器の茶入、34は黒釉陶器碗である。35～37は天目碗で、35は中国産、36・37は瀬戸美濃窯の製品である。39は褐釉陶器で、肩部に刻み目凸帯を貼り付ける。39は黒釉陶器の壺、40は黒釉陶器の鉢であらうか。いずれも中国南部産と考えられる。43・44は瀬戸美濃窯の卸皿で、いずれも底面に回転糸切り痕が残る。45～58は焼締陶器である。45～52は鉢で、多くは中国南部産であらう。53は壺でコンテナ容器として使用されたものである。54は器面に整形痕が顕著に残る壺で、06-SK249や06-SX291から同一個体が出土している。55～57は徳利ないし瓶である。58が区画沈線内に波状文を施すもので、鉢であらうか。59～64は備前焼で、口縁部を折り返して玉縁状に作る。65は信楽焼の壺で、口縁部は外反し端部は丸い。66・67は備前焼の摺鉢である。68は焼締陶器蓋の摘みである。69・70は緑釉陶器で古代のもの。71は唐津の碗で、高台皿付に回転糸切り痕が残る。72は唐津の皿、73は唐津の鉢である。74は絵唐津で、見込に鉄絵を施す。75は唐津の皿で、見込に砂目が残る。76は志野の向付である。

77～133は土器類である。77～86は土師器の小皿、87・88・90は土師器の坏である。90は内外面に黒色の漆状付着物が残る。89は京都系土師器皿である。91・92は土師器の燗台で、いずれも穿孔を持つ。93～95は瓦器碗、96～98は増埜である。99は東播系須恵器の壺で、外面は剥落が著しい。100～118は瓦質土器である。100～105は火鉢で、小型の101・102は香炉の可能性もある。103は外面に「林」又は「休」の刻書がある。106～108は風炉である。109・110は火鉢で、109は木の葉文、110は杏葉文のスタンプを施す。111～114は火鉢の脚部である。115は格子目状の沈線

「林」又は「休」の刻書
杏葉文



第3-420图 06-1~3層出土遺物実測図① (1/3・1/1)

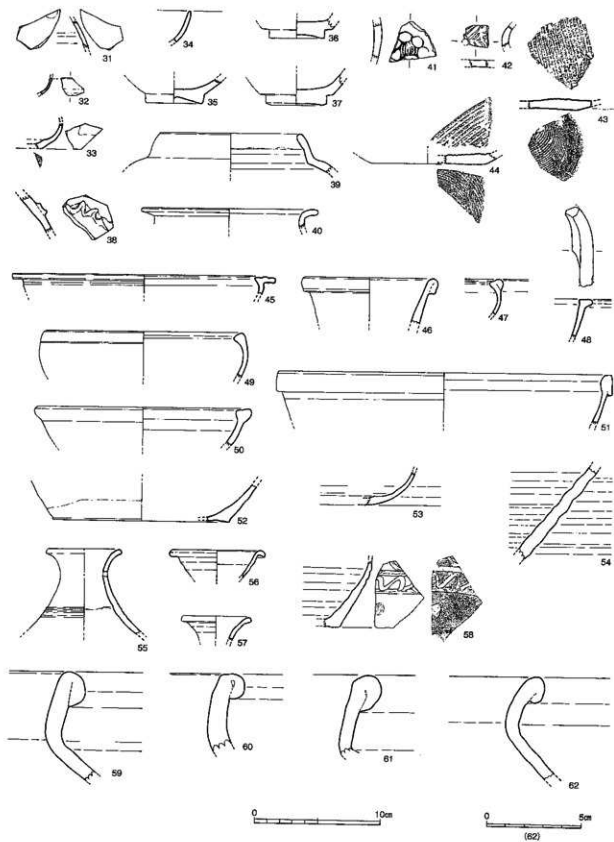


第3-421図 06-1~3層出土遺物実測図② (1/3・1/2・1/1)

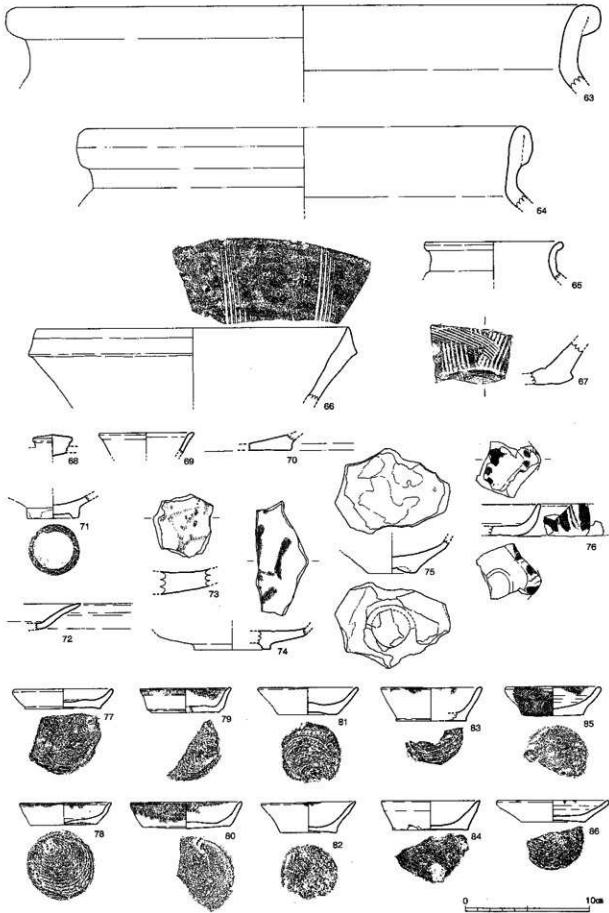


第3-422図 06-4層出土遺物実測図①(1/3)

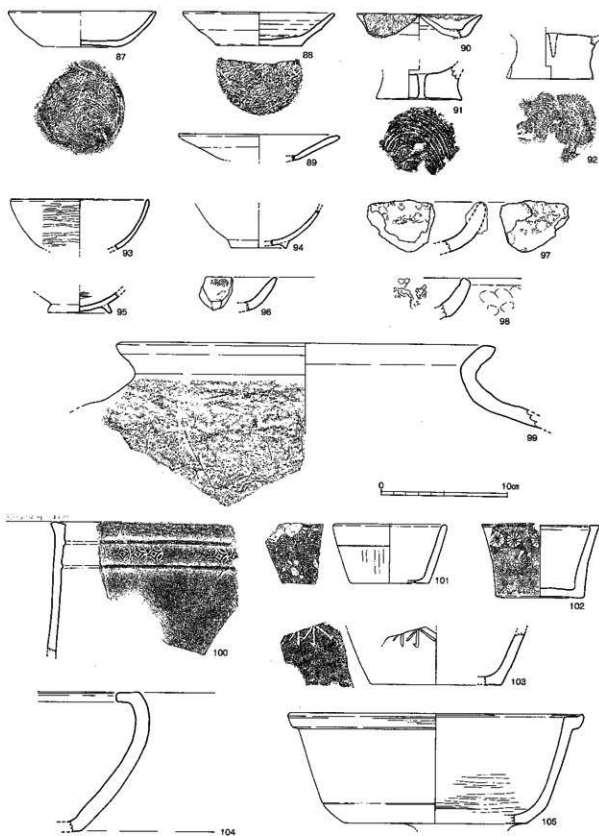
第3章 旧万寿寺跡第6次調査



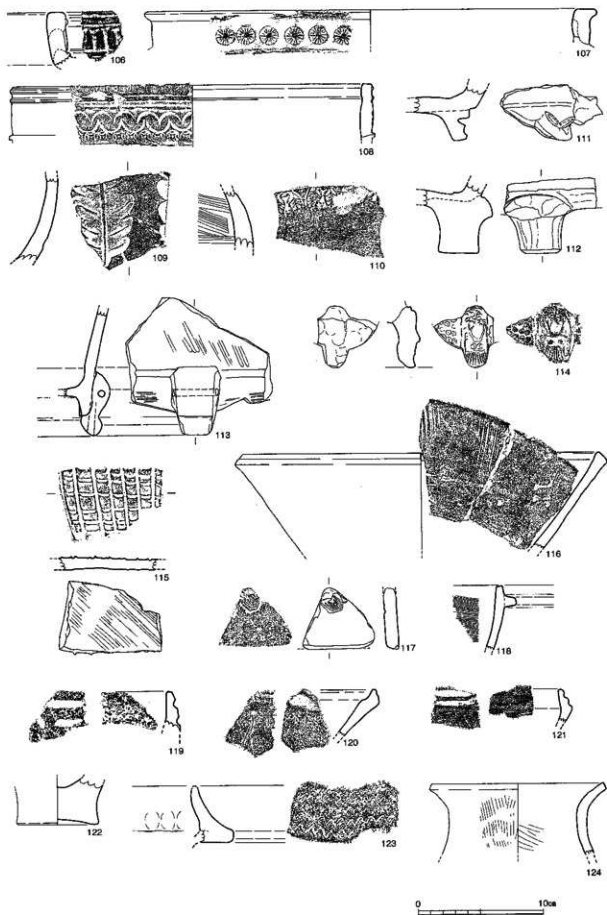
第3-423図 06-4層出土遺物実測図② (1/3・1/4)



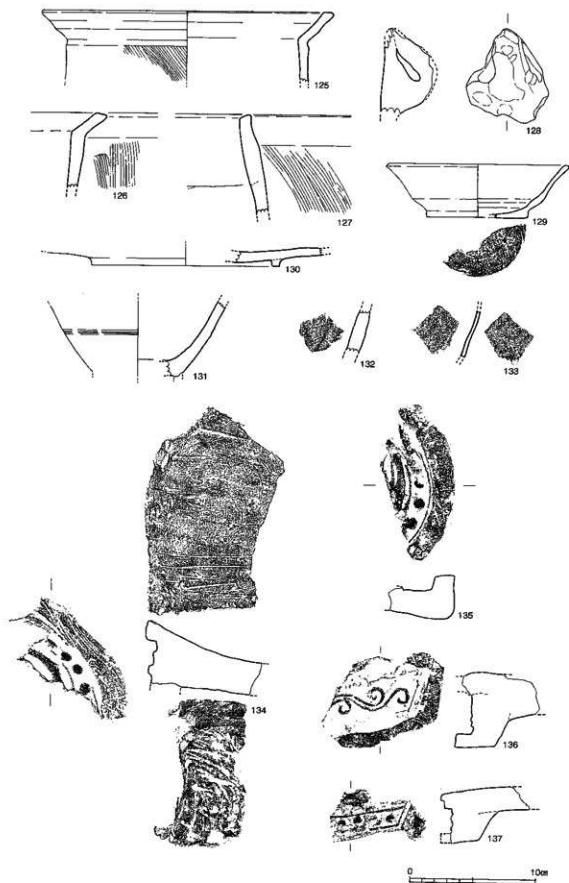
第3-424図 06-4層出土遺物実測図③(1/3)



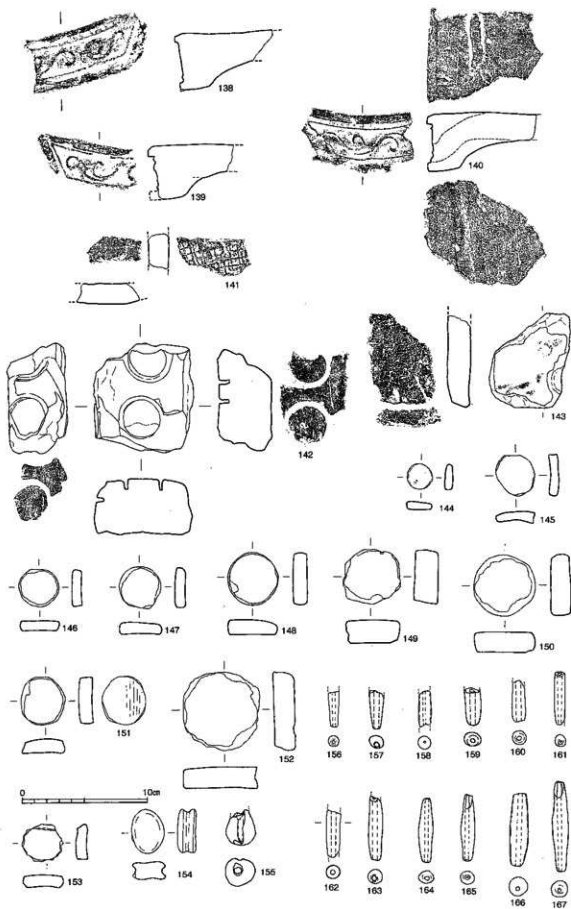
第3-425图 06-4層出土遺物実測図④(1/3)



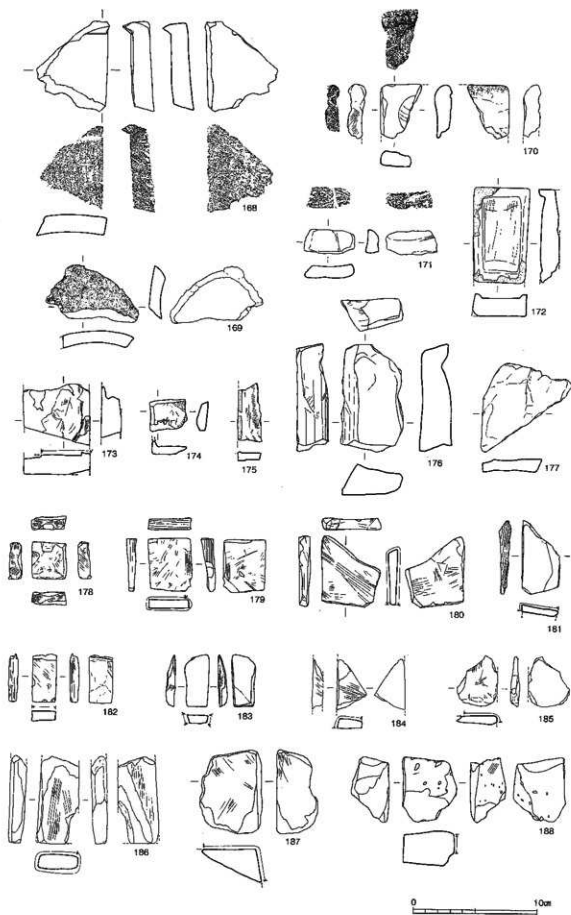
第3-426図 06-4層出土遺物実測図⑤ (1/3)



第3-427図 06-4層出土遺物実測図⑥ (1/3)



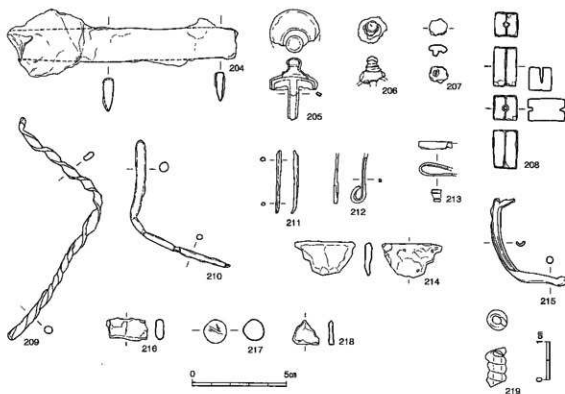
第3-428図 06-4層出土遺物実測図⑦(1/3)



第3-429図 06-4層出土遺物実測図③ (1/3)



第3-430図 06-4層出土遺物実測図①(1/3)



第3-431図 06-4層出土遺物実測図⑩(1/2・1/1)

亀形の瓦質土器

を施すもので、卸皿であろうか。116は摺鉢である。117は亀形の瓦質土器で、亀甲文のスタンプを施す。118は羽釜である。119～121は縄文土器で、いずれも後期に位置付けられる。122は弥生土器の甕、123は二重口縁壺で、外面に柳描波状文を施す。124は壺である。125～133は古代の土器で、125・126は土師器甕、127は口縁部が内傾するもので甌であろうか。128は把手付甕の把手部である。129は土師器の坏、130は盤、131は須恵器の壺、132・133は製塩土器である。

鬼瓦

赤色顔料の痕跡

134～143は瓦で、134・135は軒九瓦、136～140は軒平瓦である。144は古代の平瓦で、凸面に格子タタキを施す。142は鬼瓦の周縁帯で、正面及び側面に円形刺突文を施す。143は平瓦で、凸面に赤色顔料の痕跡が残る。

赤瓦石

144～167は土製品である。144～153は加工円盤で、144・145は土師器、146～151は瓦質土器、152は平瓦、153は陶器片をそれぞれ転用する。154は紡錘形の土錘で、周囲に沈線を巡らす。155は土玉状の土錘で、一側面に鞍位の沈線を施す。156～167は管状土錘である。168～203は石製品である。168～171は滑石製石錘で、168や170は破損面を加工し湿石等に転用する。172～175は硯で、172は赤間石製である。176・177は赤間石の加工石材で、視加工に伴う廃材であろう。178～200は砥石である。201は円礫を素材とする叩石である。202は軽石製品で、上面に円形竹管状の刺突を施す。203は組合せ式五輪塔の空風輪で、凝灰岩を素材とする。204～217は金属製品で、

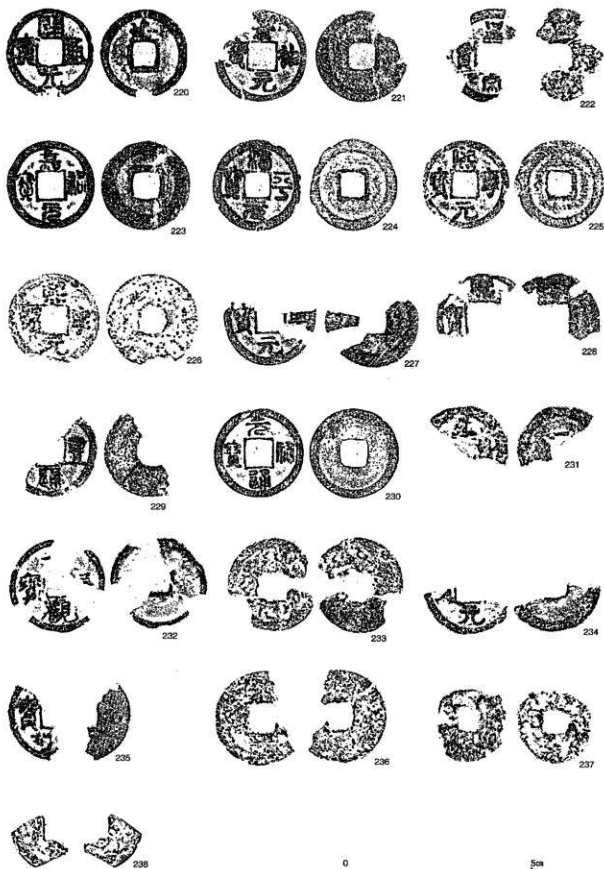
銅製の目当

火縄銃彈

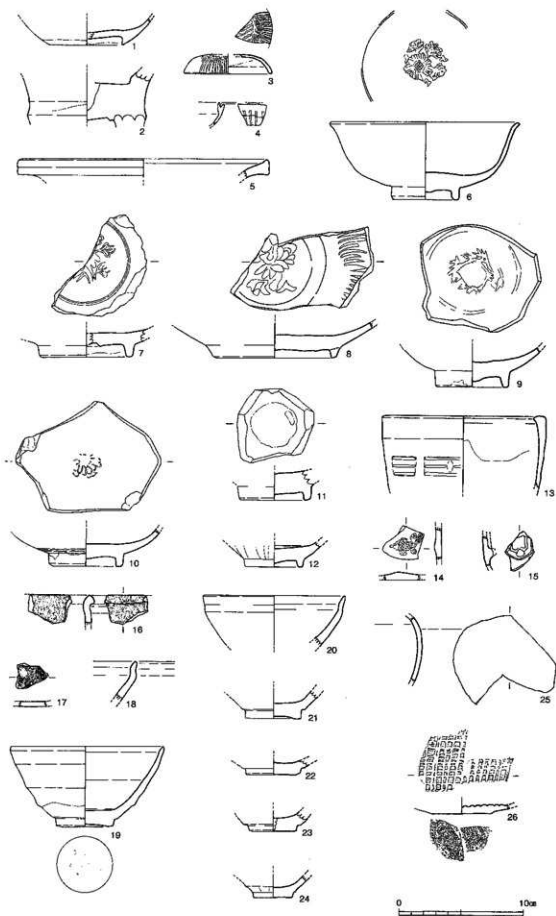
ガラス玉

紀地鉄

204は小柄、205～207は飾り金具である。208は銅製の目当とされるもので、四面に沈線と、両側面に円形の刺突を施す。209は火箸、210・211は棒状銅製品、212は吊手金具である。213は環状の刀装具、214は板状の銅製品、215は錠前の一部であろう。217は鉛製の火縄銃弾である。218は青みがかったガラス製品である。219はガラス玉で、素材を螺旋状に巻き上げる。220～238は銅銭である。220は唐の開元通寶で、背面に「洛」字を持つ紀地銭である。845年初鑄で、洛陽で鑄造されたものと分かる。221～232は北宋銭で、221は景祐元寶(1034年初鑄)、222は皇宋通寶(1038年初



第3-432図 06-4層出土遺物実測図①(1/1)

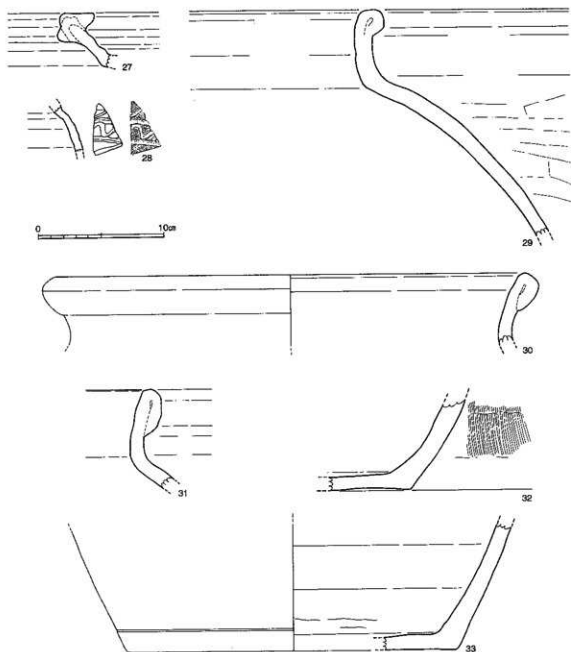


第3-433図 06-4'層出土遺物実測図①(1/3)

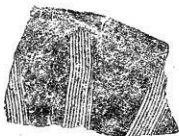
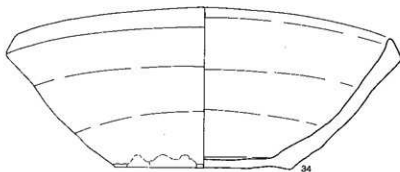
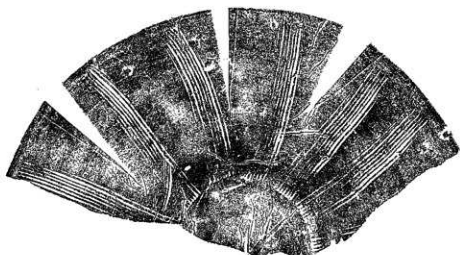
鑄)、223は嘉祐元寶(1056年初鑄)、224は治平元寶(1064年初鑄)、225～228は熙寧元寶(1068年初鑄)、229は元豊通寶(1078年初鑄)、230は元祐通寶(1086年初鑄)、231は元符通寶(1098年初鑄)と思われるもの、232は大觀通寶(1107年初鑄)である。233は「元寶」以外は判読できない。234～238は錢種不明である。237は摩滅が著しい。

3. 第4'層出土遺物(第3-433図～第3-451図)

1～4は白磁で、1は皿、2は瓶、3は合子蓋、4は合子身である。5は青磁の盤である。6・7・9～12は青磁碗で、6・7・9・10は見込に花文を施す。8は盤であろう。13は青磁香炉、14は魚文を施す青磁の皿ないしは鉢、15は青磁の瓶で、肩部に環を表現した亀甲状の貼り付



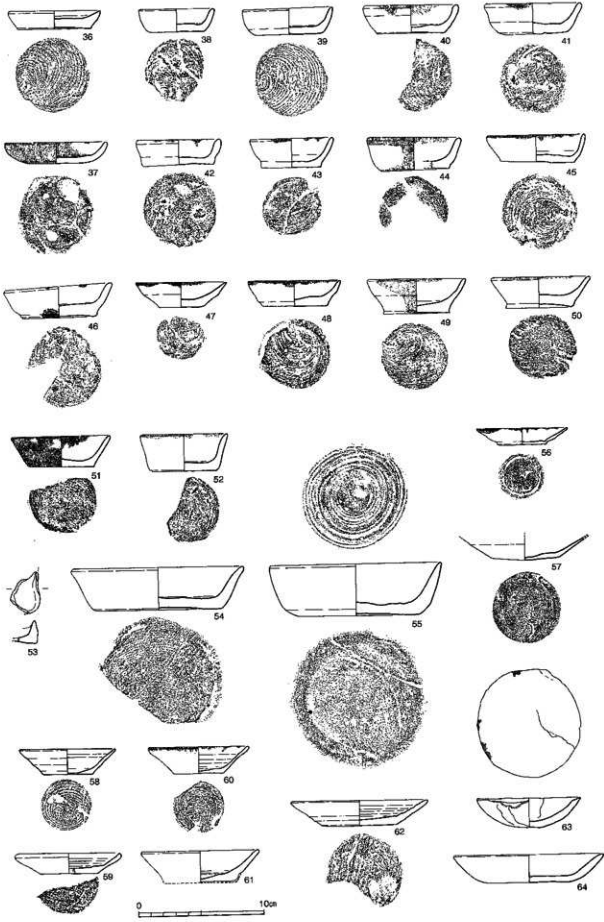
第3-434図 06-4'層出土遺物実測図②(1/3)



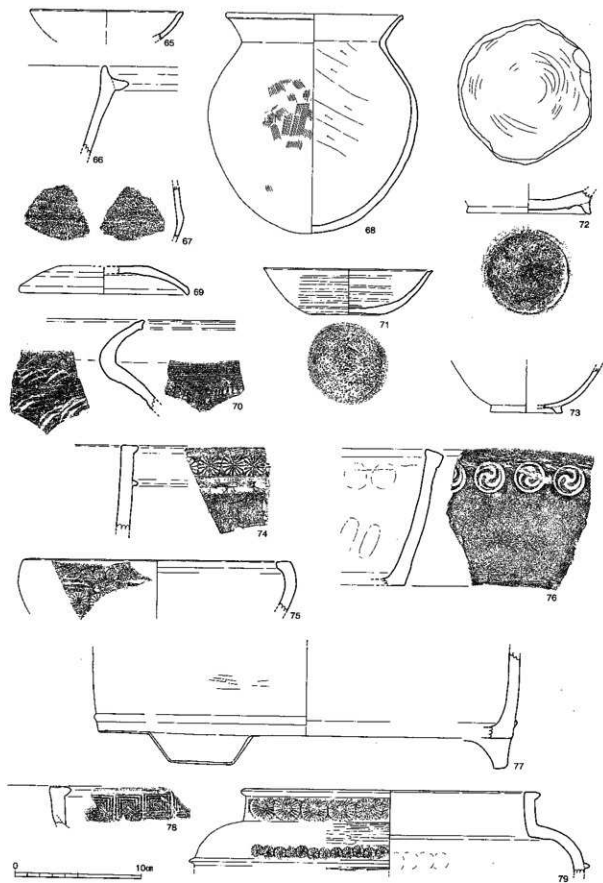
第3-435図 06-4'層出土遺物実測図③ (1/3)

朱鳥寺の瓦跡
 け文を施す。16・17は磁甕窯の甕である。18～24は天目で、いずれも中国産であろう。19は底面に朱鳥寺の瓦跡がわずかに残る。25は施釉陶器の壺、26は瀬戸美濃窯の御皿である。27は寛で、06-SK249から同一個体が出土している。28は焼締陶器で、区画沈線内に波状文を施す。第4層から同一個体が出土している。29～31は備前焼の甕である。32・33は甕の底部、4・35は備前焼の摺鉢である。

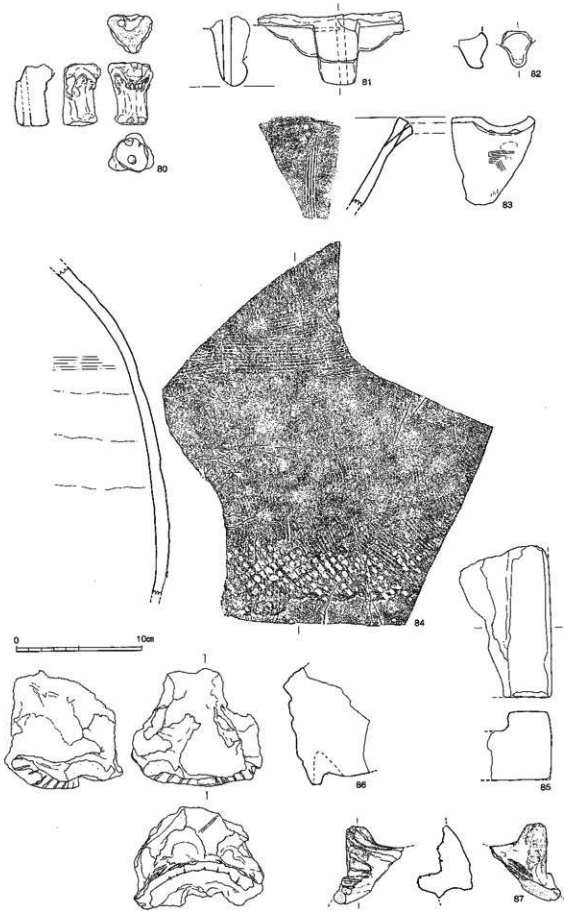
大内系土師器皿
 36～84は土器類である。36～52は在地の土師器小皿又は小坏である。53は耳皿であろう。54・55は土師器坏である。56・57は薄手で白色の大内系土師器皿で、ロクロ目は目立たない。58～62



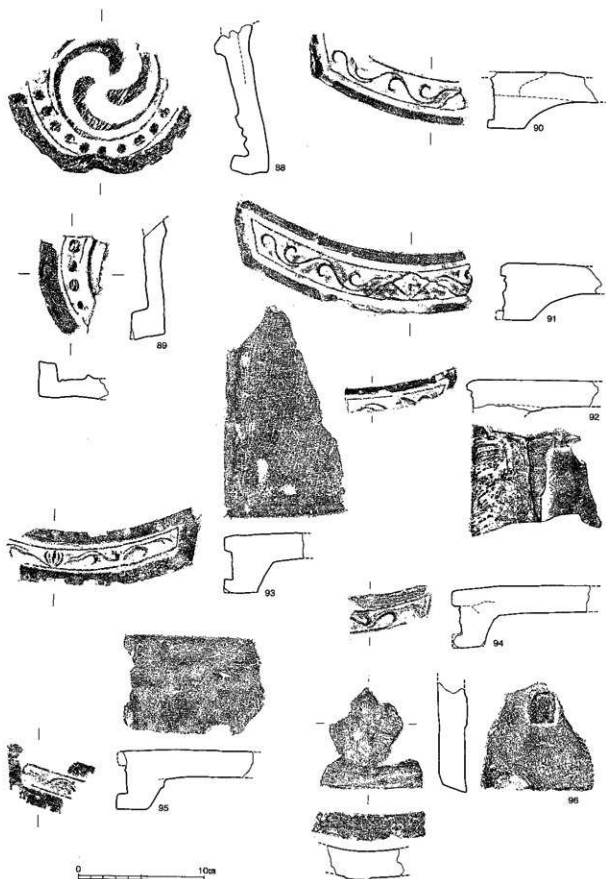
第3-436図 06-4層出土遺物実測図③ (1/3)



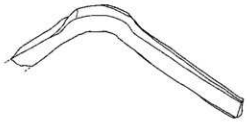
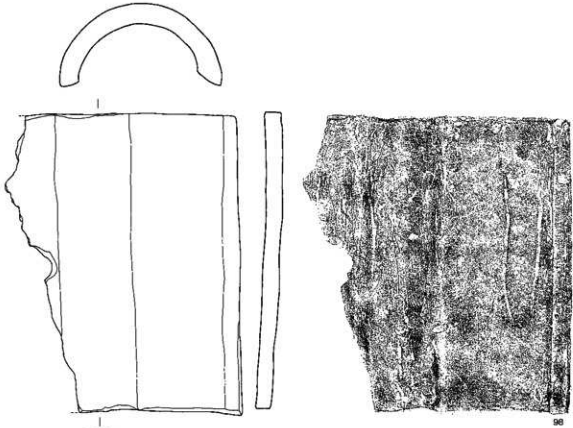
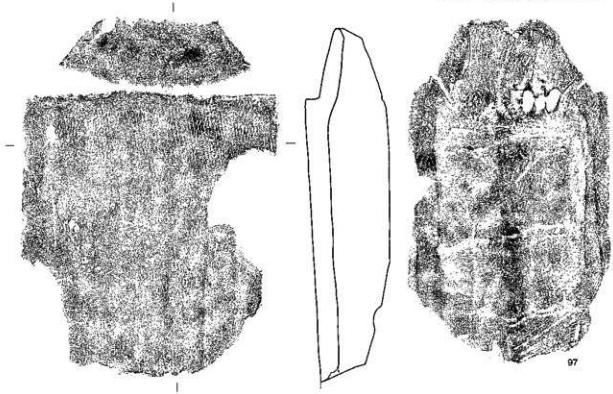
第3-437図 06-4'層出土遺物実測図⑤ (1/3)



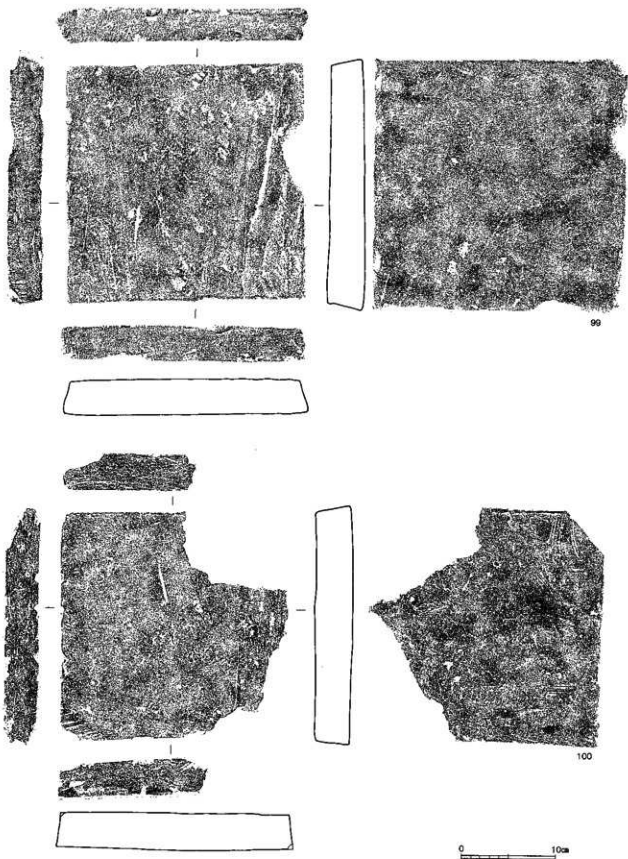
第3-438図 06-4'層出土遺物実測図⑧ (1/3)



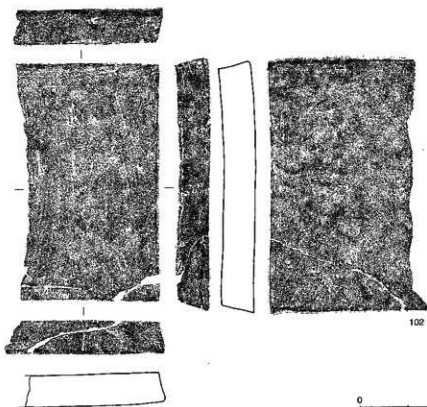
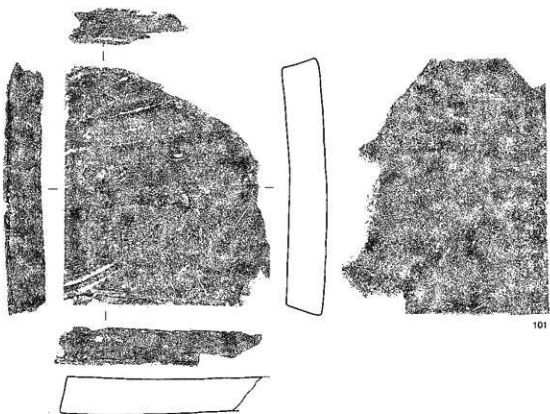
第3-439图 06-4'層出土遺物実測図⑦(1/3)



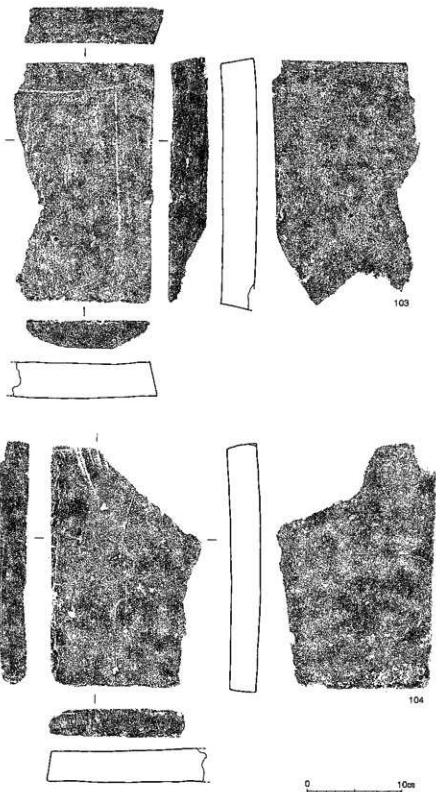
第3-440図 06-4'層出土遺物実測図⑥ (1/4)



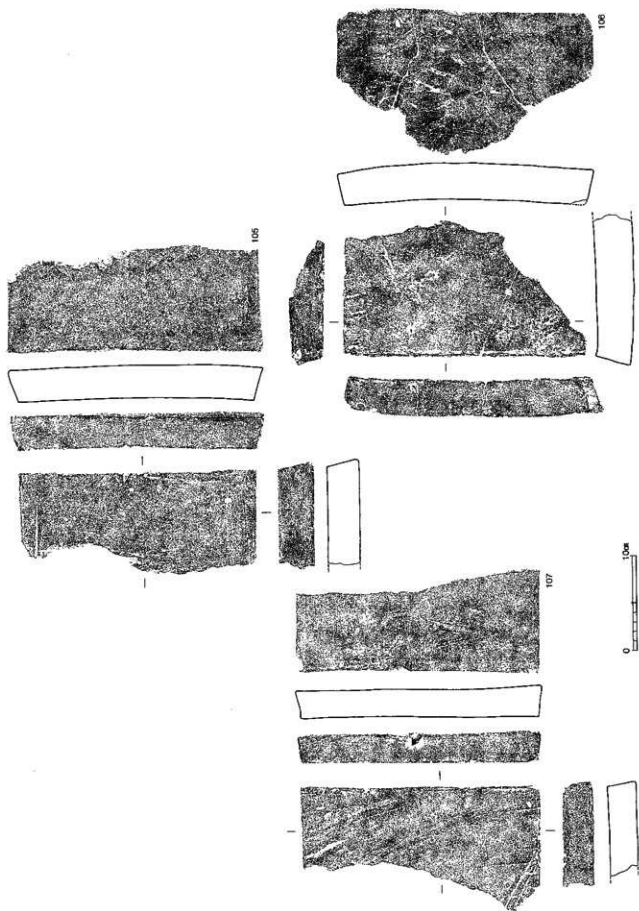
第3-441图 06-4'層出土遺物実測図⑥(1/4)



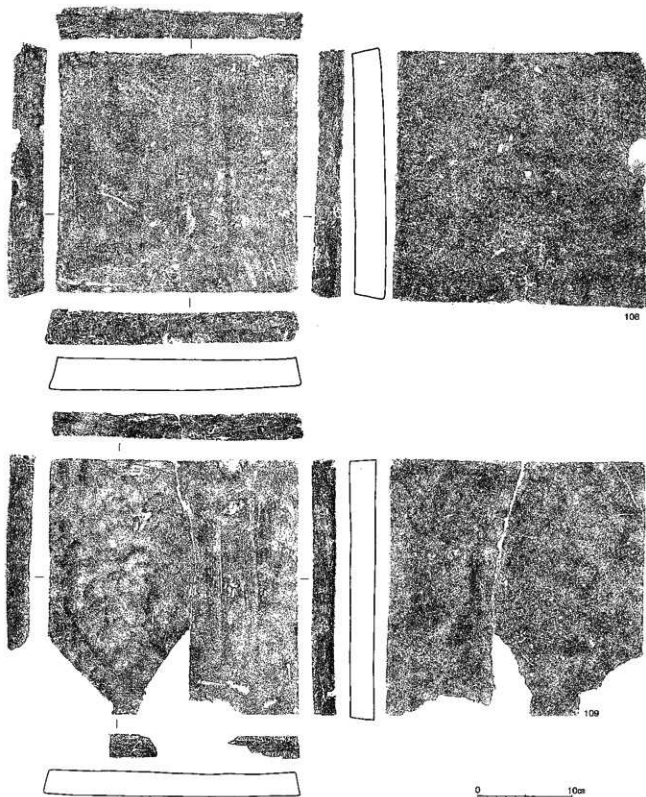
第3-442図 06-4'層出土遺物実測図⑧ (1/4)



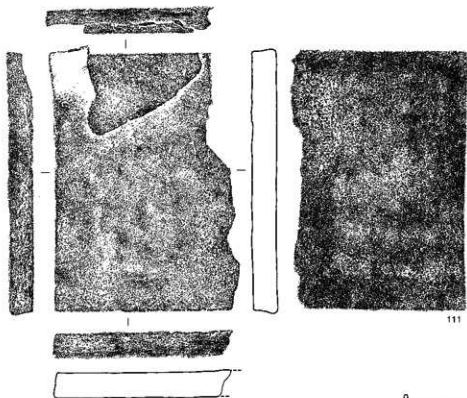
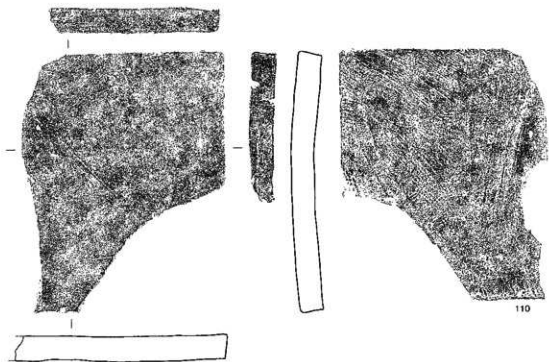
第3-443図 06-4'層出土遺物実測図①(1/4)



第3-444図 06-4'層出土遺物実測図② (1/4)

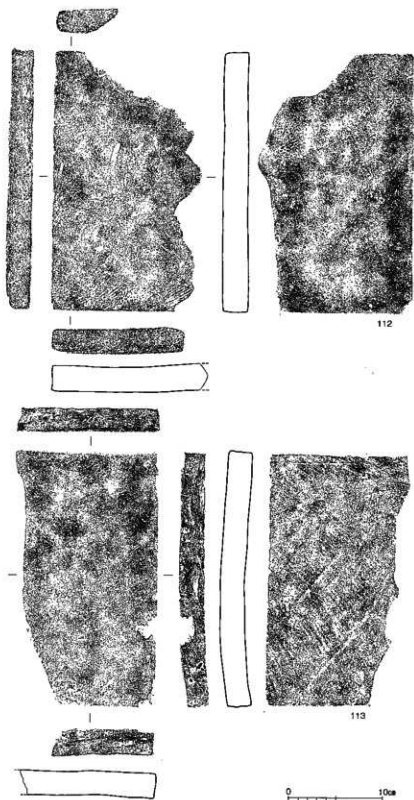


第3-445図 06-4'層出土遺物実測図③ (1/4)

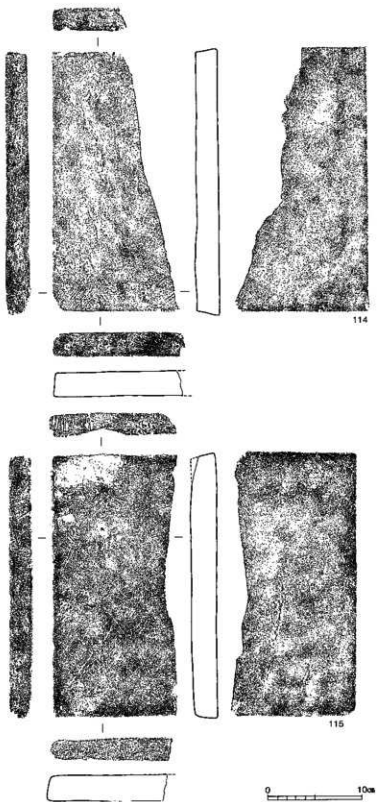


0 10cm

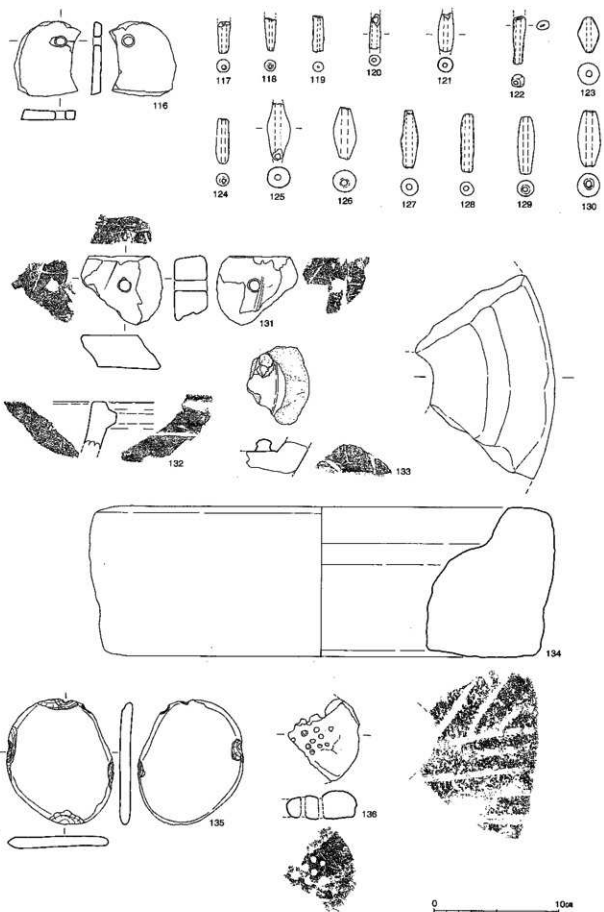
第3-446図 06-4層出土遺物実測図③ (1/4)



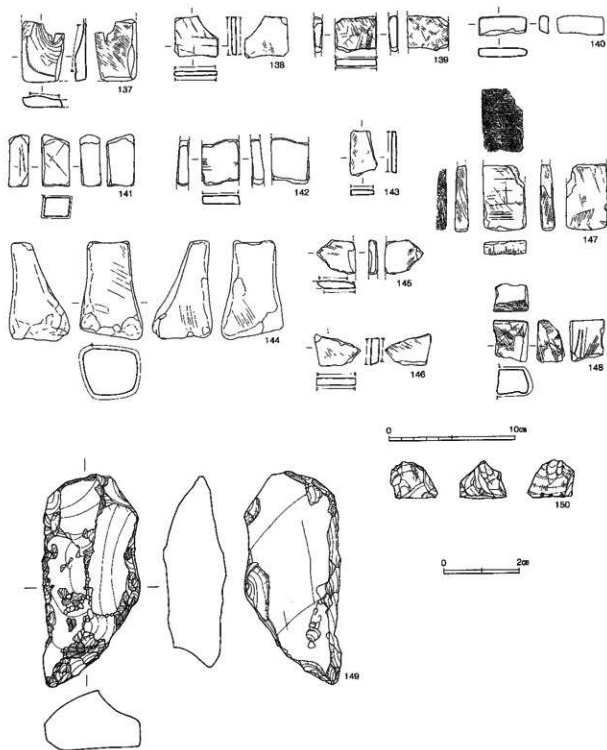
第3-447図 06-4'層出土遺物実測図⑥ (1/4)



第3-448図 06-4'層出土遺物実測図⑧ (1/4)

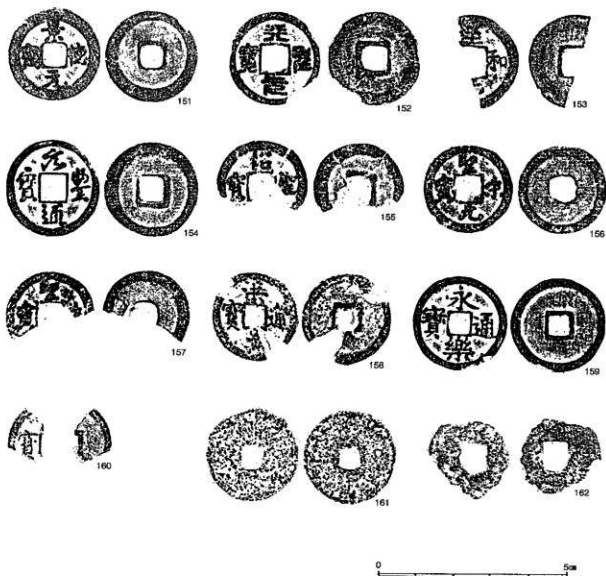


第3-449図 06-4'層出土遺物実測図⑦(1/3)



第3-450図 06-4層出土遺物実測図⑨ (1/3・1/1)

はロクロ整形による多条の沈線を持つ在地の土師器皿、63・64は京都系土師器皿である。65は土師器の碗、66は土師器の鍋であろうか。67～72は古代以前の遺物で、67は縄文土器、68は古式土師器の甕、69は須恵器坏壺、70は須恵器壺、71は古代の土師器坏、72は古代の土師器碗である。73～84は瓦質土器で、73は碗、74～77は火鉢、78・79は風炉である。80～82は脚部で、80は獸形の装飾を持つ。82は香炉の脚である。83は摺鉢、84は甕で、胴部下半に格子目状のタタキを施す。



第3-451図 06-4'窟出土遺物実測図⑧ (1/1)

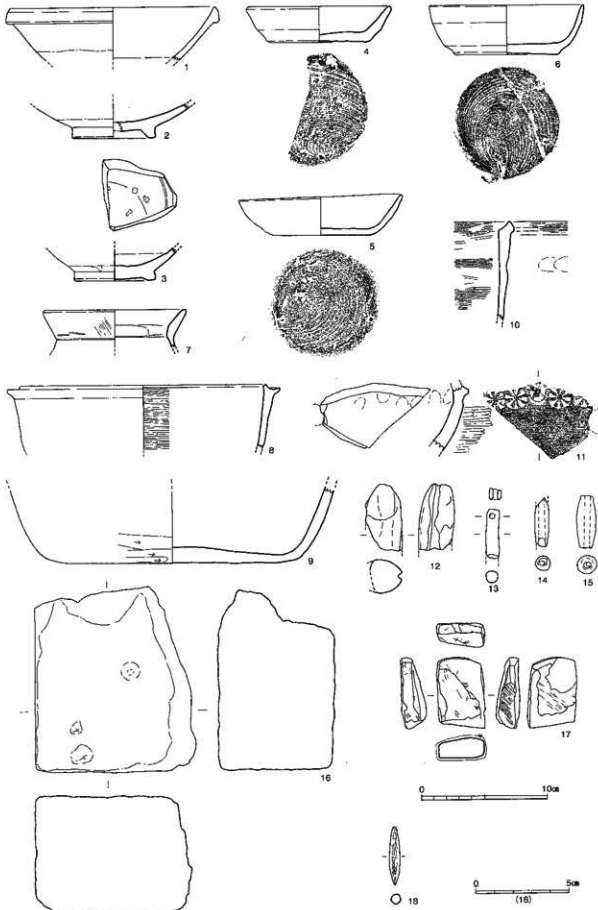
瓦

瓦当面に范傷
成形台の痕跡

85～115は瓦である。25～87は鬼瓦で、86は脊の下に線刻で口髭を表現する。88・89は軒丸瓦で、88は瓦当面に范傷が顕著に残る。90～95は軒平瓦である。91は菱形唐草文、93は蓮草唐草文を施す。96は平瓦で、凸面に成形台の痕跡と思われる方形の突起が見られる。97は丸瓦で、凸面に縄目タタキ、凹面に布目とコビキ痕が残る。98は熊振瓦、99～115は磚である。

六太部石

116～130は土製品である。116は瓦質土器の底部を転用した加口円盤で、上部に穿孔を施す。117～130は管状土錘である。131～150は石製品である。131～133は滑石製石錘の破片で、133は内面に鉄釘が付着する。134は茶白の上白で、全体に被熱している。135は扁平な円標の4箇所に打ち欠きを施すもので、石錘であろうか。136は用途不明の凝灰岩製品で、10個の貫通する孔を穿つ。137～148は砥石である。149は火打石で、素材の稜線上に細かい使用痕が無数に残る。素材は黄褐色の珪化木で、杵築市山香町で採出する六太部石である。150は水晶である。151～162は銅銭である。151～157は北宋銭で、151は景德元寶（1004年初鑄）、152は天聖元寶（1023年初鑄）、153は至和元寶（1054年初鑄）、154は元豊通寶（1078年初鑄）、155は紹聖元寶（1094年初鑄）、156・157は聖宋元寶（1101年初鑄）である。158・159は明銭で、158は洪武通寶（1368年初鑄）、159は永樂通寶（1408年初鑄）である。160～162は銭種不明である。



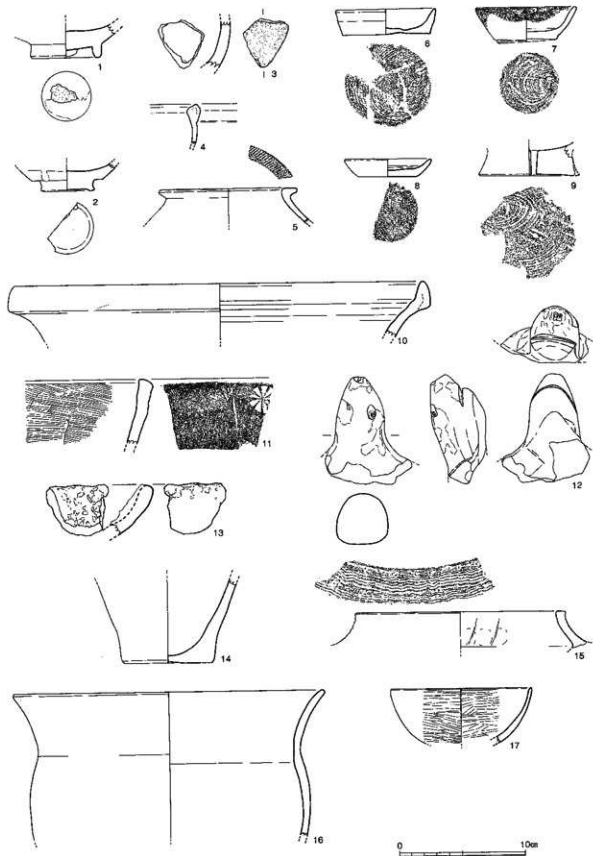
第3-452図 06-5層出土遺物実測図①(1/3・1/2)



第3-453図 06-5層出土遺物実測図②(1/4)

4. 第5層出土遺物 (第3-452・3-453図)

1～3は白磁碗である。1は口縁部を肥厚する玉縁碗で、3もその底部であろう。4～6は土師器坏で、いずれも底面に回転糸切り痕が残る。7は古式土師器の甕である。8は土師器の鍋、9は土師器の鉢であろう。10は瓦質土器の鍋、11は瓦質土器の風炉で、わずかに風門が確認できる。12～15は土鉢で、12は紡錘形の側面に沈線が巡るもの、13は両端に穿孔を施す棒状土鉢、14・15は管状土鉢である。16は凝灰岩の切石で、直方体状に加工する。17は紙石、18は両端が尖る木製品である。19～22は瓦で、19は右巻きの巴文と珠文を施す軒九瓦、20は鳥衾瓦、21は連珠文を施す軒平瓦、22は平瓦である。



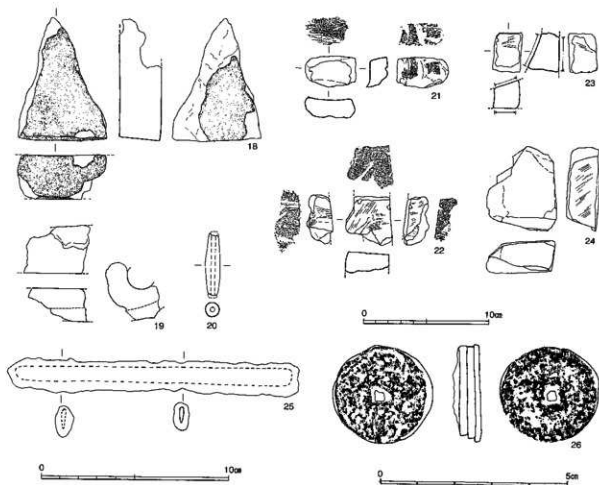
第3-454図 06調査区出土遺物実測図①(1/3)

5. 調査区出土遺物 (第3-454～3-457図)

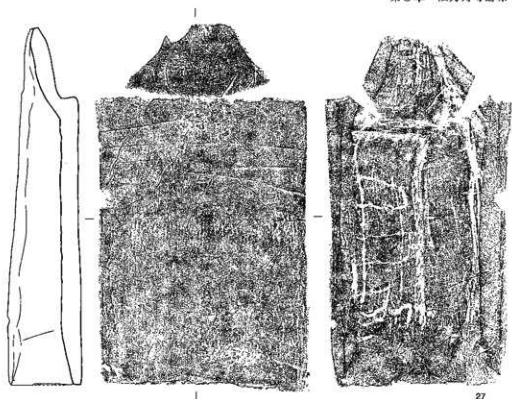
朱墨書の痕跡

亀形の瓦質
土器

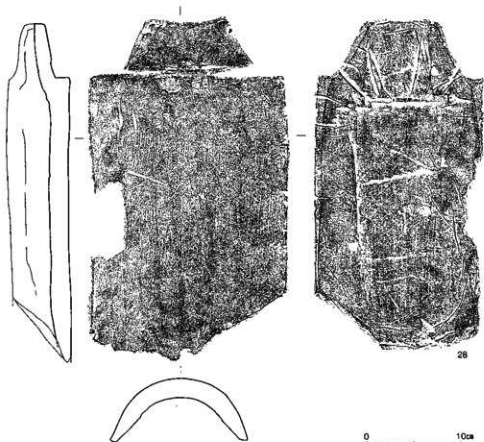
ここではトレンチ掘削時の出土で層属層序が明確でないものや、出土グリッドが不明なものを一括して掲載する。1は青磁碗である。2は中国産の天目碗で、高台にわずかに朱墨書の痕跡が残る。3は緑釉を施す陶器で、香炉と思われる。4は中国南部産の焼締陶器鉢で、口縁部を三角形に肥厚する。5は焼締陶器の壺で、口縁部にケズリの痕跡が残る。6～8は土師器小皿で、8は内面にロクロ整形による沈線が巡る。9は土師器の燗台である。10は東播磨須恵器の捏鉢、11は瓦質土器の火鉢である。12は亀形の瓦質土器の頭部で、目と鼻を刺突で、口を沈線で表現する。13は埴場で、内面に金属溶解が付着する。14は弥生土器の甕、15は複合口縁壺である。16は土師器の甕で、古墳時代の所産。17は黒色土器で、内外面ともにヘラミガキを密に施す。18は埴で、両面ともに赤色顔料を施す。19は輪羽口、20は管状土鍾である。21は滑石製石鍋の破片で、破損面を研磨し転用している。22～24は砥石である。25は鉄製の刃物、26は銅鏡3点が錆着したもので、鏡種は明らかにできない。27～30は丸瓦である。27・28は凹面に小振りの吊ね痕、29はコビキ痕が残る。これら丸瓦は出土地点が不明であるが、完形に近い丸瓦が多量に出土した06-SK097出土の可能性が高い。



第3-455図 06-調査区出土遺物実測図② (1/3・1/2・1/1)



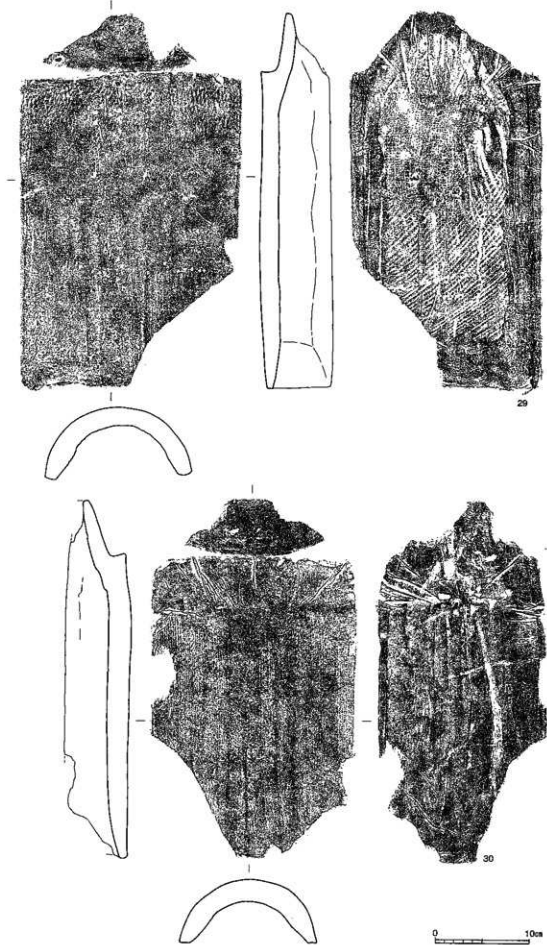
27



28

0 10cm

第3-456图 06-調査区出土遺物実測図③ (1/4)



第3-457図 O6-調査区出土遺物実測図④(1/4)

第4章 旧万寿寺跡第7次調査

第1節 調査の概要

調査期間
平成25年
6月3日～
平成27年
1月10日

調査面積
670㎡

本章で報告する旧万寿寺跡第7次調査は、都市計画道路庄の原佐野線（元町工区）建設に伴い大分県土木建築部大分土木事務所からの委託を受けて実施したもので、平成25年（2013年）6月3日から平成26年（2014年）1月10日の約7ヶ月間、発掘調査を実施した。発掘調査区は道路工事の対象地区をすべて調査対象としたため、不整形を呈するが、その規模は南北約14m、東西約37.5mとなり、調査面積は670㎡となる。

本調査区は大分県大分市大字大分に所在し、北側の隣接部に平成23年度に発掘調査を行った旧万寿寺跡第6次調査区、北東側の隣接部に平成26年度に発掘調査を行うことになる旧万寿寺跡第8次調査区、東側の隣接地に平成27年度に発掘調査を行うことになる旧万寿寺跡第10次調査区が位置している（第4-1図）。

第7次調査区は、発掘調査直前まで駐車場として使用されていた。駐車場には大きなコンクリートブロックによる基礎があり、この基礎を構築する際に調査区の一部が大きく削平を受けていた。L64～N64区、およびN64～N66区にみられる「L」字状の擾乱がそれで、当該部分は前者では東西約17.8m、南北約3.3m、後者では東西約4.5m、南北約14mに及ぶ。この擾乱部分では遺構の深度が深い墓坑や溝、井戸などは一部が残存していたが、深度が浅い柱穴や土坑などは、すべてが削平されていた（第4-2図）。

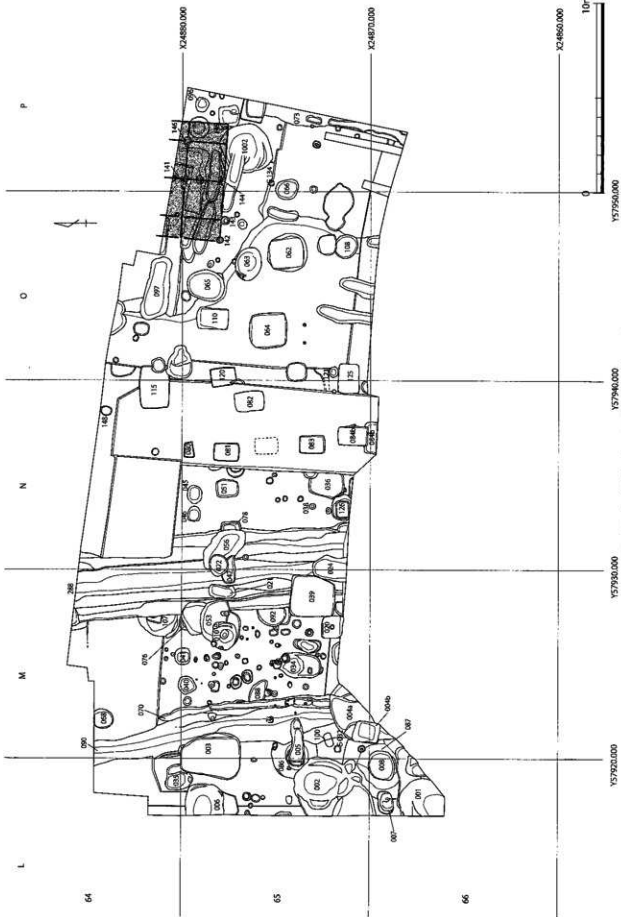


第4-1図 旧万寿寺跡第7次調査の位置 (1/5,000)

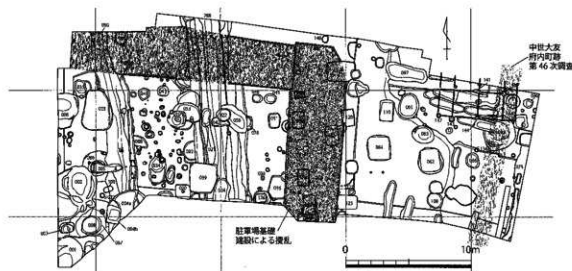
第4章 旧万寿寺跡第7次調査

第4-1表 旧万寿寺跡第7次調査主要遺構一覧表

遺構番号	低遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の特徴	特記事項	埋蔵量
07-SK001	S001	土坑	L66 区	V期 (16世紀後半)		413
07-SK002	S002	土坑	L66 区	VI期 (16世紀後半)		416
07-SK003	S003	土坑	L66 区	IV期 (15世紀中頃～後半)		418
07-SK004a	S004	土坑	M65～M66 区	V期 (16世紀後半)		420
07-ST004b	S004	墓	M65～M66 区	VI期 (16世紀後半)		447
07-SK005	S005	土坑	L65～M65 区	VI期 (16世紀後半)		423
07-SK006	S005	土坑	L64～L65 区	VI期 (16世紀後半)		423
07-SK008	S008	土坑	L66 区	II期 (14世紀後半)	SE087 上面に構築。関連遺構か？	441
07-SK1010	S010	土坑	L66 区	IV期 (15世紀中頃～後半)		426
07-ST020	S020	墓	M65 区	I期 (14世紀前半)		448
07-SK022	S022	土坑	M65～N65 区	IV期 (15世紀中頃～後半)		425
07-SK024	S024	土坑	M65～N65 区	IV期 (15世紀中頃～後半)	土坑内に燧石の層が多数出土	426
07-SK034	S034	土坑	M65 区	VI期 (16世紀後半)		427
07-ST035	S035	墓	L64～L65 区	II期 (14世紀後半)		450
07-SP038	S038	柱穴	N65 区	16世紀後半～末期		-
07-SK039	S039	土坑	M65 区	IV期 (15世紀中頃～後半)		429
07-SK042	S042	土坑	M65～N65 区	IV期 (15世紀中頃～後半)		430
07-ST045	S045	墓	N65 区	II期 (14世紀後半)		451
07-ST051	S051	墓	M65 区	II期 (14世紀後半)		452
07-SK053	S053	土坑	M65 区	IV期 (15世紀中頃～後半)		430
07-SK056	S056	土坑	M65 区	IV期 (15世紀中頃～後半)	亀瓦の根掘り出土	431
07-SK062	S062	土坑	O65 区	I～II期 (14世紀前半～後半)		432
07-SK064	S064	土坑	O65 区	I～II期 (14世紀前半～後半)		434
07-SX068	S068	銅線埋納遺構	M64 区	I～II期 (14世紀前半～後半)	銅線 10枚が出土	479
07-SD070	S070	溝	M64～M65 区	VI期 (16世紀後半)	切り合い関係 SD090→SD070	394
07-SD073	S073	溝	P66～P66 区	V期 (16世紀前半)		399
07-ST076	S076	土坑	M64～M65 区	IV期 (14世紀後半)		453
07-ST078	S078	墓	M65 区	II期 (14世紀後半)		453
07-ST080	S080	墓	N65 区	I～II期 (14世紀前半～後半)		455
07-ST081	S081	墓	N65 区	II期 (14世紀後半)		455
07-ST082	S082	墓	N65 区	II期 (14世紀後半)		456
07-ST083	S083	墓	N65 区	I期 (14世紀前半)		460
07-ST084a	S084a	墓	N65 区	II期 (14世紀後半)		463
07-ST084b	S084b	墓	N66～N66 区	II期 (14世紀後半)		463
07-S085	S085	不明	M64～M65 区	II期 (14世紀後半)	墓の可能性を考慮？	-
07-SP086	S086	井戸	L65～M65 区	I期 (14世紀前半)		440
07-SP087	S087	井戸	L65～66～M65～66 区	II期 (14世紀後半)		444
07-SD090	S090	溝	M64～M65 区	III期 (14世紀末～15世紀前半)	切り合い関係 SD090→SD070	394
07-ST092	S092	墓	M65 区	II期 (14世紀後半)		464
07-SX100	S100	銅板一括出土遺構	M65 区	I～II期 (14世紀前半～後半)		479
07-SE107	S107	井戸	M64 区	I～II期 (14世紀前半～後半)		445
07-ST108	S108	墓	O65 区	II期 (14世紀後半)		465
07-ST110	S110	墓	O65 区	II期 (14世紀後半)		466
07-SK115	S115	土坑	N64～O64 区	I～II期 (14世紀前半～後半)	壁上に焼土	440
07-ST120	S120	墓	N65～O65 区	II期 (14世紀後半)		472
07-SX121	S121	遺物集中部	O65 区	14～15世紀？		489
07-ST125	S125	墓	N65～O65 区	I期 (14世紀前半)		476
07-ST126	S126	墓	N65 区	I～II期 (14世紀前半～後半)		477
07-SP141	S141	柱穴 (榎立柱建物跡)	P64 区	15世紀？	第8次調査区に続く	-
07-SP142	S142	柱穴 (榎立柱建物跡)	O65 区	15世紀？	第8次調査区に続く	-
07-SP143	S143	柱穴 (榎立柱建物跡)	O65 区	15世紀？	第8次調査区に続く	-
07-SP144	S144	柱穴 (榎立柱建物跡)	P65 区	15世紀？	第8次調査区に続く	-
07-SP145	S145	柱穴 (榎立柱建物跡)	P65 区	15世紀？	第8次調査区に続く	-
07-SP146	S146	柱穴 (榎立柱建物跡)	P65 区	15世紀？	第8次調査区に続く	-
07-ST130	-	墓	N65 区	I～II期 (14世紀前半～後半)	調査後に空中写真の検討から鑑定	477
07-SD288	S136	溝	M～N64～M～N65 区	III期 (14世紀末～15世紀前半)		401
07-SE1002	S1002	井戸	P65 区	V～VI期 (16世紀前半～後半)		446



第4-2図 旧万寿寺跡第7次調査遺構配置図 (1/200)



第4-3図 復乱の位置と旧調査区との関係 (1/300)

また、P64～P66区では、大分市教育委員会が平成16年度に行った中世大友府内町跡第46次調査のトレンチの一部が確認できた。大分市教育委員会によるトレンチは幅約2.4m、長さ約12.0mが検出され、一部の深掘り部分を除いて、標高5.7m付近まで掘り下げられていた。このレベルで後述する井戸07-SE1002が検出されており、遺構埋土も部分的に発掘されていた。今回の旧万寿寺跡第7次調査では、発掘調査後に実施予定の道路工事によって、工事対象となる地区の遺構面が大きく掘削される可能性が考えられたため、最終的には調査区全体を大分市が掘削したレベルよりもさらに20cm程度掘り下げ、遺構の見落としなどがないように努めた。

発掘調査は調査区西側のL64～N65区付近から開始し、順次西側から東側へ向けて発掘調査を進めていった。平成25年（2013年）11月8日には、土木事務所からの要請で、調査が終了したM64～M65区以西を工事側に引き渡した。引き続き、道路施設の工事と併行しながら、N64～N66区以東の調査を継続することとなる。第3分冊（写真図版編）で提示している調査区の垂直写真（空撮）は、東側と西側に分割した調査区の合成写真であることを留意されたい。

合成写真

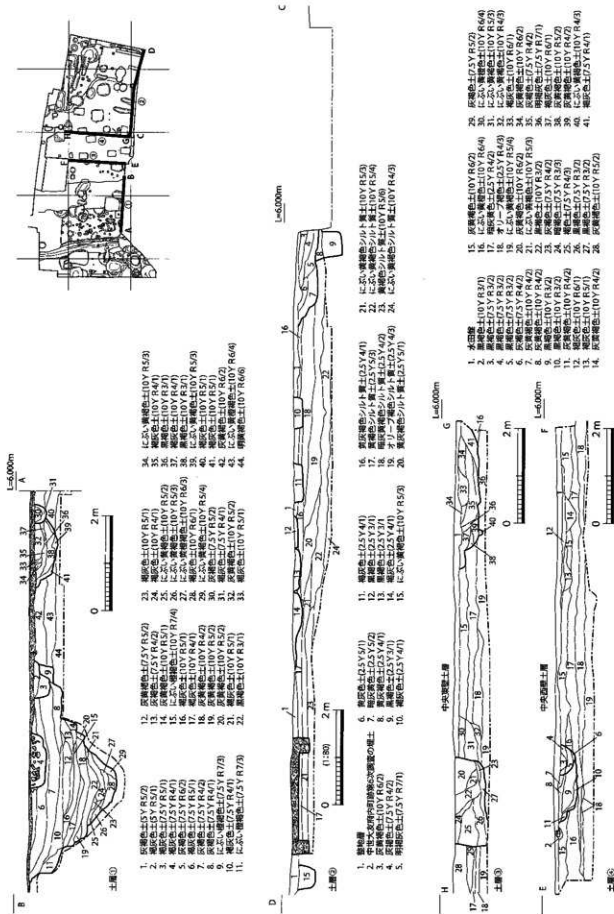
本調査区における基本的な土層の堆積状況（第4-4図）は、下記の通りである。調査区の土層観察については、土層実測図の作成直前に幅30cm程度の小トレンチを設定し、遺構面以下の掘り下げを行った。これは地山とした土層の堆積状況を確認することと、中世の遺構面よりさらに下に、中世以前に遡る遺構面があるのどうかを確認するという2つの目的があった。このトレンチの掘り下げでは、中世以前の遺物の出土はなく、遺構面を確認することはできなかった。

まず、調査区の表土はアスファルト等で舗装されており、表土下は調査直前まで使用されていた駐車場の造成土が2m以上堆積していた。これらをすべて取り除くと、旧地表土もしくは遺物包含層が10cmほど残存していた。遺物包含層は移植ゴテで除去するとともに、同時に遺構検出を行った。遺構検出面は基本的には1面で、その標高は西側が高く、東側が低い傾向が認められたが、概ね5.7m程度を満ることがわかった。

遺構面の標高
約5.7m

本調査区で確認された遺構は、溝が4条、土坑・柱穴が多数、井戸が4基、掘立柱建物跡が1棟、基が19基で、銅鏡一括出土遺構1基などである。

溝の中で07-SD090・07-SD288とした15世紀前半の2つの溝は、万寿寺の寺域内の区画溝と推定される。地盤が砂質土であるため、溝の存続時期は短い。この中で、SD288の埋土中から銅鏡がま



第4-4図 旧万寿寺跡第7次調査土層 (1/80)

とまって出土しており、注目される。また、16世紀後半に比定される07-SD070は、07-SD090の東側縁部に重複して構築されるが、当該時期に町屋化する領域の分割り溝としての役割を果たす遺構と推定される。

土坑の中で調査区の西側に位置するものは、16世紀後半に構築されたものが多く、当該時期に万寿寺境内の西側が町屋化する状況が看取できる。これ以来に位置する15世紀代以前に構築されたものは、万寿寺に関連する廃棄土坑と推定される。

井戸はその大半が万寿寺の存続時期に位置づけられるもので、中世の井戸としてはグレードの高い遺構とされている「方形縦板組隅柱横棧型」の井筒をもつものが存在する。

独立柱建物跡は、東西に庇を有する4間×2間の建物である。柱穴そのものは小型であるが、その主要なものに、柱穴内礎石を設置するのが特徴である。遺構の大部分が北側の第8次調査区に伸びるため、詳細な報告は第8次調査の項目で行う予定である。

墓と推定される遺構は、N65区付近に集中する。墓の中から土師質土器が大量に出土する事例があり、副葬品や供献品として、特異な状況を呈している。墓のほとんどは14世紀で構築が終了しており、墓の集中部付近には15世紀以降の遺構は希薄である。つまり、墓の集中部は14世紀に墓地として成立し、その後は新たな埋葬は行われなものの、墓地は万寿寺が廃絶する16世紀末まで存続していることになる。

銅銭一括出土遺構は本調査区で最も注目すべき遺構で、約5千枚の銭塊が2個体、総計約1万枚の穴開き銅銭が素掘りの土坑から出土したものである。

以下、それぞれの遺構の詳細を次項目以降で報告したい。

なお、遺跡の空中写真撮影は、平成25年（2013年）11月7日と12月10日の2回に分けて実施した。また、発掘調査の終了後、平成25年12月には調査区の埋め戻しを実施した。埋め戻しに当たっては、遺構面が道路下に保存される可能性を考慮し、遺構面の上に保護層を20cm程度確保した。12月末までには埋め戻しを完了し、明けて平成25年1月上旬に発掘調査で生じた段差に対して、法面を設けるなどの安全対策を実施した。そして、1月10日に現地での作業をすべて終了することができた。

第2節 遺構と遺物

1 溝

07-SD070および07-SD090（第4～5図）

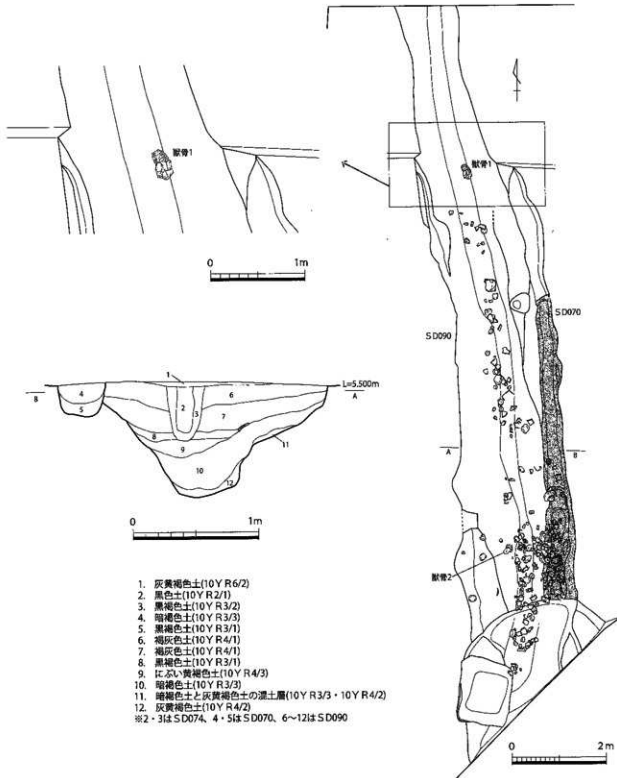
L64～M65区に位置するふたつの溝である。いずれも南北方向の溝で、SD070の東端となる位置にSD090が重複している。切り合い関係は、SD090→SD070である。また、ふたつの溝は南側でSK004aに切られており、さらにSD070はSK003やSK005、SE086、SX100（銅銭一括出土遺構）などとも切り合い関係を有する。

07-SD070の規模は、長さ10.4m、幅0.4m、深さ30cmである。北側は擾乱により、消失している。埋土は2層に分層されるが、出土遺物の大半は上層からのもので、下層からの遺物はほとんど認められなかった。また、南側には遺構上面に礫が多量に分布していた。埋土中から京都系土師器や瓦類などが出土しており、遺構の時期はⅤ期（16世紀後半）に比定される。

07-SD090の規模は、長さ14.4m、幅2.1m、深さ90cmである。M64区では埋土の上層、すなわち溝がほぼ埋まった時点で、動物遺存体（ウマの頭部か？）が廃棄されている状況が認められた。この遺存体は頭部を下にした状態であり、意図的な埋置であるかどうかの判断は難しいが、祭祀または儀礼的な行為を反映したものである可能性が考えられる。また、動物遺存体は遺構の南側（M65区）

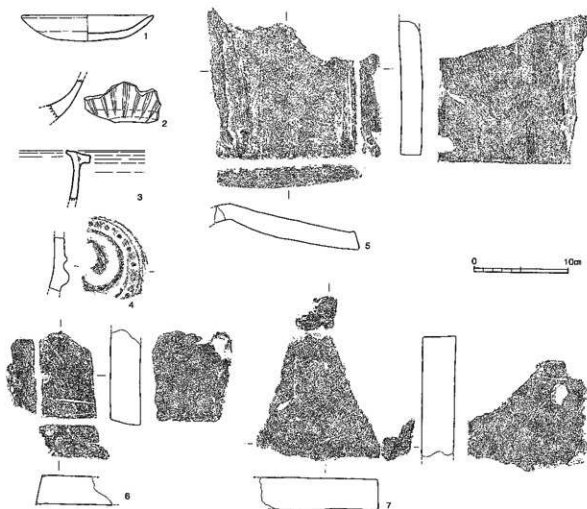
重複する
ふたつの
溝

動物遺存体
の出土



第4-5図 07-SD070・07-SD090実測図(1/80、土層図は1/30)

でも出土している。出土遺物には、土師質土器・束播系須恵器・備前焼などがある。発掘調査時にはSD090の年代を14世紀後半と考えていたが、整理作業後、出土遺物に中世3期b(15世紀初頭～前半)の備前焼摺鉢が一定量存在することが判明した。遺構の掘削年代を確定するのは難しいが、少なくとも当該遺構が埋没するのはⅢ期(14世紀末から15世紀前半)と考えておきたい。

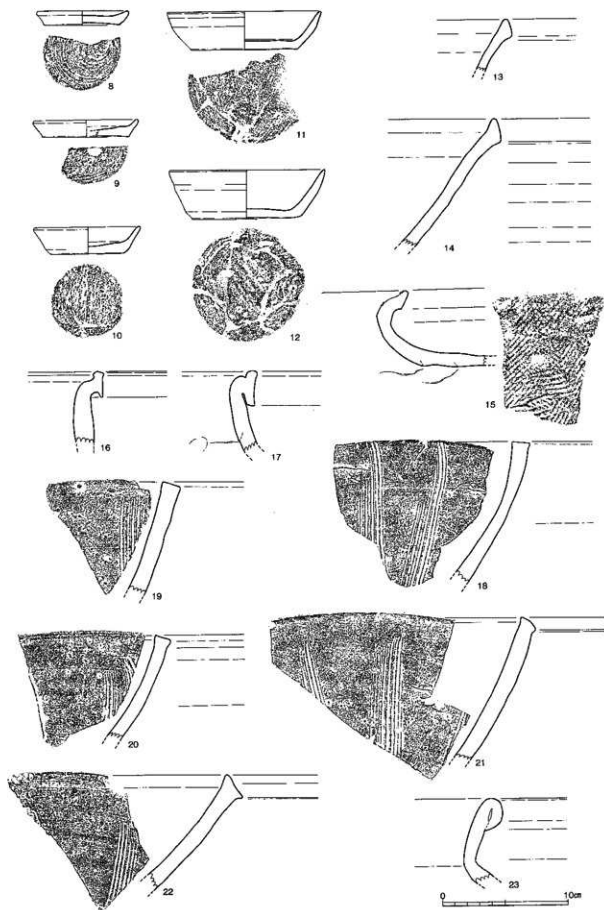


第4-6図 07-SD070出土遺物実測図 (1/3、1/4)

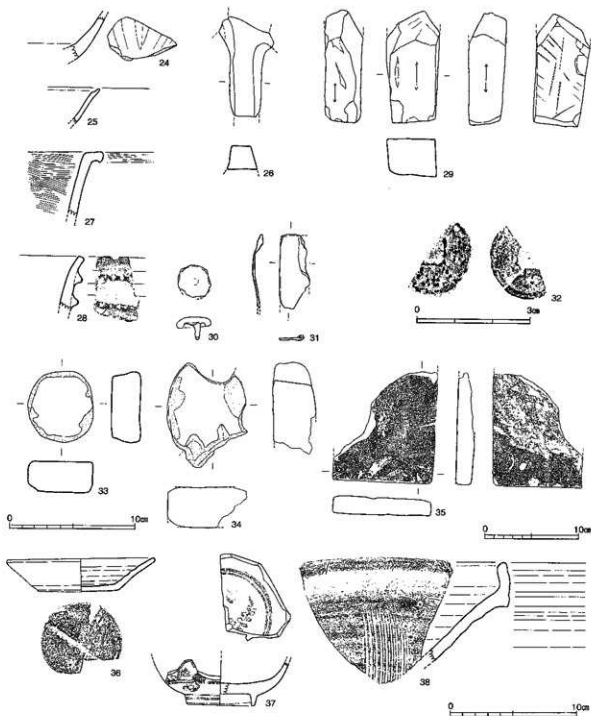
07-SD070および07-SD090出土遺物 (第4-6図～第4-8図)

1～7は07-SD070の出土遺物である。1は京都系土師器皿で、16世紀後半に比定される。遺構の時期を示す遺物のひとつである。2は中国産の青磁碗皿で、外面に篋文を施す。15～16世紀代の製品である。3は陶器鉢で、口縁部外面に鐙状の突帯を有する。朝鮮王朝産の製品である可能性が高く、15～16世紀代に比定される。4～7は瓦類で、4は巴文の軒九瓦、5は雁振瓦、6・7は埴である。

8～38は07-SD090の出土遺物である。8～10は土師質土器小皿で、底部に糸切り痕が認められる。11・12は土師質土器坏でこれも底部に糸切り痕がある。13～15は東播系須恵器で、13・14は鉢、15は甕である。14世紀代に比定される。18～22は備前焼鐙鉢の口縁部で、18～20は中世3期aの製品で14世紀後半、21・22は中世3期bの製品で15世紀初頭から前半に比定される。23は備前焼甕の口縁部である。24は龍泉窯系青磁鑊蓮弁文碗、25は口割げの白磁碗である。26は瓦質土器の製品で用途不明のもの、27は瓦質土器土鍋の口縁部である。28は弥生時代中期に比定される下城式土器の口縁部で、口縁部の外面に2条の刻目突帯を有する。29は砥石で、素材は砂岩である。30・31は金属製品で、いずれも素材は青銅である。30は紙状のもの(銅紙)、31は用途不明の板状製品である。32は銅銭であるが、銭文は判読できない。33～35は瓦類で、33は円盤状の再加工品、34は鬼瓦の破片、35は埴である。

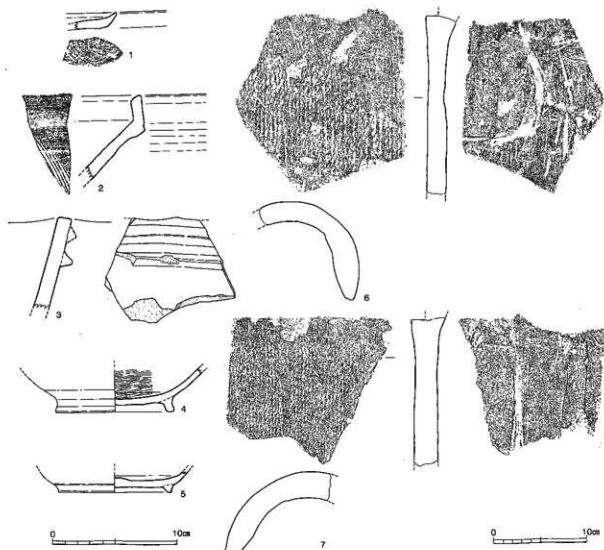


第4-7図 07-SD090出土遺物実測図① (1/3)



第4-8図 07-SD090出土遺物実測図②(1/4, 1/3)

36～38も07-SD090の出土遺物として取り上げたが、出土地点は遺構南側の礎が集中する部位である。本来、SD070に関連する遺物である可能性が考えられる。36はロクロ目土師器で、底部に糸切り痕が認められる。生産年代は15世紀末から16世紀初頭である。37は景徳鎮系の青花碗で、16世紀代の製品。38は備前焼摺鉢の口縁部で、中世6期(16世紀前半)に比定される。



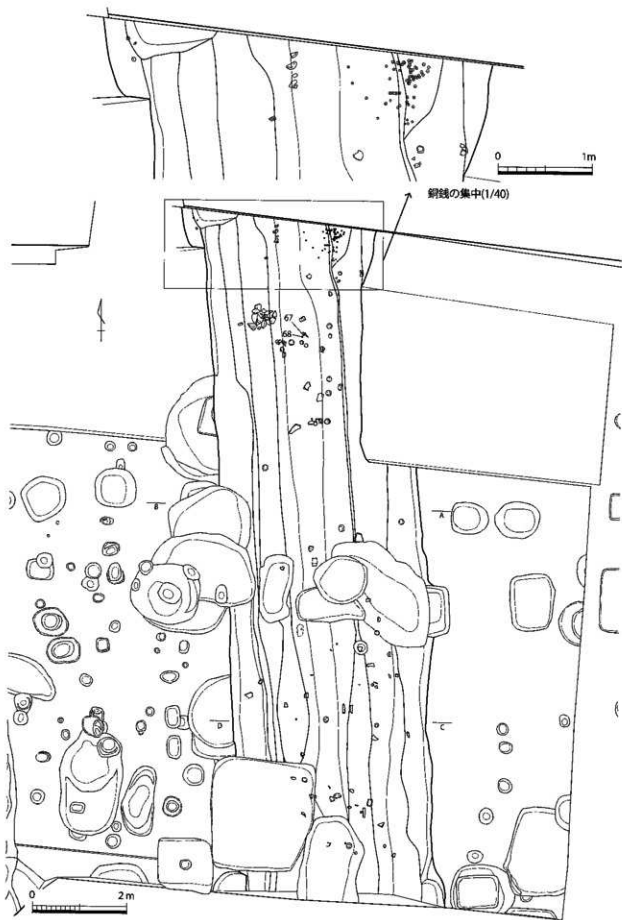
第4-9図 07-SD073出土遺物実測図(1/3、1/4)

07-SD073

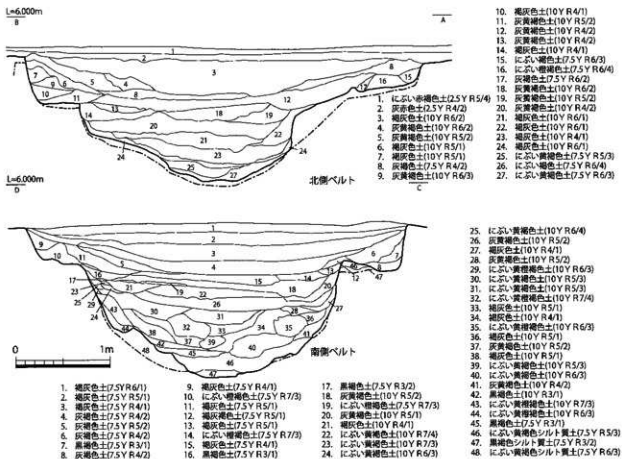
P66～P67区に位置する小規模な溝で、遺構の規模は長さ4.3m、幅0.8m、深さ30cmである。上面が削平を受けており、調査区の東南隅付近に位置しているため、その性格は不明であるが、区画溝のひとつであろうか。出土遺物は埋土の上面に集中しており、溝の埋土瓦甎・備前焼・土師器などがあるが、古代・中世の遺物が混在している。遺構の時期については、時期が確定できる遺物が少ないため断定できないが、最も新しい遺物を重要視して、V期(16世紀前半)と判断しておきたい。

07-SD073出土遺物(第4-9図)

1は土師質土器小皿で、底部に糸切り痕が認められる。14世紀代の遺物である。2は備前焼摺鉢の口縁部で、中世6期に比定される製品。製作年代は16世紀前半で、遺構の時期を判定する上で、重要視した遺物である。3は弥生時代中期の甕の口縁部である。4は黒色土器(内黒土師器)で9世紀代に比定される。5は9世紀の土師器埴の底部である。6・7は丸瓦で、外面に縄目叩きが認められる。



第4-10図 07-SD288実測図 (1/80、1/40)



第4-11図 07-SD288土層実測図(1/40)

07-SD288 (第4-10図・第4-11図)

M64～N65区に位置する溝で、遺構の規模は長さ14.3m、幅4.2m、深さ160cmである。土坑や井戸、墓などと切り合い関係を有し、14世紀代に比定される井戸SE107や墓ST092等を切り、15世紀以降に比定される土坑SK039・SK024・SK053等から切られている。遺構の断面形態や土層を検討すると、SD0288は下層に幅2.3m以上、深さ160cm、上層に幅4.2m、深さ55cmというふたつの溝が、同じ場所に重複している。

下層の溝の建設

ばらまかれた銅銭

下層の溝にはブロック状の茶褐色土が堆積している地点が認められ、溝を意図的に埋設していることがわかる。堀土の中心からは、土師質土器の坏や皿がややまとまって出土した地点もある。また、上層の溝からは、100枚以上の銅銭がばらまかれたような状態で出土した。銅銭の出土地点は、遺構の北側に片寄っており、堀土でも上位のレベルであるため、溝の埋め戻し時に行われた地鎮等の意味があるのかもしれない。このような銅銭の出土状態は、北側の旧万寿寺第6次調査区でも認められ、SD288のM64区には銅銭が集中して出土する地点が認められる。

SD288の出土遺物には土師質土器・陶磁器や少量の瓦などがある。14世紀代の遺物が一定量出土しており、これらが下層の溝、すなわち溝の掘削当初の年代を示唆する可能性があるが、これについては、溝が墓や土坑、井戸などの14世紀代に比定される多くの遺構と切り合い関係を有することも注意されなくてはならない。遺構の年代としては、出土遺物の中でも第4-14図37～42の土師質土器坏などに注目し、Ⅲ期(14世紀末～15世紀前半)と考えておきたい。

07-SD288出土遺物（第4-12図～第4-21図）

金雲母を含む土師質土器

1～17は土師質土器の小皿である。底部には糸切り痕のみ、または糸切り痕の後に板状丘痕が認められる。17の底部内面には渦巻状のロクロ目が顕著に認められ、胎土に少量の金雲母が含まれることから、豊後府内以外の地域で生産された搬入品と推定される。18～42は土師土器の坏である。器形には若干のバリエーションがあり、箱形を呈するもの（18～36）、口縁部が外反し、その端部が尖り気味になるもの（37～42）などがある。特に後者は14世紀末から15世紀前半に比定されるもので、SD288の年代を判定する上で重要な遺物である。また、口径や器高がやや小ぶりな18は胎土に金雲母が含まれることから、当該資料は豊後府内以外の地域で生産された搬入品と推定される。33の底部には小さな貫通孔をもち、燭台として使用された可能性がある。また、34の体部にはやや大きな貫通孔があるが、これについては用途不明である。箱形を呈する20・21の胎土には小豆色の粒子が含まれる。

43～44は吉備系土師器で、14世紀初頭から前半に比定される。45～48は和泉系瓦器で、12～13世紀代の製品である。43～48は混入品であろう。

49～51は瓦質土器の火鉢または風炉である。49は外面にタテ方向のミガキを施し、外面に文様等は認められない。50は長胴形の風炉で、外面に菊花文の刻印を有し、残存部の上位には窓を設けている。51は浅鉢形の火鉢で、外面に菊花文の刻印を施す。52～54は瓦質土器の播鉢または鉢で、内面に横方向の刷毛目が顕著に認められ、外面は刷毛目またはナデなどが施される。53の内面には4条を一単位とする槽目がある。55・56は瓦質土器の土鍋である。57～60は東播系須恵器の鉢、61・62は須恵系土器の播鉢で、いずれも14世紀代に比定される製品である。

63～65は中国産の龍泉窯系青磁鎗蓮弁文碗で、13世紀代に比定される。66は景德鎮系の青白磁梅瓶で、胴部の破片である。器壁が薄く、裏面は露胎となる。67は白磁の合子で、外面に小さな鎗文を施す。68は口開けの白磁碗の口縁部である。69は白磁四耳壺の底部で、14世紀代に比定される製品。胎土に鉄分を多く含むためか、赤みを帯びている。

70は備前焼大甕の口縁部である。71は瀬戸美濃系陶器の皿の底部で、内外面に薄緑色の釉がかかっている。底部に糸切り痕が認められ、内面に目跡が残る。72・73は信楽系陶器で、72は鉢、73は陶器大甕の口縁部である。74～80は管状土鍾である。

81～84は混入と考えられる遺物である。81・82は9世紀代の緑釉陶器で、特に81は遺存状態が良く、内外面に鮮やかな緑色の釉が残存している。83は9世紀代の黒色土器内黒土師器で、84は古墳時代前期の複合口縁壺である。

85・86は軒丸瓦、87・88は連珠文軒平瓦である。このうち、87・88は万寿寺創建期に使用された軒平瓦のひとつである可能性が高い。

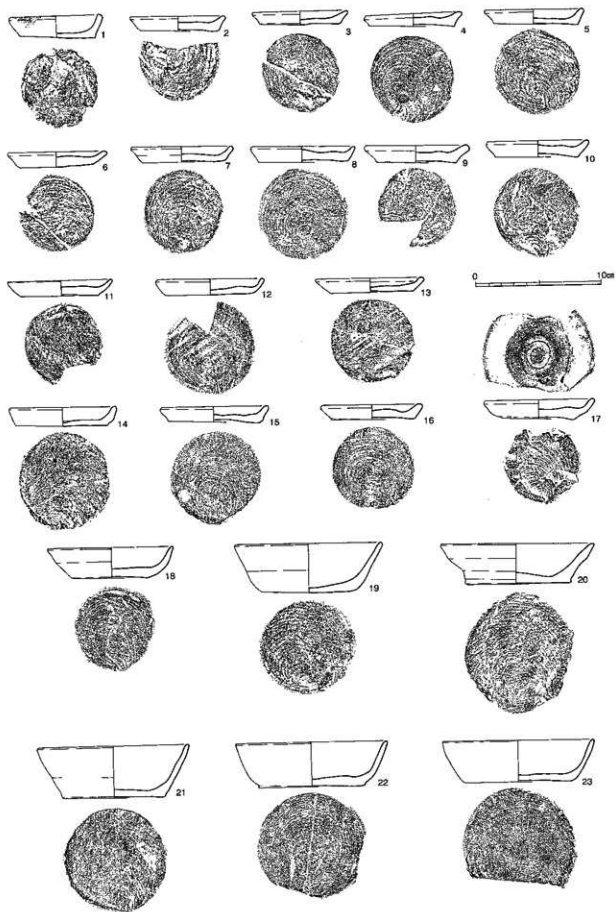
火打石
(六太郎石)

89～92は砥石で、いずれも素材として砂岩系の石材が使用されている。特に92の側面には整形時に生じた小さな加工痕（ノミ痕か？）があり、注目される。93は火打石の素材で、地元で六太郎石と呼ばれる石材（チャート）が使用されている。

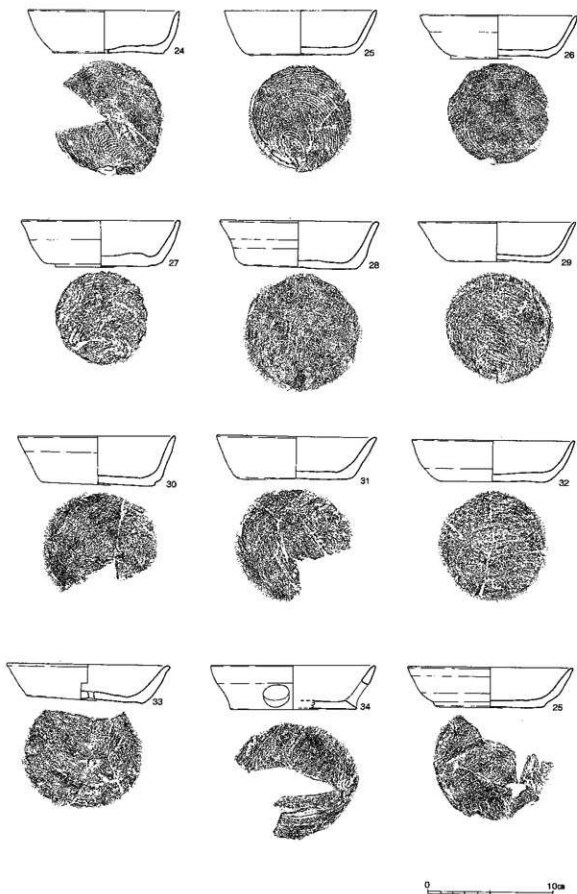
磨着した銅銭

94・95は青銅製品である。94は小さな貫通孔をもつ用途不明の板状製品である。95は斧で、体部中位と先端部が屈曲する。これらの屈曲は意図的なものである可能性もあるが、断定できない。

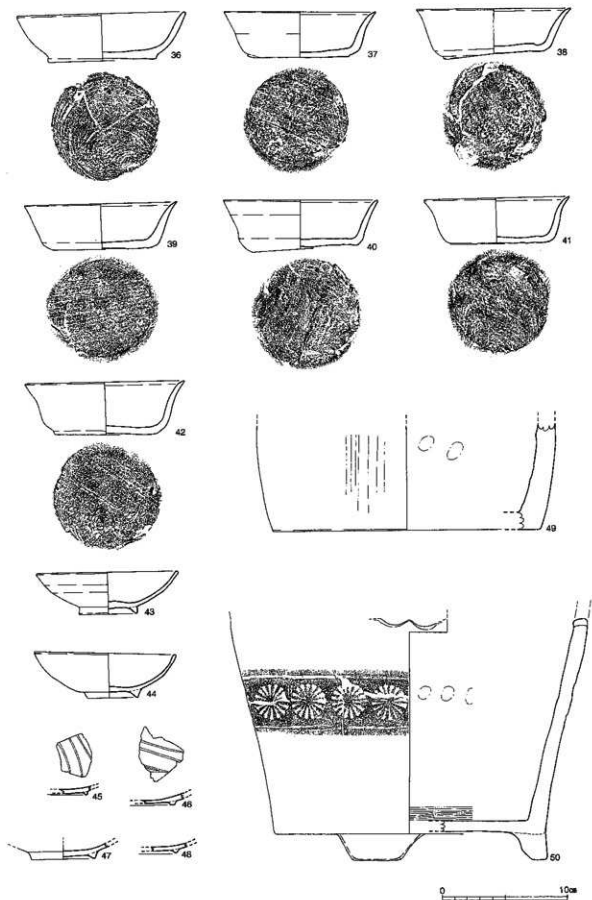
96～157は銅銭である。銅銭のほとんどは北宋銭である。銅銭の中には数枚が磨着したものがあり、これらの銅銭が溝の埴土中にばらまかれた状態であったことを示している。



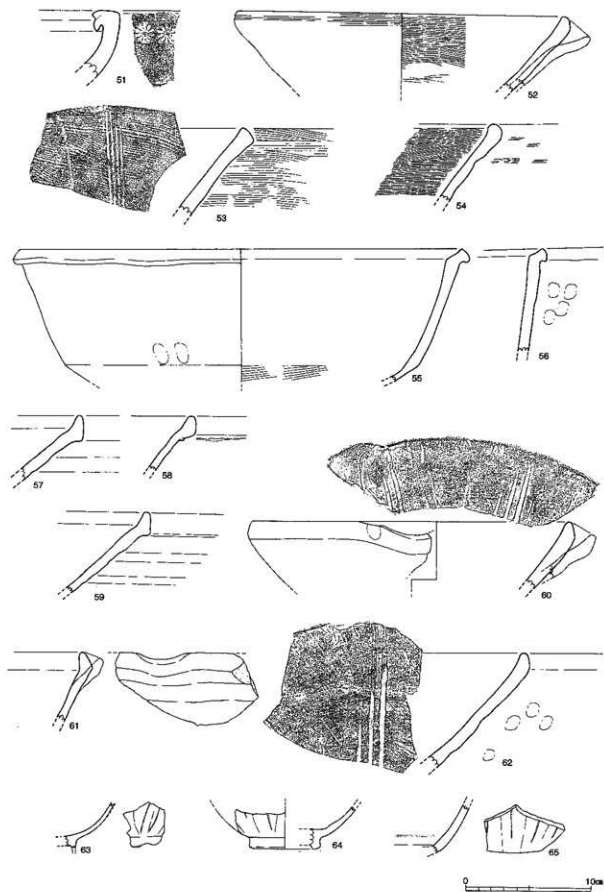
第4-12図 07-SD288出土遺物実測図① (1/3)



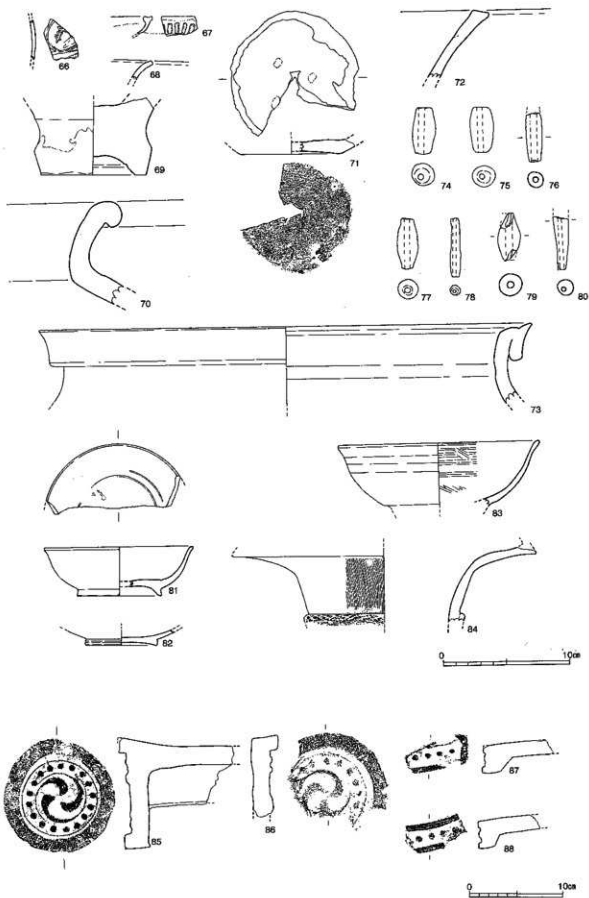
第4-13図 07-SD288出土遺物実測図②(1/3)



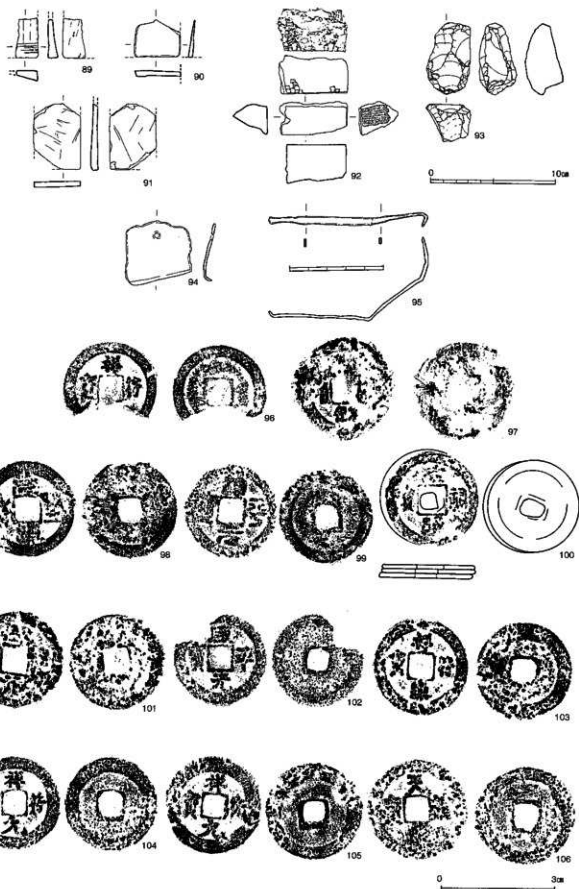
第4-14図 07-SD288出土遺物実測図③ (1/3)



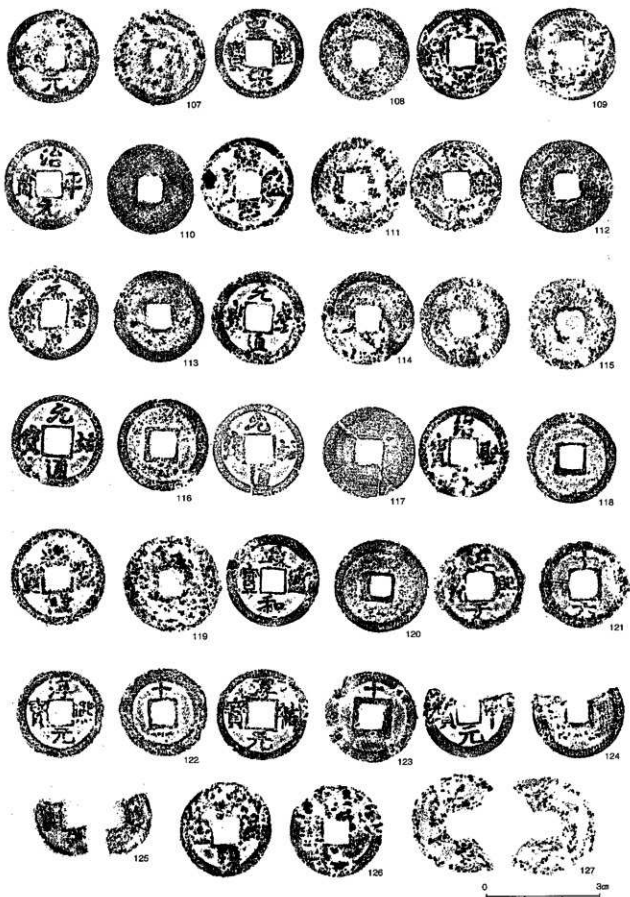
第4-15図 07-SD288出土物実測図④ (1/3)



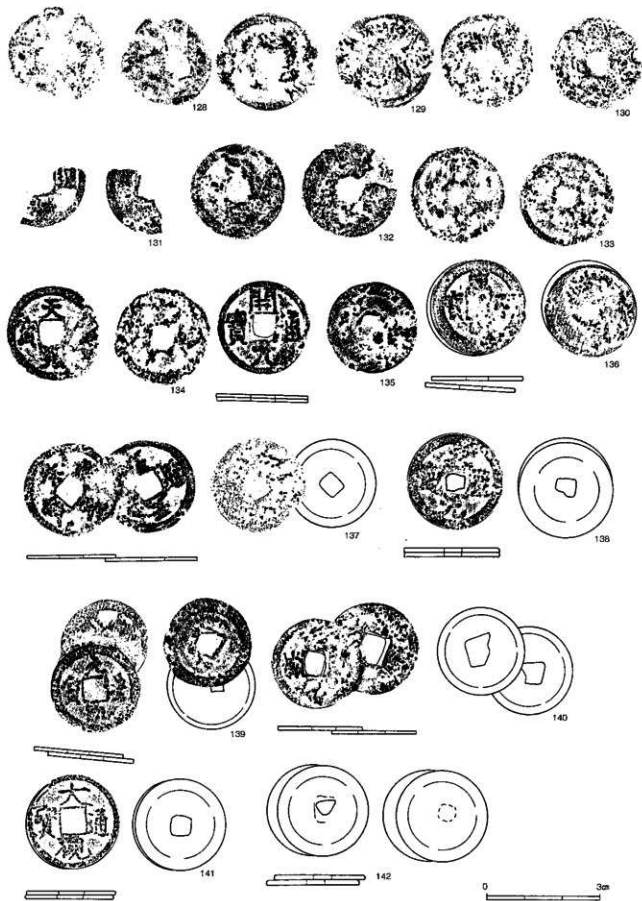
第4-16圖 07-SD288出土遺物実測図⑤ (1/3, 1/4)



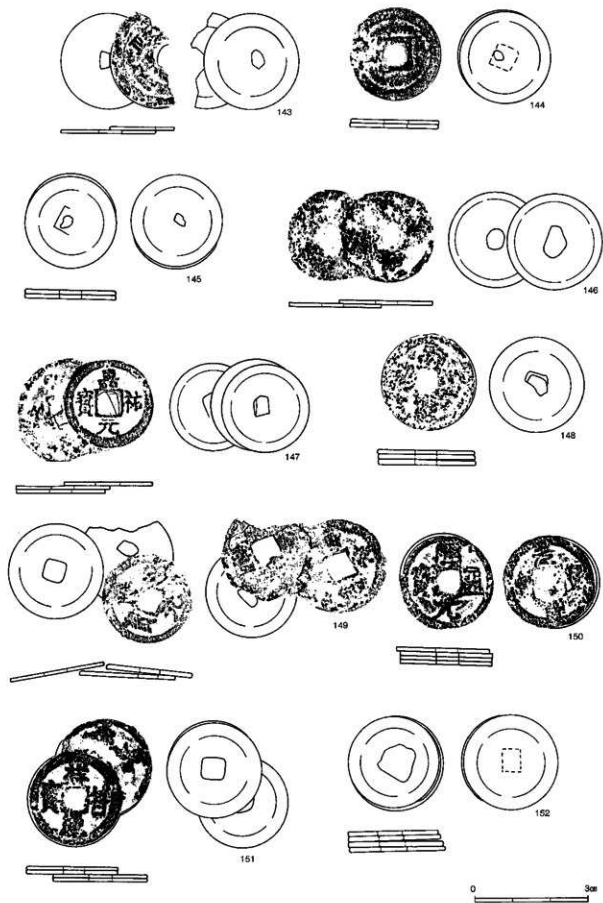
第4-17図 07-SD288出土遺物実測図⑥(1/3、1/1)



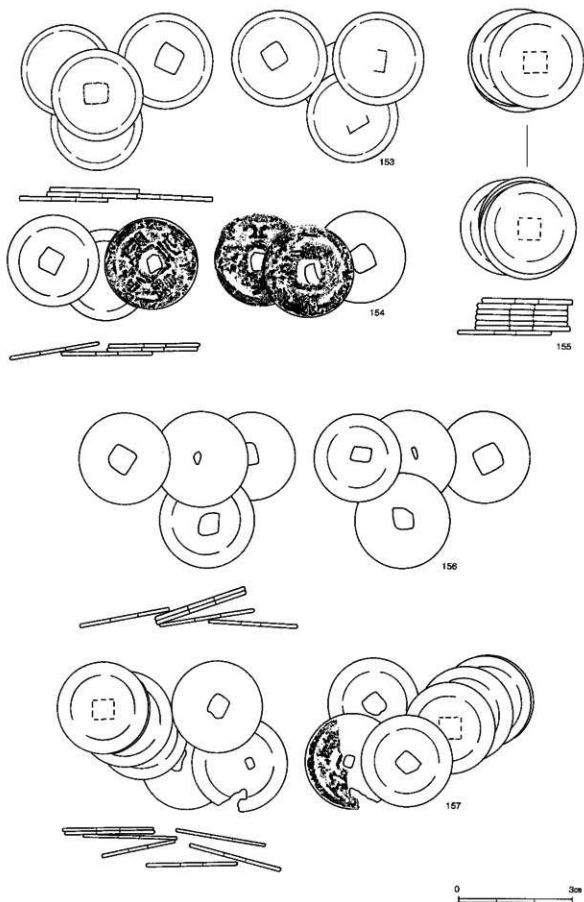
第4-18図 07-SD288出土遺物実測図⑦(1/1)



第4-19図 07-SD288出土遺物実測図⑥ (1/1)



第4-20圖 07-SD288出土遺物実測図①(1/1)



第4-21図 07-SD288出土遺物実測図① (1/1)